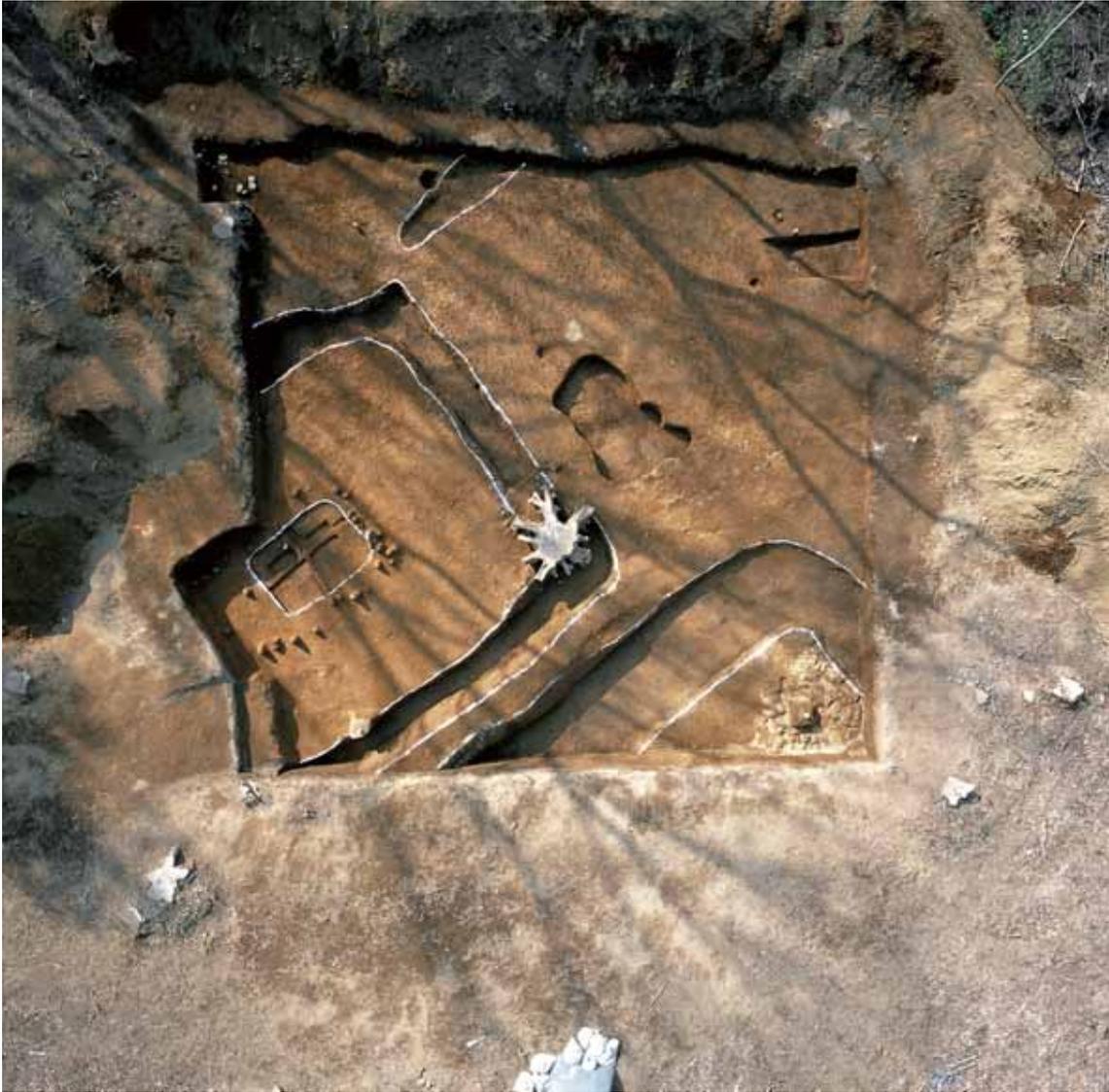


はら やつ
原谷遺跡、
てら うち
寺内遺跡 10次
なか じま
中島遺跡 2次、
にし
西遺跡 3次
いっ ぼん ぎ まえ
一本木前遺跡 6次

東京電力(株)特別高圧送電線路鉄塔用地内遺跡
発掘調査報告書

2010

熊谷市原谷遺跡調査会
埼玉県熊谷市教育委員会



上 原谷遺跡調査区
垂直写真

左 原谷遺跡調査区
鳥瞰写真、東方から



原谷遺跡第 2 号方形周溝墓確認状況



原谷遺跡第 2 号方形周溝墓完掘状況



12-1



12-2



12-3



12-4



12-5



12-6



12-7



12-8



12-9



12-10



12-11



12-12



12-13



12-14



12-15



12-16



12-17



12-18



12-19



12-21

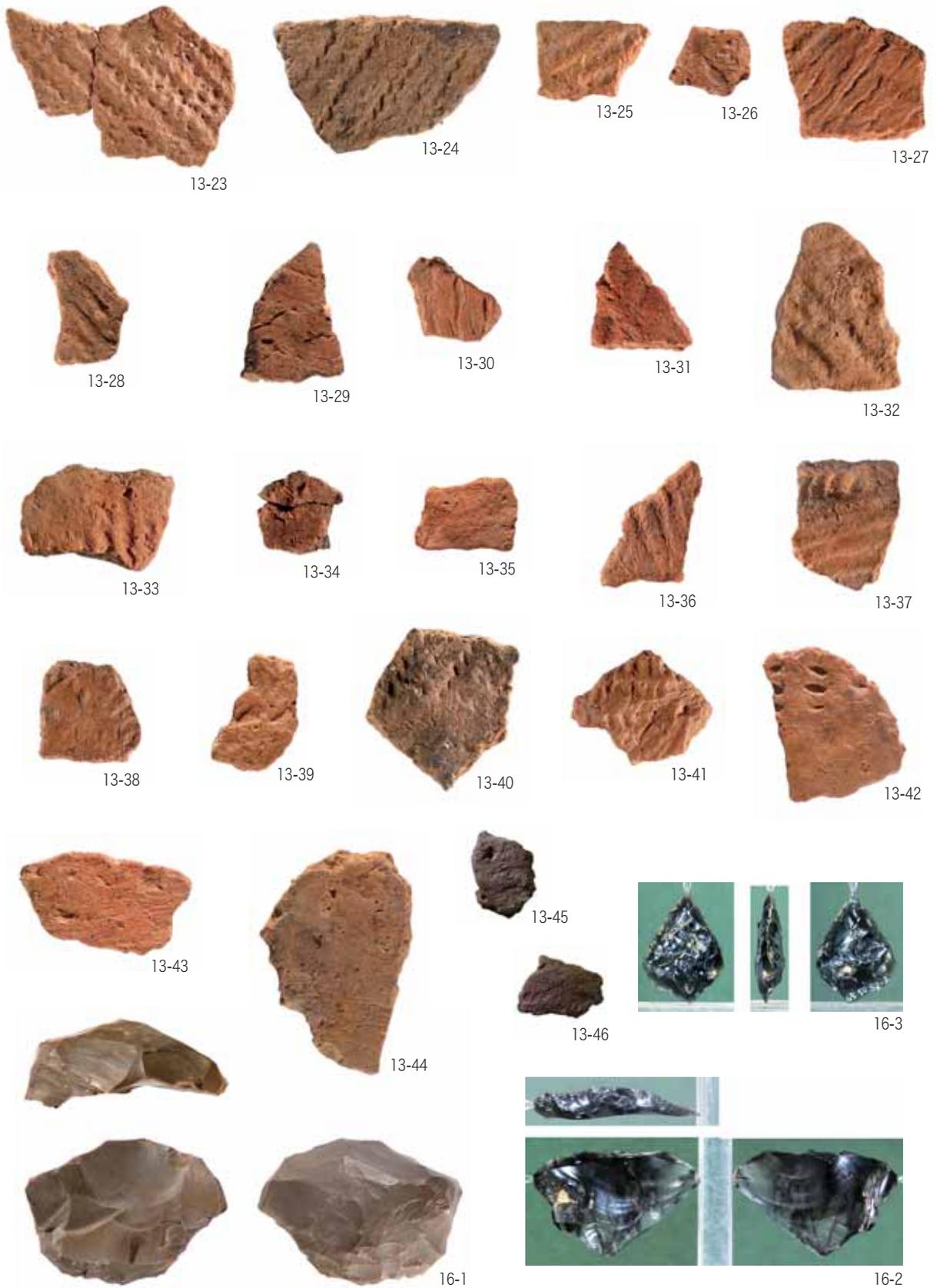


12-20



12-22

原谷遺跡出土縄文時代土器（本文第12図）



原谷遺跡出土縄文時代土器・石器（本文第13・16図）



上 埋没谷造成土



左 谷埋没土の状況・造成土の状況



上 谷埋没土中の火山灰層拡大（白丸は百円硬貨）



第25図 1 ~ 9 縄文土器

序

新熊谷市は埼玉県北部の「中核都市」として、平成21年春に移行しました。妻沼・大里・江南の旧3町と一緒に名実ともに県北最大の都市として新しい道を歩んでおります。

新市は関東随一の大河川である利根川と県土を貫流する荒川の2大河川に育まれた肥沃な大地と多様な生物が生きる豊かな自然が広がり、埼玉でも希少種となったオオタカの営巣する江南の森もあります。

こうした自然環境のもと、新市には先人たちの残した多くの文化遺産が、土地に人に受け継がれています。すでにその多くは後世に伝えるべく、守り伝える保護の施策が図られているところですが、代表的な遺跡では、国指定史跡「宮塚古墳」、埼玉県指定史跡「塩古墳群」・「とうかん山古墳」・「甲山古墳」などの地上に現れる多数の古墳や縄文弥生時代の集落遺跡があります。

そして、地下に埋蔵されている多くの遺跡については、記録保存のため発掘調査を実施し、学術刊行物として埋蔵文化財調査報告書を作成しています。このような文化財保護活動の中で、本書は送電線鉄塔用地に重なる江南台地の原谷・寺内・中島・西の四遺跡と大里沖積地の中に立つ送電線鉄塔用地と重なった一本木前遺跡での発掘調査結果をまとめ報告書として刊行するものです。この調査では、縄文時代草創期に該当する市域最古の土器が確認されるという貴重な成果がありました。今後、本書が郷土研究等の基礎資料として広く活用されることを願います。

刊行に際し、発掘調査及び報告書刊行までに、ご協力をいただいた関係者の皆様には厚くお礼申し上げます。

平成22年3月

熊谷市原谷遺跡調査会長 野原 晃

例 言

- 1 本書は、東京電力㈱特別高圧送電線路鉄塔用地内遺跡にかかる「原谷遺跡・寺内遺跡10次・中島遺跡2次・西遺跡3次・一本木前遺跡6次」の発掘調査報告書である。
- 2 本調査は、東京電力㈱特別高圧送電線路鉄塔の造成・建築工事に伴い事前に実施した記録保存目的の発掘調査である。この遺跡の発掘調査及び整理・報告書作成作業は、熊谷市教育委員会の指導のもと熊谷市原谷遺跡調査会で実施した。
- 3 本事業の組織と経緯は、各「発掘調査の概要」に記載のとおりである。
東京電力㈱特別高圧送電線路鉄塔用地内遺跡にかかる、原谷遺跡の発掘調査期間は、平成21年2月17日から同年3月19日までである。
寺内遺跡10次の発掘調査期間は、平成20年12月11日から同年12月25日の間、及び平成21年1月8日から同年1月19日までである。
中島遺跡2次の発掘調査期間は、平成20年11月7日から同年12月11日までである。
西遺跡3次の発掘調査期間は、平成21年1月19日から同年2月19日までである。
一本木前遺跡6次の発掘調査期間は、平成21年10月5日から同月29日までである。

上記遺跡にかかる整理・報告書作成期間は、平成21年6月1日から平成22年3月15日までである。

遺物の実測図作成に当たっては、新井が指導・加筆修正した。縄文時代草創期土器は写実実測をしている。
- 4 発掘調査の担当は
原谷・西・中島・寺内遺跡を熊谷市教育委員会新井 端が担当した。
一本木前遺跡については、同市教育委員会吉野健の補佐を得た。
整理・報告書作成・本文執筆は熊谷市教育委員会の新井 端が行なった。
- 5 発掘調査における写真撮影は、遺跡の現場写真及び遺物の写真撮影は新井・吉野が行なった。
- 6 本書に関わる資料は熊谷市教育委員会が保管している。また、個々の出土遺物に記した遺跡コード（注記記号）は次のとおりである。
原 谷 遺 跡—65.50～
寺 内 遺 跡 10 次—65.17-10～
中 島 遺 跡 2 次—65.51-2～
西 遺 跡 3 次—65.18-3～
一本木前遺跡6次—21-IPGM～
- 7 本書の作成にあたり、下記の方々及び機関などからご教示、ご協力を賜った。記して感謝申し上げます。
栗島義明 金子直行 森田安彦 森下昌市郎 菅谷浩之 長谷川一郎 原野真祐

凡 例

本書における挿図指示は次のとおりである。

- 1 挿図縮尺は、各挿図中に示してある。

遺構の略記号は次のとおりである。

S I 竪穴住居跡 S S 集石土壇 S K 土壇 S D 溝 S E 井戸

- 2 挿図中、断面図に添えてある数値は標高を示している。

- 3 挿図中の遺物の縮尺は、次のとおりである。

土器片・土器…1・1・1／3・1／4・1／6

石器・石製品…1／1・1／3・1／4

土製品・滑石製模造品・古銭…1／1 瓦・石製品…1／4

- 4 遺物実測図の表現方法は、以下のとおりである。

土師器・須恵器・土器・石器断面 白抜き

灰釉陶器・断面 アミ目懸

回転糸切り

回転ヘラ削り \

回転ヘラナデ

- 5 挿図中の遺物はすべて観察表にその内容を記してある。計測数値中、()が付されるものは推定値を表す。

- 6 遺物拓影図は、原則として向って左側に外面を示した。なお、内外面両方を示す場合には左側に内面、右側に外面を示した。

- 7 写真図版の遺物縮尺はすべて任意である。

- 8 土層及び土器の色調は、『新版標準土色帖第14版』（小山正忠・竹原秀雄編著、農林省農林水産技術会議事務局監修、財団法人日本色彩研究所色標監修、日本色研事業株式会社発行1994）を参考にした。

石材の鑑定については、海野芳聖氏にご教示を得た。

目 次

序	
例 言	
凡 例	
目 次	
I 発掘調査の契機とその概要	1
II 原谷遺跡の調査	7
1 遺跡の立地と環境	7
2 検出された遺構と遺物	7
III 寺内遺跡10次の調査	39
1 遺跡の立地と環境	39
2 検出された遺構と遺物	41
IV 中島遺跡2次の調査	49
1 遺跡の立地と環境	49
2 検出された遺構と遺物	50
V 西遺跡3次の調査	67
1 遺跡の立地と環境	67
2 検出された遺構と遺物	67
VI 一本木前遺跡6次の調査	81
1 遺跡の立地と環境	81
2 検出された遺構と遺物	85
VII 自然科学分析報告	91
1 寺内遺跡の自然化学分析	91
2 寺内遺跡における放射性炭素年代	100
VIII 小 結	104
図 版	
原谷遺跡	
寺内遺跡10次	
中島遺跡2次	
西遺跡3次	
一本木前遺跡6次	
報告書抄録	

挿図目次

口絵1	原谷遺跡調査区垂直写真・鳥瞰写真		
口絵2	原谷遺跡第2号方形周溝墓確認状況・完掘状況		
口絵3	原谷遺跡出土縄文時代土器		
口絵4	原谷遺跡出土縄文時代土器・石器		
第1図	調査遺跡と周辺主要遺跡の分布	2	
第2図	原谷遺跡発掘調査位置図	8	
第3図	原谷遺跡地形測量図	9・10	
第4図	原谷遺跡出土遺物	11	
第5図	原谷遺跡遺構配置図	13	
第6図	原谷遺跡第1号方形周溝墓実測図	14	
第7図	原谷遺跡第2号方形周溝墓実測図	15	
第8図	原谷遺跡第2号方形周溝墓主体部・第3号方形周溝墓・第1号集石・第1号土壇実測図	17	
第9図	原谷遺跡第1、2、3号方形周溝墓・土壇出土遺物	19	
第10図	原谷遺跡一括出土遺物	20	
第11図	原谷遺跡包含層遺物出土状態	21	
第12図	原谷遺跡包含層出土遺物1	23	
第13図	原谷遺跡包含層出土遺物2	24	
第14図	原谷遺跡包含層出土遺物3	25	
第15図	原谷遺跡包含層出土遺物4	26	
第16図	原谷遺跡包含層出土石器	28	
第17図	原谷遺跡包含層出土石器	29	
第18図	原谷遺跡包含層出土石器	30	
第19図	原谷遺跡包含層出土石器	31	
第20図	原谷遺跡第1号集石出土石器	32	
第21図	原谷遺跡第1号集石出土石器	33	
第22図	寺内遺跡・中島遺跡・西遺跡発掘調査位置図	40	
第23図	寺内遺跡10次遺構配置図	42	
第24図	寺内遺跡10次土層断面図	44	
第25図	寺内遺跡10次包含層出土遺物	45	
第26図	中島遺跡2次遺構配置図	51	
第27図	中島遺跡2次第1号住居跡・カマド跡	52	
第28図	中島遺跡2次第1号住居出土遺物	54	
第29図	中島遺跡2次第1号住居出土遺物	55	
第30図	中島遺跡2次第2号住居跡・カマド跡	56	
第31図	中島遺跡2次第2号住居跡出土遺物・調査区一括	57	
第32図	中島遺跡2次一括出土遺物	58	
第33図	中島遺跡2次一括出土遺物	60	
第34図	中島遺跡2次一括出土遺物	61	
第35図	西遺跡3次遺構配置図	68	
第36図	西遺跡3次第1号住居跡・カマド跡	70	
第37図	西遺跡3次第2号住居跡・土壇・埋没谷土層	71	
第38図	西遺跡3次第1号溝・土壇土層図	72	
第39図	西遺跡3次第1号住居出土遺物	74	
第40図	西遺跡3次第1、3号住居・土壇・一括出土遺物	75	
第41図	西遺跡3次出土遺物	76	
第42図	一本木前遺跡発掘調査位置図	82	
第43図	一本木前遺跡6次遺構配置図	83	
第44図	一本木前遺跡6次第1号住居跡	84	
第45図	一本木前遺跡6次第1号土壇	86	
第46図	一本木前遺跡6次出土遺物1	87	
第47図	一本木前遺跡6次出土遺物2	88	
第48図	一本木前遺跡6次出土遺物3	89	

図1・表1 火山ガラスの屈折率 表2 珪藻分析結果
図2 主要珪藻化石群集 表3 花粉分析結果
図版1 テフラ・花粉化石 表4 種実分析結果
図版2 珪藻化石・種実遺体 図1 暦年較正年代グラフ
図版3 分析資料

表目次

第1表	発掘調査工程表	3	
第2表	原谷遺跡方形周溝墓・土壇 出土遺物観察表	20	
第3表	原谷遺跡一括出土遺物観察表	20	
第4表	原谷遺跡包含層出土遺物観察表	34	
第5表	原谷遺跡包含層出土遺物観察表	34	
第6表	原谷遺跡包含層出土遺物観察表	36	
第7表	原谷遺跡第1号集石出土石器観察表	36	
第8表	寺内遺跡10次出土遺物観察表	45	
第9表	中島遺跡2次第1号住居跡出土遺物観察表	62	
第10表	中島遺跡2次第2号住居跡出土遺物・調査区一括出土遺物観察表	62	
第11表	中島遺跡2次一括出土遺物観察表	63	
第12表	西遺跡3次出土遺物観察表	77	
第13表	西遺跡3次出土遺物観察表	78	
第14表	一本木前遺跡6次出土遺物観察表	90	

写真図版

図版1	原谷遺跡 航空写真	
図版2	原谷遺跡 第2号方形周溝墓発掘状況	
図版3	原谷遺跡 第1・2号方形周溝墓発掘状況	
図版4	原谷遺跡 第2・3号方形周溝墓発掘状況・第1号 集石	
図版5	原谷遺跡 包含層出土遺物	
図版6	原谷遺跡 包含層出土遺物	
図版7	原谷遺跡 包含層出土遺物 石器	
図版8	原谷遺跡 包含層出土遺物 石器	
図版9	原谷遺跡 包含層出土遺物 石器	
図版10	寺内遺跡 調査区の状況	
図版11	寺内遺跡 調査区状況・出土遺物	
図版12	寺内遺跡 調査区出土遺物	
図版13	中島遺跡 第1・2号住居跡 発掘状況	
図版14	中島遺跡 第1・3号住居跡 出土遺物	
図版15	中島遺跡 包含層 出土遺物	
図版16	西遺跡 調査区発掘状況	
図版17	西遺跡 第1号住居跡発掘状況	
図版18	西遺跡 第2号住居跡発掘状況	
図版19	西遺跡 第1・2号住居跡出土遺物	
図版20	一本木前遺跡 調査区・発掘状況	
図版21	一本木前遺跡 第1号住居跡 出土遺物	
図版22	一本木前遺跡 第1号住居跡 出土遺物	

I 発掘調査の契機とその概要

調査にいたる経過 原谷遺跡・寺内遺跡・中島遺跡・西遺跡の発掘調査については、同一協議の中で実施されたものであることから、本節において調査にいたる経過をまとめて記す。調査原因となった送電線路の新設は、平成19年11月に東京電力株式会社埼玉工事センターより送電線路の路線決定について協議が持たれたことに始まる。この送電線路の新設は熊谷市域を通る東京電力株式会社小川線送電線路から分岐させ、深谷市域の工場へ電力を供給するために新たに設置を計画された送電線路である（第1図A-B-C-D）。

同社との協議の中で、市教育委員会の要望として遺跡の少ない台地下の路線を妥当としていたが、台上を通る路線の決定が20年5月に伝えられた。計画路線上には、重要遺跡寺内廃寺をはじめ多くの遺跡が該当することや、史跡地が送電線下になる恐れもあり、鉄塔建設位置や路線の通過位置の最終決定について再度協議のうえ調整をはかり、同年10月に熊谷市と東京電力(株)間で埋蔵文化財の保存について協定を締結した。この協定では、鉄塔位置の決定について、寺内廃寺の伽藍地内を通過する線下を通らないこと、遺跡周辺部に建設地をあてることなどで最終決定し、工事前に熊谷市教育委員会で試掘調査を実施したうえで発掘調査を計画することとした。

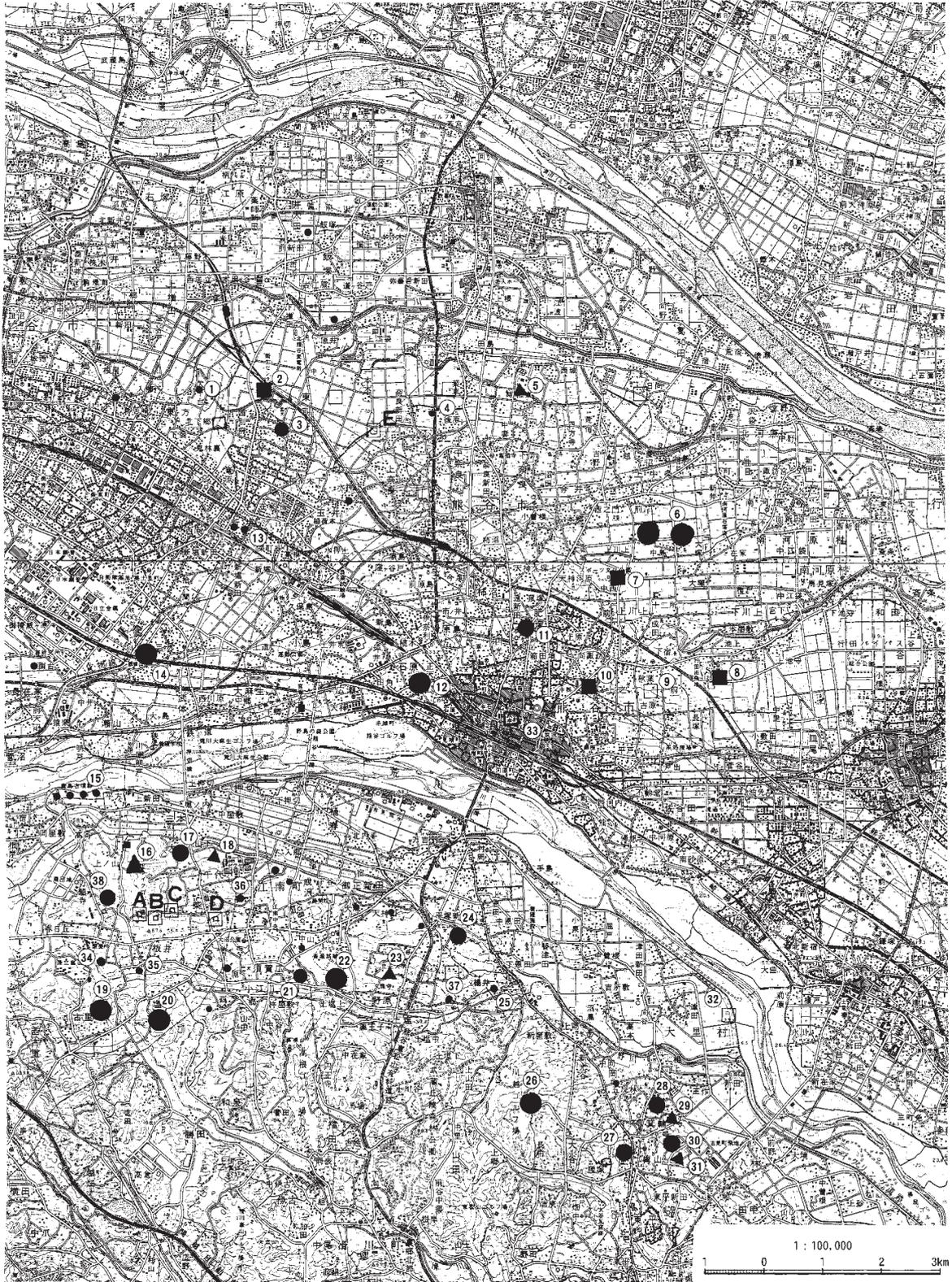
鉄塔建設予定地は市内8か所で原谷遺跡とその隣接地2箇所、在家遺跡隣接地、西遺跡とその隣接地2箇所、中島遺跡、寺内遺跡、天神遺跡隣接地であったが、試掘調査を実施できた箇所は5地点で、その結果4か所は発掘調査の対象外となった。発掘調査予定遺跡は東から「原谷遺跡」「西遺跡」「中島遺跡」「寺内遺跡」の4か所であった。送電線鉄塔の構造上、地下深部に及ぶ基礎工事により埋蔵文化財の保存は不可能であることから、事業者からは平成20年9月25日付で、文化財保護法第93条による埋蔵文化財発掘届の提出を受け、工事前に記録保存目的の発掘調査を実施することとした。

なお、遺跡部分はすべて山林地であり、この山林地域には従前からオオタカの営巣が知られていた。21年も営巣の可能性があり、営巣期間とされる2月～8月の間は付近での土木工事や人間の作業は避けるようにとの埼玉県自然保護条例を元にした指導があるとのことから、オオタカの営巣圏内に該当する「西遺跡」「中島遺跡」「寺内遺跡」地点での発掘調査期間は平成20年11月～21年1月までの間に限定されるとの制約も伝えられた。2月までの間で三地点の発掘調査を完了するためには11月中の調査開始が必須であった。また、試掘を行えなかった調査対象地の樹木伐採・取り片づけに要する期間、事務所の設置などの現地作業の手順、オオタカの営巣との関係を斟酌し、発掘順は「中島遺跡」「寺内遺跡」「西遺跡」を順次1月末までに終了させ、区域外の「原谷遺跡」は2月中に実施することとした。

発掘調査の体制については、年度内に着手することとなるため緊急的な調査体制を組む必要から、市教育委員会内に「原谷遺跡調査会」を設立し、11月5日付で事業者側と委託契約をおこない発掘調査に着手した。発掘調査通知は、同調査会名で平成20年11月4日に提出を受け、発掘調査実施の市教育委員会副申を添えて県教育委員会へ進達した。発掘調査・整理報告作業の実務は新井 端が担当した。

原谷遺跡調査会組織は次のとおりである（（ ）内は21年度異動）。

原谷遺跡調査会	会 長	野原 晃	熊谷市教育委員会教育長
	同 副会長	大山整治（柴崎 久）	熊谷市教育委員会次長
	同 理 事	菅谷浩之	熊谷市文化財保護審議会会長
	同 理 事	花見和則	東京電力株式会社 埼玉工事センター



第1図 調査遺跡と周辺主要遺跡の分布(1/10万) ▲縄文 ■弥生 ●古墳 □奈良・平安

同 監 事 小林常男 熊谷市教育委員会教育総務課長
 同 監 事 松谷靖浩 (小熊重幸) 東京電力株式会社 埼玉工事センター
 同 事務局長 関口和佳 (斉木千春) 熊谷市教育委員会教育社会教育課長
 同 事務局次長吉田高一 (小林英夫) 熊谷市教育委員会社会教育課文化財保護担当副参事
 同 事務局員 新井 端 熊谷市教育委員会社会教育課副課長
 同 金子正之 熊谷市教育委員会社会教育課主幹兼文化財保護係長
 同 吉野 健 熊谷市教育委員会社会教育課主査

発掘調査・整理報告作業の経過 発掘調査は次表のとおり順次四地点について実施した。なお、調査にいたる経過、発掘調査・整理報告作業の経過について一括して本節で説明し、個々の章では説明を省く。

第1表 発掘調査工程表

工程・遺跡	原谷遺跡	寺内遺跡	中島遺跡	西遺跡
現地作業	21年2月18日	20年12月8日	20年11月5～7日	21年1月19日
準備	17, 18日	9日	7日	19, 20日
表土除去	18日	10日	11月11日	21日
遺構確認	19, 23日	10, 11日	11, 12日	21, 22日
機材搬入	18日	10日	12日	20日
遺構掘下げ	2月19～26日	12月11～22日	11月19～28日	1月22～29日
遺構実測	3月2～16日	21年1月8～20日	12月1～10日	2月2～18日
写真撮影	～16日	～20日	～10日	～18日
機材搬出	3月16日	1月19, 20日	12月10日	2月17日
事後処理 根処分	3月19日	1月21日	12月11日	2月18, 19日
検出された遺構	方形周溝墓 3基 土壇	遺物包含層 埋没谷	平安時代竪穴住居跡 2軒 土壇	平安時代竪穴住居跡 3軒 土壇 7基 溝 1条

調査の方法 原谷・寺内・中島・西遺跡の調査地点はみな現況山林で、立木や下草が生い茂っていた。試掘調査以前に立木伐採・下草取片付けを行い、根株間に試掘坑を開け遺構確認を行なったが、表土が30から50cmと浅く、遺構確認面にほとんどの根株が食い込んでいることが見て取れたため、直径30cm程度の株は機械力で抜き取らず発掘調査に移行する段階で、発掘調査の進行とともに人力での抜根作業を進めた。

調査区は送電鉄塔用地となる一辺10～12m方形の敷地であるが、調査区毎に座標位置・水準点を測量して設定した。また、発掘調査終了時の遺構平面図の作成も委託した。

なお、平成21年度途中で同一事業者が行う妻沼線送電線路の改修工事が行われることがわかり、遺跡地に該当する送電線鉄塔1基について、敷地拡張部分の試掘調査を実施したところ、古墳末期の竪穴住居跡が検出された。その取り扱いについては、原谷遺跡調査会の平成21年度追加の受託事業分として、発掘調査及び整理報告書作成作業を行うことで協議を進め、現地発掘調査は10月に実施している。本書報告の一本木前遺跡6次として報告する。

整理報告作業 整理報告書作成作業については、発掘調査内容や出土遺物量をもとに事業内容を計画し、平成21年度実施分の熊谷市教育委員会内原谷遺跡調査会の受託事業として行った。

次節では、遺跡の環境・調査成果について各遺跡毎に取り上げ説明していく。

遺跡名称 (第1図と照合)

地図番号・記号	名称	時代	所在	概要・遺構—出土遺物ほか
A	寺内遺跡	縄文～奈良・平安	柴	寺内廃寺 伽藍跡 花寺 塑像 瓦
B	中島遺跡	縄文～奈良・平安	板井	寺内廃寺 参道跡 集落
C	西遺跡	縄文～奈良・平安	柴	寺内廃寺 集落
D	原谷遺跡	縄文～古墳	柴	集落 方形周溝墓 縄文時代草創期土器
E	一本木前遺跡	弥生～奈良・平安	奈良	集落 方形周溝墓 鏡
1	幡羅遺跡群	奈良・平安	西別府	幡羅郡衙 西別府廃寺 祭祀遺跡
2	横間栗遺跡	弥生	西別府	弥生時代中期 再葬墓
3	西別府古墳群	古墳	西別府	
4	横塚山古墳	古墳	奈良	前方後円墳
5	西城切通遺跡	縄文～奈良・平安	西城	集落 縄文後期 晩期
6	中条大塚古墳	古墳	中条	截石組横穴式石室古墳 金箔漆棺
7	北島遺跡	縄文～奈良・平安	上之	弥生時代中期 集落 古墳 古代集落
8	池上遺跡	縄文～奈良・平安	池上	弥生時代中期 集落 方形周溝墓 古代集落
9	諏訪ノ木遺跡	古墳～中世	上之	古墳時代 祭祀 古代集落 埋蔵銭
10	前中西遺跡	弥生～奈良・平安	上之	方形周溝墓 集落
11	肥塚古墳群	古墳	肥塚	
12	石原古墳群	古墳	石原	
13	籠原裏古墳群	古墳	籠原	八角形古墳
14	三ヶ尻古墳群	古墳	三ヶ尻	横穴式古墳 埴輪
15	鹿島古墳群	古墳	平方	河原石積横穴式古墳 埴輪 鉄製武器
16	西原遺跡	縄文中期	千代	加曾利EIV式期集落
17	権現坂埴輪製作跡	縄文～古墳	千代	埴輪窯跡 粘土採掘跡 工房跡
18	宮下遺跡	縄文～奈良・平安	千代	集落 縄文後期 古代集落
19	古里古墳群	古墳	古里	横穴式古墳 埴輪 尾根横穴墓
20	塩古墳群	古墳	塩	前記古墳 前方後方墳 方墳
21	本田・東台遺跡	古墳	須賀広	集落 小鍛冶
22	野原古墳群	古墳	野原	横穴式石室 埴輪
23	鹿島遺跡	旧石器～縄文	野原	ナイフ形石器 早期集落
24	瀬戸山遺跡	古墳	吉岡	瀬戸山古墳群 集落
25	薬師塚古墳	古墳	楊井	截石組横穴式石室古墳
26	雷電山古墳	古墳	大谷	帆立貝型前方後円墳 三千塚古墳群
27	甲山古墳	古墳	冑山	直径90m円墳
28	とうかん山古墳	古墳	箕輪	長さ76m前方後円墳
29	中廊遺跡	縄文	箕輪	縄文時代 後期～晩期 土偶 土面
30	円山遺跡	弥生～奈良・平安	箕輪	古墳 方形周溝墓 宮ノ台式 古代烙印
31	東山遺跡	縄文～古墳	冑山	集落 東山古墳群
32	下田町遺跡	弥生～奈良・平安	津田	集落 子持勾玉
33	熊谷本町遺跡	奈良・平安～中世	本町	集落
34	立野古墳群	古墳	板井	截石組横穴式石室 杏葉 鉄製武器
35	岩比田遺跡	奈良・平安	板井	集落 円面硯
36	萩山遺跡	縄文	千代	早期撚糸文期集落
37	丸山遺跡	奈良・平安	野原	古代集落 江南断層
38	百済木遺跡	古墳・奈良	本田	居館の集落、竪穴住居、堀立柱建物

はら やつ 遺 跡
原 谷 遺 跡



II 原谷遺跡の調査

1. 遺跡の立地と環境 (第1・2図)

遺跡の範囲は東側が市街化されており、確認が困難だが旧地形では現江南行政センター西側に浅い谷が入ることからこの付近までとしている。西側も同様に谷地形で区分し北側は水路まで、南側は台地中央部分までとするが、連続する南側方向に関しては未確認でありさらに拡張する余地がある。谷を介した北側に広がる萩山遺跡では縄文時代早期撚糸文期を中心とした集落が調査されており、僅かではあるが縄文時代草創期の爪型文系土器が出土している。遺跡範囲のほとんどが山林内に広がる原谷遺跡の発掘調査は今回が初めてであるが、昭和58年の旧江南町道建設工事に際し遺物等の出土があり、縄文時代早期、古墳時代前期を中心とする土器・石器から集落遺跡と予想されていた(第2図)。この際の出土遺物は、平成5年刊行の『江南町史資料編1 考古』に原谷遺跡として出土遺物とともに報告している(第4図)。遺物の中で縄文時代早期に判定される板状三角形土偶(第4図19)、撚糸文土器、山形押形文土器、古墳時代前期のS字状口縁台付甕形土器、小形器台などが見られた。遺構は明確に確認できなかったが、住居跡などの存在が想定された。この道路の南側に位置する工場の敷地拡張に伴う試掘調査を平成19年6月に行った際には時期不詳の土壌数基が確認されたのみで、ほとんど遺物は出土していなかった。工場部分が台地平面の最頂部付近に当たり、西北側に緩やかに下降傾斜する斜面地になるため、古墳時代の集落遺構などは北側から西側に広がる谷に面した斜面地部分であろうと予想していた。

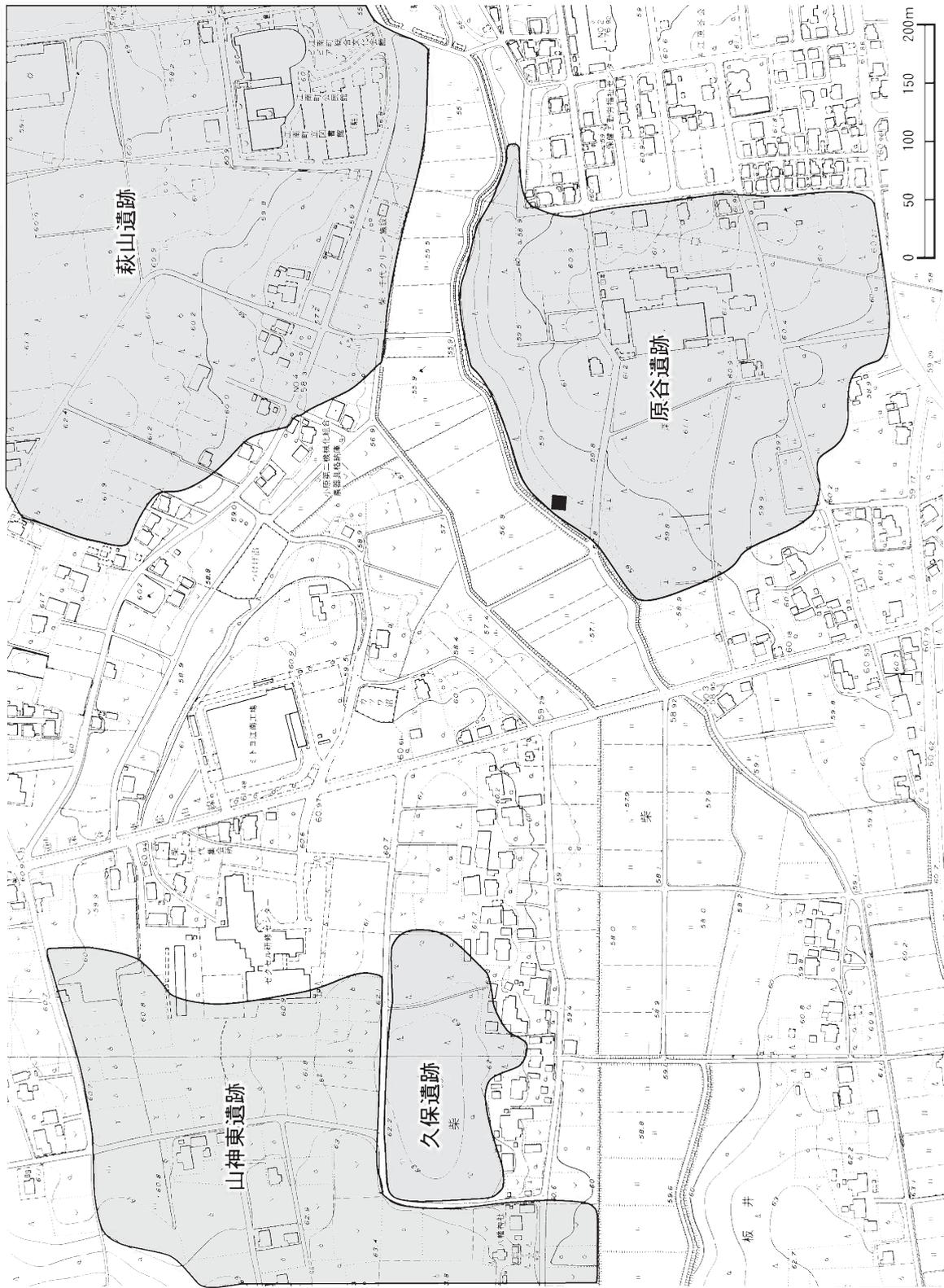
今回の調査地点も谷斜面の中位に位置し、遺跡部分の北端部に当たり、侵食された小谷と微隆起伏の高まりが斜面地に散在する人工的な印象の残る地形部分であった。地名の「原谷」は高燥・低平な当地の性状に由来するものであろう。この林地は第二次大戦後に開墾が試みられたが、昭和40年代に開墾地のほとんどはかつての山林又は市街地に変貌している。ただ、かつての開墾地を守るため帯状に残された防風林が街区に沿って一部その姿を留めていることから、比較的良好な里山として保存されてきた。

調査地点は地籍上江戸時代以来の山林地で、現況も40～50年生の灌木や喬木の茂る林であった。谷を揚がる北風をまともに受けるこの部分では、居住にも耕作地としても不向きであったと思われるが、薪炭・堆肥を獲得する里山として利用が続けられている。なお、江南地域の台地平坦面では近世集落から現代までの居住地の選択を見ても、水手の得にくい台地中央部分では集落などの展開は避けられたようで、谷に面した南斜面は無論であるが北斜面地での集落の展開が見られる。千代地区の南方遺跡でも縄文時代早期・中期の集落を調査しており江南台地域の特徴といえるかもしれない。

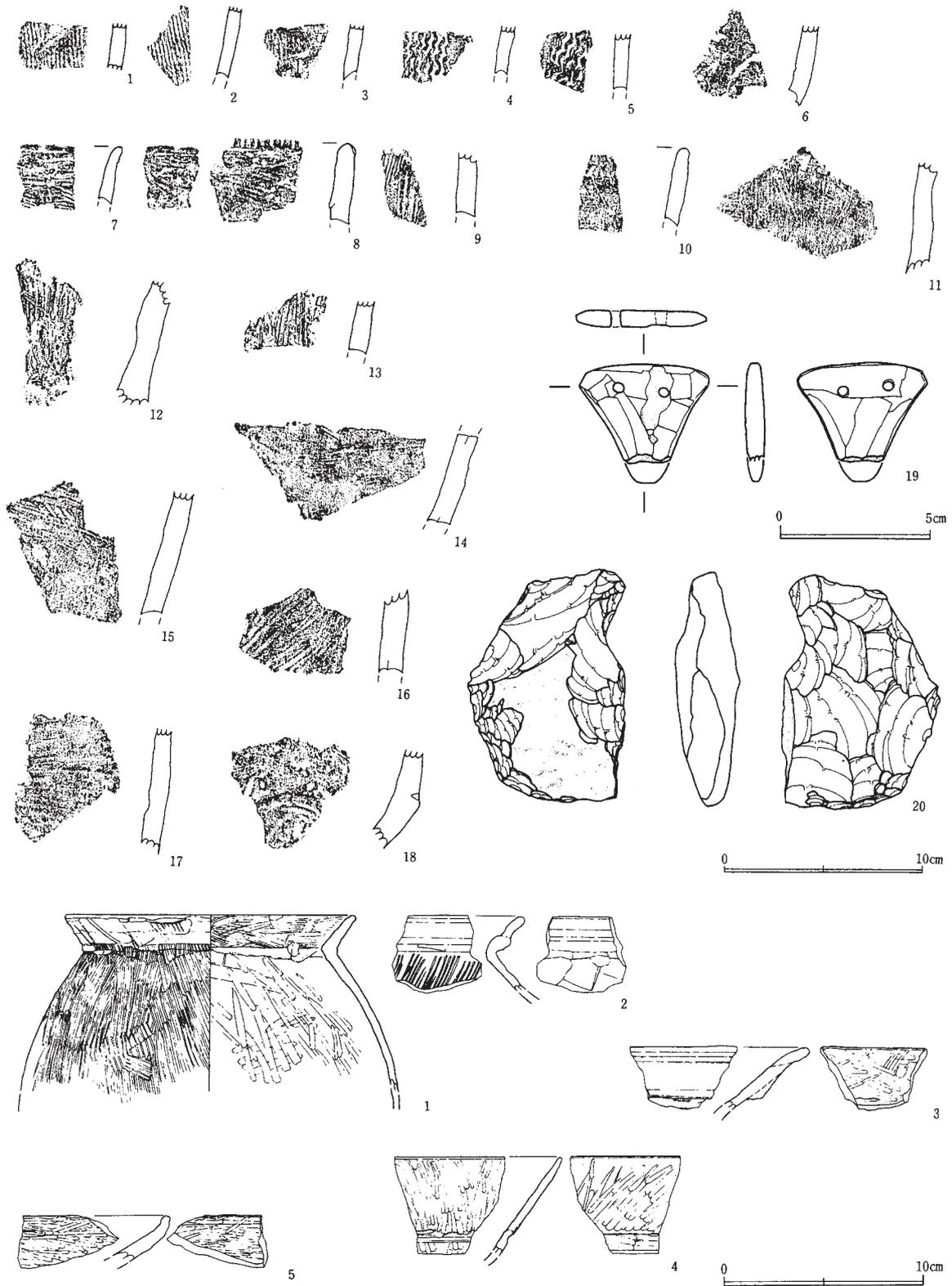
2. 検出された遺構と遺物

1) 遺構について

調査地点の概要 (第3図) 発掘調査では薄い表土を除くと遺物を含むローム土となり斜面下位では硬質ローム面が顕出してしまう状況だが、上・中位では表土・軟質ロームの堆積があり、土器・石器の出土があったことから、鉄塔基礎範囲の全面を発掘調査対象地とし、全面的表土除去を行い遺構確認のうえ発掘調査を実施した。確認された主要な遺構は、古墳時代前期の方形周溝墓3基でそれぞれ周溝の一部を発掘している。3基の主軸はほぼ同一であるが規模が異なり、1号周溝墓と2、3号とでは前者の規模が勝っている。2、3号は規模が小さく周溝を共用している可能性がある。1号周溝墓は調査区外に当たるが、中心部より南側にかけては墳丘上の高まりが見られる(53.60m)。周溝墓の墳丘が残っているとすると、周囲に散在すると



第2図 原谷遺跡発掘調査位置図(1/5000) ■発掘調査地点



第4図 原谷遺跡出土遺物(1/3)『江南町史1考古資料編』掲載図より転載

と思われる方形週溝墓群の埋没が想定される。なお、第2号周溝墓では埋葬主体部と思われる掘り込みを確認している。遺物は土器碎片のほかはほとんど見られなかった。周溝墓同士の切り合が確認されず、出土遺物も少ないので互いの新旧関係は明瞭ではないが、占地状況から1号→2号→3号の順を想定している。

縄文時代早期の遺物包含層は、方形周溝墓の墳丘盛土によって流失を免れ保存されてきたことが窺え、墳丘外ではほとんど遺物が検出されず、硬質ローム土が現れてしまうことと対比している。他に時代不詳の不整形土壌が1基検出され、調査区の北側では谷地形が現れた。遺物は縄文時代草創期から早期の土器・石器の分布が見られたが、当該期の遺構は見つからなかった。

第1号方形周溝墓 SZ 1 (第3図・第5図・第6図)

墳丘 調査区の北東隅部において、周溝墓の北西部隅部を検出している。墳丘は一部分を検出しているが、旧表土面からの盛土が4層から5層に約30cm認められた。いずれも軟質層で水平的盛土が認められる。周溝軸の北方位を主軸とするとN-27°-Wを示す。平面形態は隅部が整った方形をなすことから、調査区域外の隆起部分までを残丘とすると一辺18~20mほどの方形周溝墓であろうと考えられる。この残丘部は8×6mの範囲で52.70m付近から約1m隆起をしている。現地地形が北向き斜面となっている状況でこのような隆起は方形周溝墓の残丘と考えてよいと思われる。

周溝 周溝は検出部で幅約2.1m、ほぼ同じ幅で墳丘を巡ると思われる。北西部隅部は周溝底が掘り残し状に浅くなり、橋状になっていたようだ。西側周溝底部は平坦であり、墳丘側(内方)は38°外方は78°の傾きで立ち上がる。周溝覆土は黒色土が主体で墳丘側および斜面上位である南側から流れ込んでいる。

遺物 覆土全般から縄文時代遺物が認められるが周溝北西部隅部の墳丘寄りから、土師器壺形土器が出土した。試掘時に破損してしまっただが、ほぼ完存状態であったことが窺われ本周溝墓に供献された遺物と判断している。本例以外に完存する周溝内からの遺物はなく、台付甕脚部などの小片が周溝覆土中から出土している。覆土の中・上層に大型の礫を含むが、後世の流入と思われる。

第2号方形周溝墓 SZ 2 (第5図・第6図・第7図・第8図)

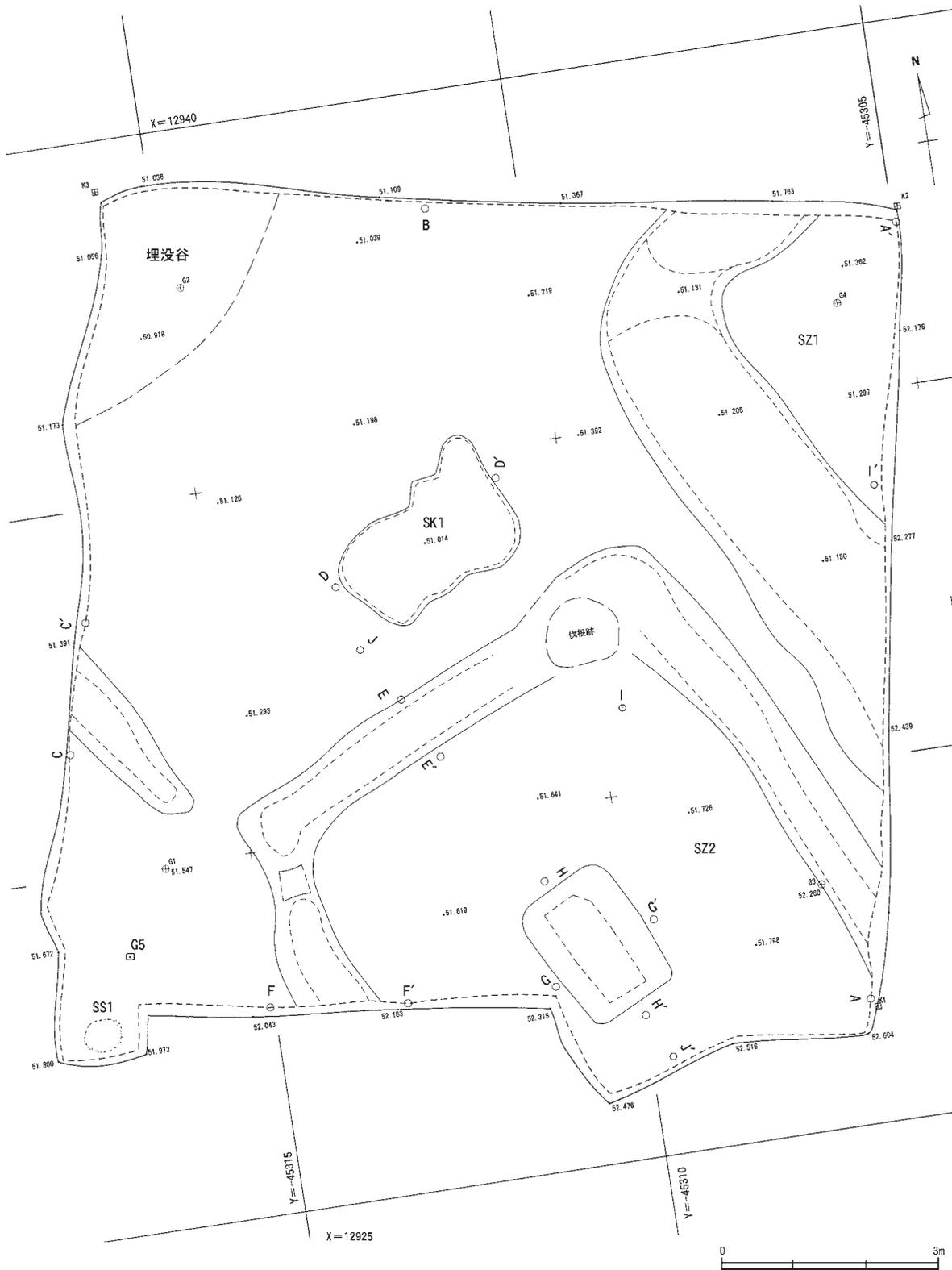
墳丘 現況では墳丘の高まりは全く認められなかったが、方形周溝墓の北辺から東西辺の大半、および埋葬主体部を調査している。南辺、南東・南西部隅部は調査区外となっている。埋葬主体部が墳丘の中心に位置すると仮定した場合、墳丘の規模は東西8.0m×南北8.2mほどの方形となる。1号方形周溝墓と並列して構築されている状況であり、周溝軸・埋葬主体部軸とも北方位を主軸とするとN-30°-Wを示す。

腐植土の除去とともに、地表下約30cmで縄文時代の包含層となったことから、墳丘盛土との区分が困難で、この包含層は8~10cmの薄層であった。墳丘盛土に際しては旧表土の除去を伴う整地作業をしていたようであるが、縄文時代遺物包含層が方形周溝墓墳丘範囲のみに認められることから、かつての方形周溝墓墳丘によりかろうじて保存されたようだ。この包含層は周溝外や埋葬主体部部分に分布が見られないことからも了知される。

埋葬主体部 埋葬主体部は周溝墓の中央に主軸方位を合わせ、平面が2.1×1.6mの方形掘方を呈し、中心部からやや西寄りに棺を埋納している。主軸は周溝墓の溝軸と同一であり、埋納の規模から棺の大きさは約1.43×0.58mであり、板材の痕跡や底面が平坦であることなどから、箱式の木棺を使用していたものと考えている。なお、礫以外に出土遺物は認められなかった。

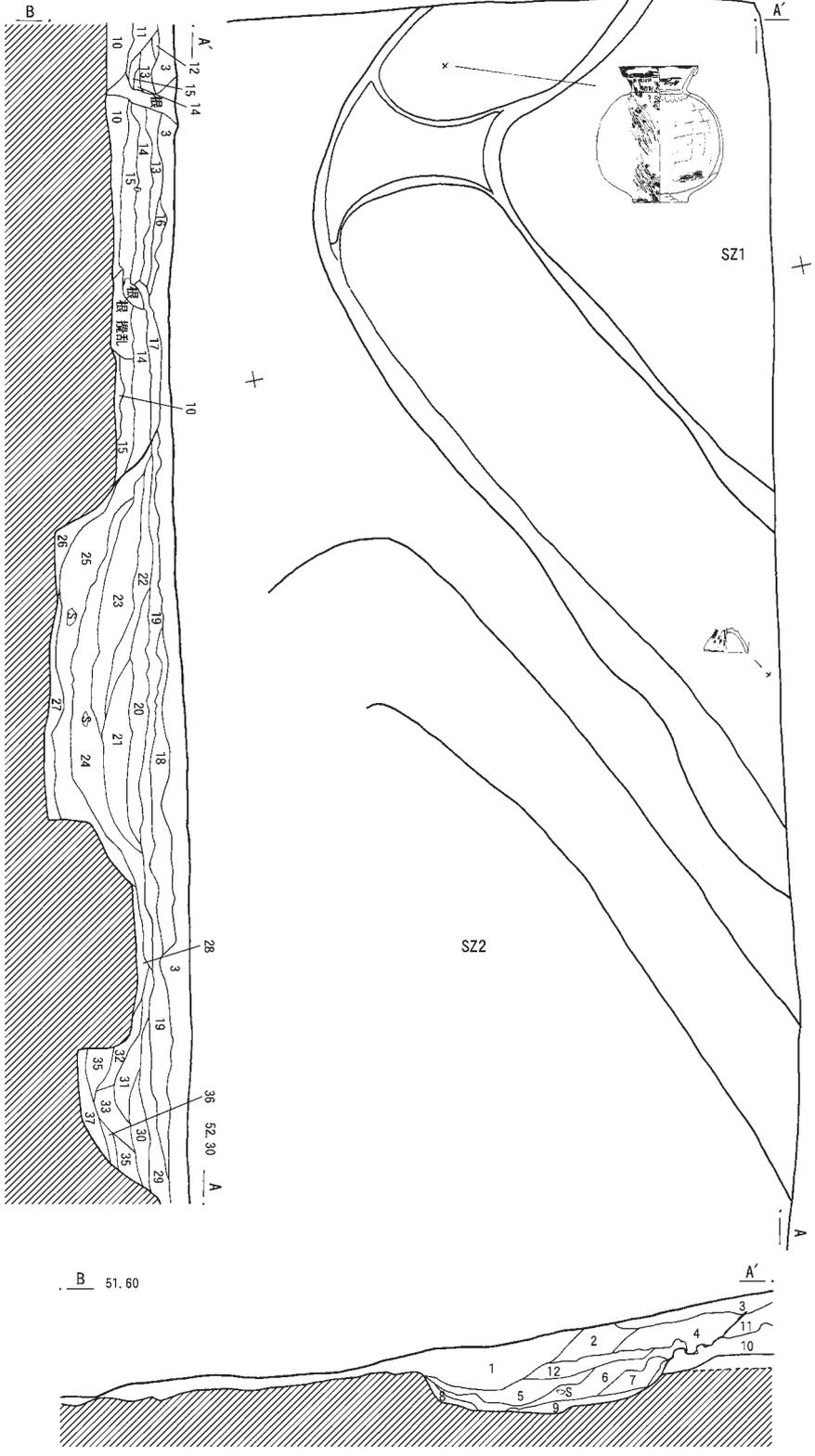
周溝 周溝は1号方形周溝墓の西側周溝と併置して構築され、周溝の切り合いや共有は認められない。

原谷遺跡

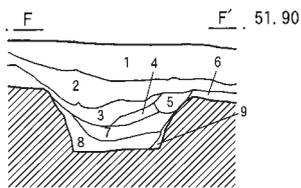
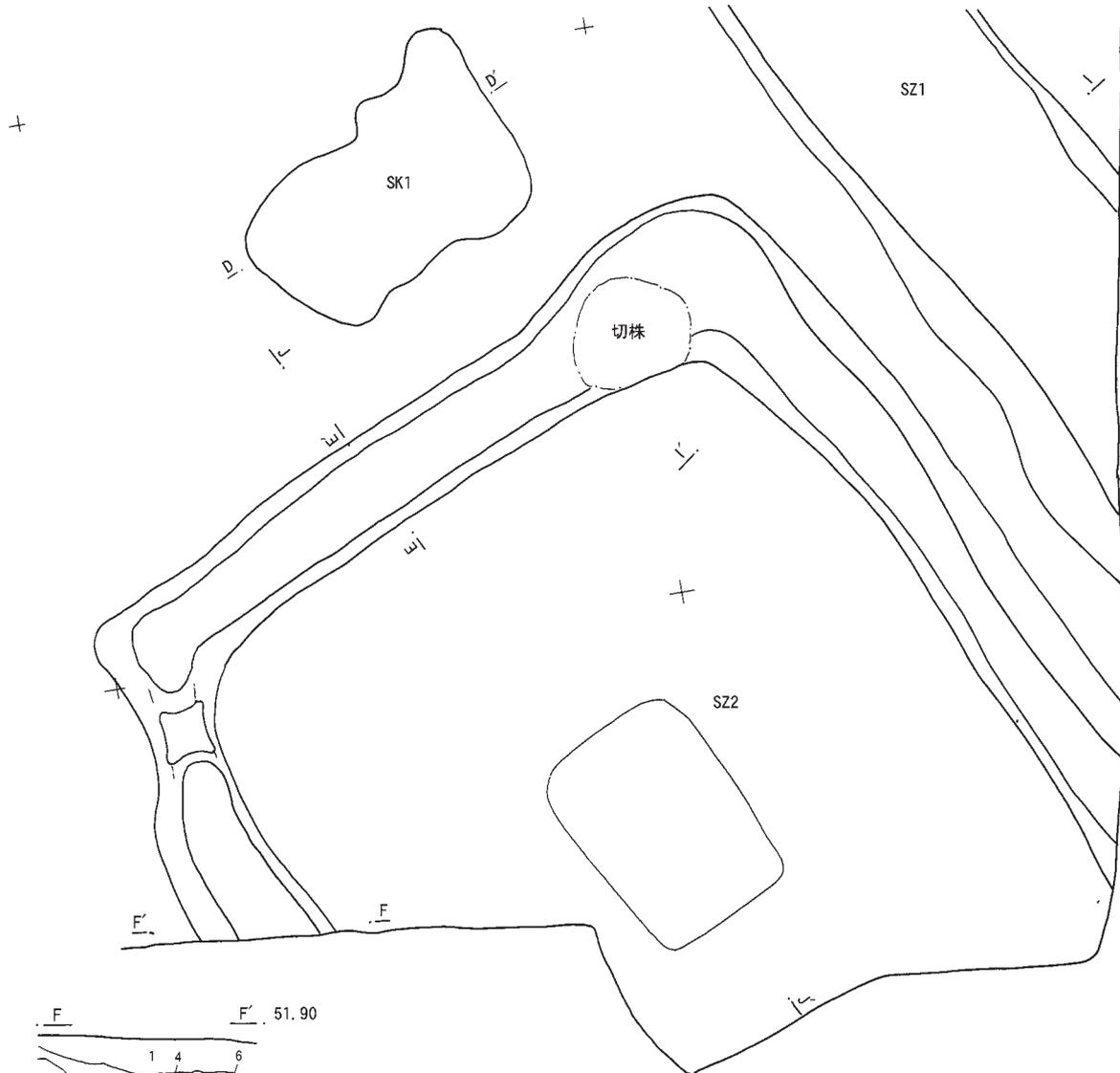


第5図 原谷遺跡遺構配置図(1/80)

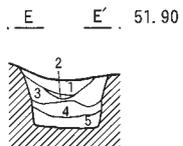
- 第1号方形周溝墓-SZ1
土層説明 (A-A', A'-B)
- 1 カク乱土 茶、黒色土、腐食土混在
 - 2 黒褐色土 ローム粒子混じり、細砂、砂質
 - 3 茶褐色土 腐食土
 - 4 暗茶褐色土 細砂、粘質土
 - 5 黒褐色土 ローム粒子多、石器含む
 - 6 黄色味を帯びた黒褐色土 ローム小塊含む、軟質
 - 7 黄茶褐色土 ローム土多、粘質土
 - 8 黒褐色土 ローム土混在土
 - 9 黒褐色土 ローム土混在土
 - 10 茶褐色土 盛土少
 - 11 暗茶褐色土 ややローム多い
 - 12 暗茶褐色土 ややローム多い
- ※10, 11は墳丘
- 13 茶褐色土 砂質
 - 14 黒茶褐色土 軟質、細砂、ソフトローム
 - 15 暗茶褐色土 ややしまる、腐食土
 - 16 黒茶褐色土 しまる、ローム粒子少含む
 - 17 黒茶褐色土 腐食土、ローム粒子、他粒子混じり
 - 18 黒茶褐色土 粘質土粒子混じり、粘質
 - 19 黒茶褐色土 ややローム粒子混じり
 - 20 茶褐色土 質味のある黒色土、しまる
 - 21 黒茶褐色土 墳丘の流れた土
 - 22 暗茶褐色土 ローム粒子多、墳丘流れた土
 - 23 暗茶褐色土 黒色粒子、ローム粒子含む
 - 24 黒茶褐色土 ローム土を多数含む
 - 25 黒茶褐色土 ローム粒子多軟質土
 - 26 黒茶褐色土 ローム土
 - 27 暗茶褐色土 ローム土、ローム土含む
- 28 黒褐色 腐食土
 - 29 青黒色土 ローム粒子混じり
 - 30 漆黒色土 黒色味強い
 - 31 暗褐色土 ローム土混在均一
 - 32 茶褐色土
 - 33 茶褐色土
 - 34 暗茶褐色土 ローム土、ローム粒子
 - 35 茶褐色土 ソフトローム混在
 - 36 暗茶褐色土 ハートローム、ローム土混在



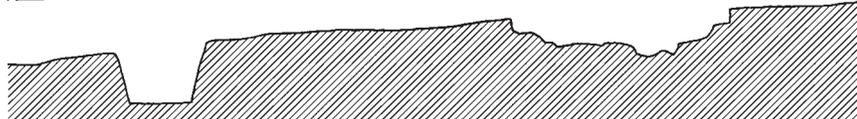
第6図 原谷遺跡第1号方形周溝墓実測図 (1/60)



- SZ 2
土層説明 (F F')
- 1 黒褐色土 腐食土
 - 2 黒茶褐色土 ローム土混在
 - 3 漆黒色土
 - 4 黒褐色土 ローム粒子混じり
 - 5 灰褐色土 ローム土
 - 6 暗茶褐色土
 - 7 黒色土
 - 8 黒灰色土 ローム土混じり



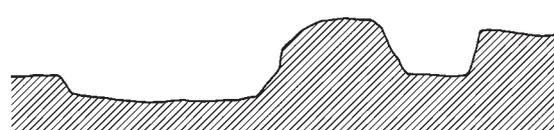
J 51.90



第2号方形周溝墓 SZ2
土層説明 (E E')

- 1 漆黒色土
- 2 漆黒色土 ローム粒子混じり
- 3 黒茶褐色土 粘質
- 4 ロームブロック混在土、茶褐色土
- 5 茶褐色土 粘質土

I 51.90



第7図 原谷遺跡第2号方形周溝墓 (SZ2) 実測図 (1/60)

北西隅部に太い樹木の根が張り込んでいたためやや検出状態が不良だが、黒色土の覆土が明瞭に認められ、遺構は良好に検出できた。周溝の規模は、東辺一幅1.0×深さ0.5m、北辺一幅6.7×深さ0.9m、西辺一幅3.4×深さ1.0～0.7mであった。2号周溝墓は1号周溝墓に比してほぼ2分の1の規模と認められる。北西隅部は周溝底が浅く掘り残された状況であり、周溝上面も食い違っていることから当初は土橋状に掘り残したと推定される。1号周溝墓と同様に墳丘側への入り口部であったと思われる。周溝覆土は黒色土が主体で墳丘および斜面上位である南側から流れ込んでいる。周溝は墳丘側(内方)では東46°北82°西78°の傾きで立ち上がるが、外方は東・北は80°、西68°である。周溝底部は平坦で、箱型の断面形をしている。

遺物 周溝中からは完存の土器等は検出されなかった。本周溝墓に伴う土師器破片が覆土や周溝中から少量出土したに過ぎないが、一応本墳に伴うものとして扱っている。器種は埴・高杯・器台・台付甕などの小破片である。なお、縄文時代包含層中の遺物は別に扱うので此处では触れない。

第3号方形周溝墓 SZ 3 (第5図・第8図)

墳丘 南東隅から東側周溝の一部を調査しているが、墳丘は覆土が薄いためほとんど確認できなかった。周溝の確認状況から方形周溝墓と判断しているが、南辺の周溝は確認できていない。2号墳西辺の主軸方向と一致していることも注意したい。この場合主軸方位は北軸としてN-30°-W前後を示すと思われる。

また、2号墳の北辺周溝を共有して東側に本周溝墓墳丘を想定すると東辺・北辺が見当たらず、やはり西方の区域外に墳丘の延長を想定することが妥当と思われる。墳丘規模は周溝の規模が2号墳に近似するので同様の規模と考えたい。

周溝 周溝は、幅0.8×長さ2.8m、深さ15cmで、2号方形周溝墓の北西隅部手前で途切れる。2号墳の土橋状掘り残しから、ここに入り口部を設定していたとも想定される。覆土は薄いが斜面上位から流れ込んでおり、墳丘側寄りと想定する周溝底部から土師器大型壺の部分が出土した。

遺物 周溝底部に着いて大型の土師器大型壺が出土している。細片となっている頸部に二段に斜縄文の文様帯が施され、朱彩された壺で、本墳に伴うものと判断される。

第1号土壇 SK 1 (第5図・第8図)

第2号方形周溝墓の北側に位置する不整形の大型土壇である。長軸2.4×短軸1.4mを測る。覆土や平面形状から数次の掘削が考えられるが、出土遺物はほとんど無く、時期・性格は不明である。

第1号集石跡 SS 1 (第5図・第8図)

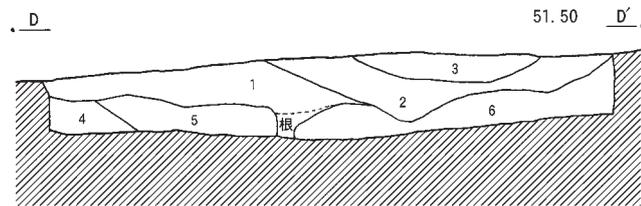
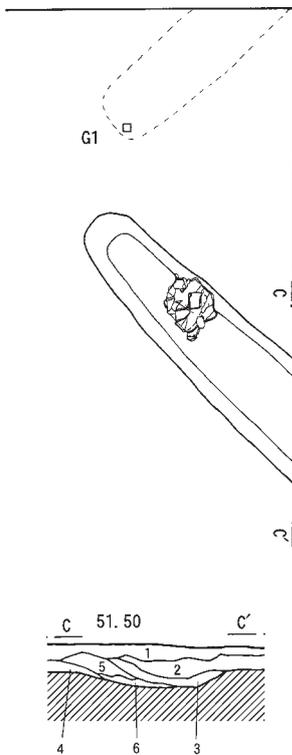
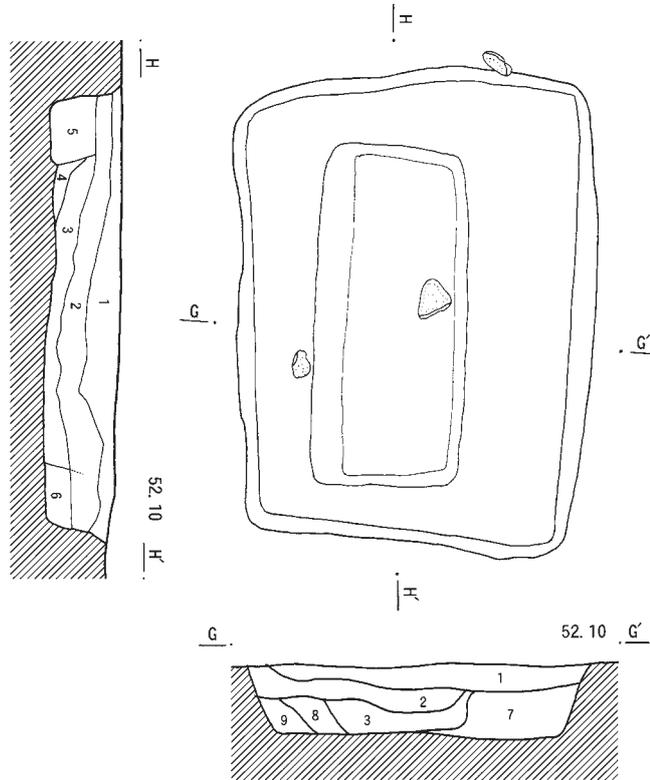
遺構 調査区南西隅に検出された。検出面は表土下40cmほどであり、掘り込み等の遺構は検出されなかった。敷石、炉跡などの遺構の一部であった可能性は少ないと思われる。円盤型の磨石が集中して検出され、破片7個 完形6個を確認しているが、覆土出土として取り上げているものも含んでいる。

出土遺物 (第20・21図・第7表) すべて石英閃緑岩の楕円扁平礫を基本としている。1～6はほぼ完存している。直径12～15cmと15～21cmの楕円形をしている。8～13は破損礫で被熱をうけ赤変しているものがある。平坦面は良く研磨されているものが多く、磨石として利用されている。2.3は重なって出土しており、この場所に集積されていたことも考えられる。

埋没谷 (第5図)

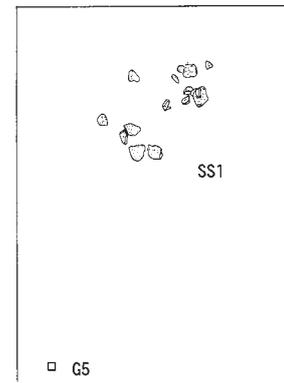
調査区の北西隅部に検出された。地表の斜面の傾斜と一致しており、さらに下位の谷とも平行しているこ

- 第2号方形周溝墓 SZ2
 土層説明 (G G', H H')
- 1 暗茶褐色土 細粒、ローム粒子多、ロームアロツク
 - 2 茶褐色土 黒色粒子多、ローム粒子少、黒味あり、細粒
 - 3 暗褐色土 ローム塊小、茶褐色土混じり、砂質
 - 4 暗茶褐色土
 - 5 暗茶褐色土 ローム塊混じり、ローム土混在
 - 6 暗茶褐色土 ローム塊
 - 7 暗茶褐色土
 - 8 暗茶褐色土
 - 9 ローム塊、ローム土混在土



- SK 1
 土層説明 (D D')
- 1 黄茶褐色土 ソフトローム土、黒色土混じり
 - 2 赤茶褐色土 細粒、ソフトローム土
 - 3 暗茶褐色土
 - 4 茶褐色土
 - 5 黄褐色土
 - 6 灰黄褐色土 ローム土混じり

- 第3号方形周溝墓 SZ3
 土層説明 (C C')
- 1 表土 腐食土、山土、黒褐色土
 - 2 暗褐色土 ローム小塊、細粒子含む
 - 3 黄茶褐色土 ローム土
 - 4 地山ソフトローム
 - 5 黄褐色土 ソフトローム、茶褐色土混じり
 - 6 黄灰色土 砂質、粘性
- 墳丘、左方より流土の状況



第8図 原谷遺跡第2号方形周溝墓主体部(1/30)・第3号方形周溝墓(1/60)・第1号集石(1/30)・第1号土壌(1/30)実測図

とから、遺跡北面に開析している侵食谷の谷頭部分である。遺物等の出土はなかった。谷頭部分で51.1m、下位で50.6mを図る。

遺物包含層（第11図）

第2号方形周溝墓の墳丘下、旧表土中に残されていた縄文時代早期の遺物を包含する薄層である。埋葬主体部を除く3×4mの範囲に焼礫片・土器片・石器剥片・石器が混在して分布する状況であった。第11図は先の遺物の中から特に、縄文草創期の多縄文系土器等を示したものである。調査区での包含層の分布は51.7m付近にあり、さらに上位方向の南側や東側に広がることが想定される。遺物は第2号方形周溝墓として記録していたが、途中より遺物集中跡（SC 1）として記録し取り上げている。

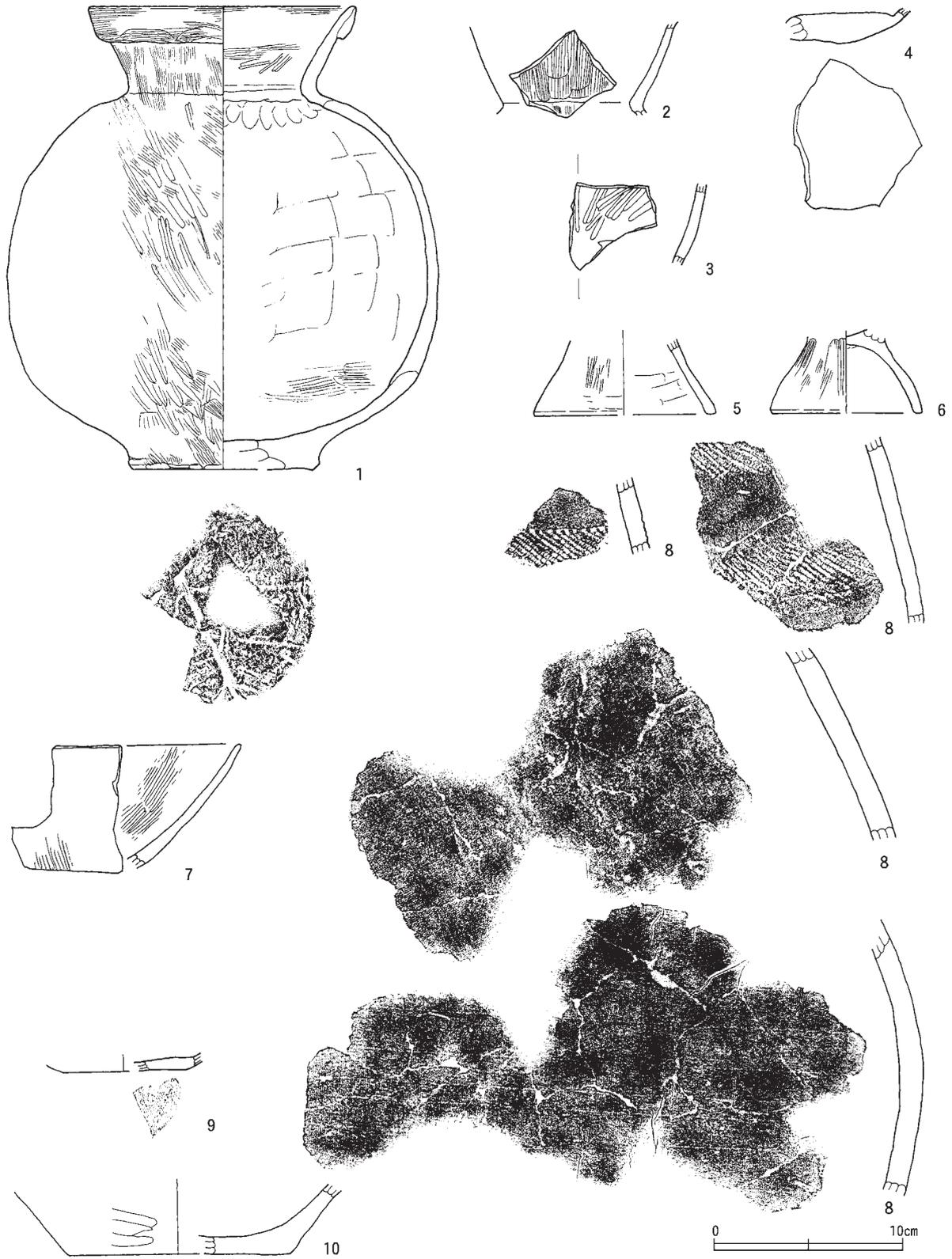
2) 遺物について

遺構出土の遺物（第9図 第2表） 破片が多く、実測掲載遺物は図示した8個体の土師器等である。1～6は第1号方形周溝墓、7・10は第2号方形周溝墓、8は第3号方形周溝墓から出土している。1は口縁部に粘土紐を貼り付けて肥厚させた二重口縁の壺である。口頸部は「く」の字状にくびれ、やや寸伸びの球形胴形をしている。底部は木葉痕を残し、厚みがありどっしりとしている。調整はハケによるナデの後にヘラにより磨きをかけているがハケ痕が所々に残っている。焼成は良好で堅緻である。口径14.2、底径10.4、器高24.6cmを図る。2、3は埴形土器の頸部破片、4は器種不明だが底部破片、5、6は台付甕の脚である。6は周溝底部付近から出土した。いずれも古墳時代前期五領式の土師器である。7は高杯形土器の杯部破片で薄く作られ、内面より外方に放射するヘラ磨きが残る。口径15cmを超える大型品と思われる。8は頸部から体部の一部分を残す大型の壺形土器である。頸部に二段にわたってLR斜縄文が施され、体部上位は赤彩し、体部位下は無文となる。器面は良く磨かれ黒色を呈している。当初は30cmを越える器高を有していたろう。

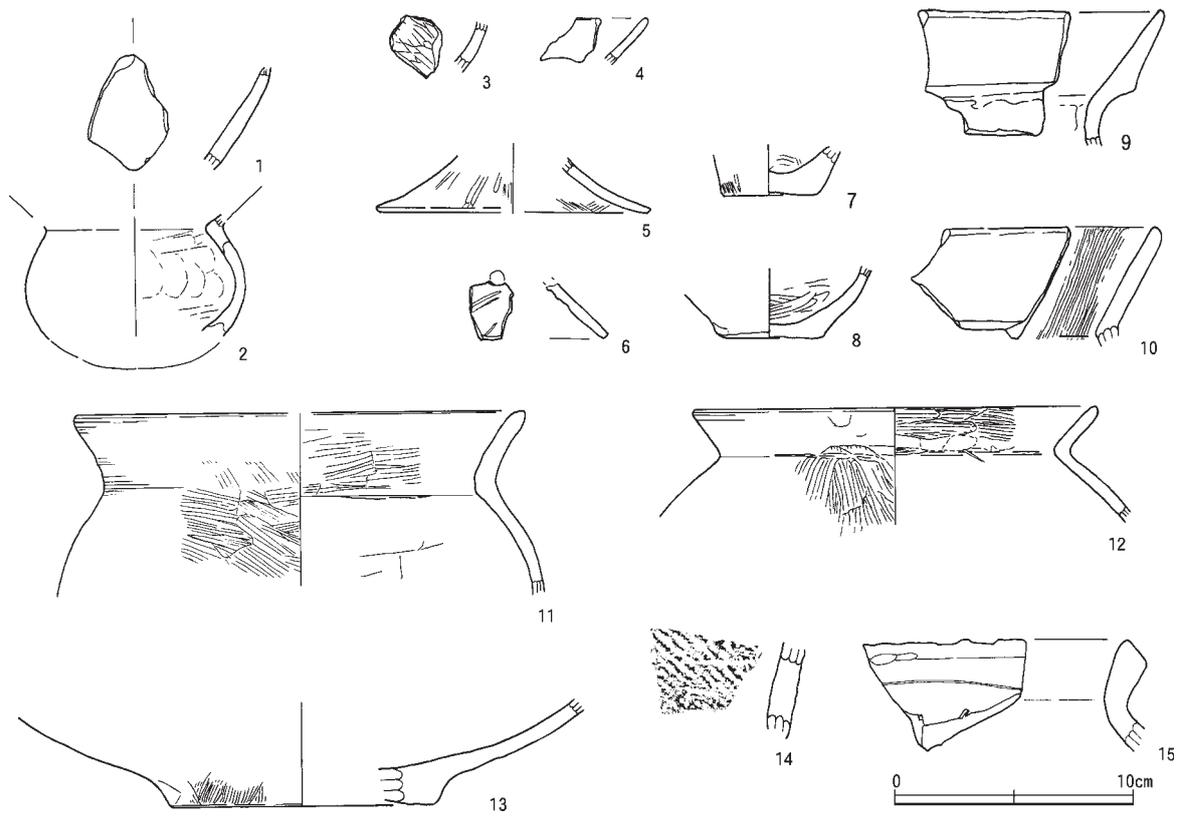
一括の出土遺物（第10図 第3表） 復元実測も難しい破片のみで、15点の遺物を図示した。15を除いて、すべて古墳時代前期に該当する土師器である。遺跡には集落部分も想定されるが調査区からは方形周溝墓以外検出されていないので、3基の周溝墓に伴っていたものと考えておくが、もともと墳丘上に備えられていたものが、開墾等で微細な破片になったのであろう。1～3は埴形土器、4～6は器台形土器で、4、6は赤色の精製土器片である。7、8は小型壺の底部と思われるが、7はコップ状のミニチュアであるかもしれない。9、10は有段口縁壺の口縁部で、13はその底部であろう。11、12は甕型土器の口縁部で器面にハケ調整を残している。14は粘土継ぎ目上に斜縄文を残す土器片で、甕形を呈する吉ヶ谷式土器である。15は断面鑿状をする中世在地系の甕形陶器片と思われる。

包含層出土の遺物（第11図）

本節での説明は、第2号方形周溝墓盛土下に検出された縄文時代遺物包含層確認資料を主体としているが、第1号方形周溝墓覆土や調査区覆土中からの縄文時代遺物も含めて説明する。これら出土位置の詳細は第4～6表の備考欄に示してある。なお、当初遺物は第2号方形周溝墓（SZ 2）として記録していたが、途中より遺物集中跡（SC 1）として記録し取り上げたことから、第2号方形周溝墓盛土下に検出された縄文時代遺物包含層出土の遺物は「SZ 2 または SC 1」の略記がある。



第9図 原谷遺跡第1、2、3号方形周溝墓・土壙出土遺物（1/3）



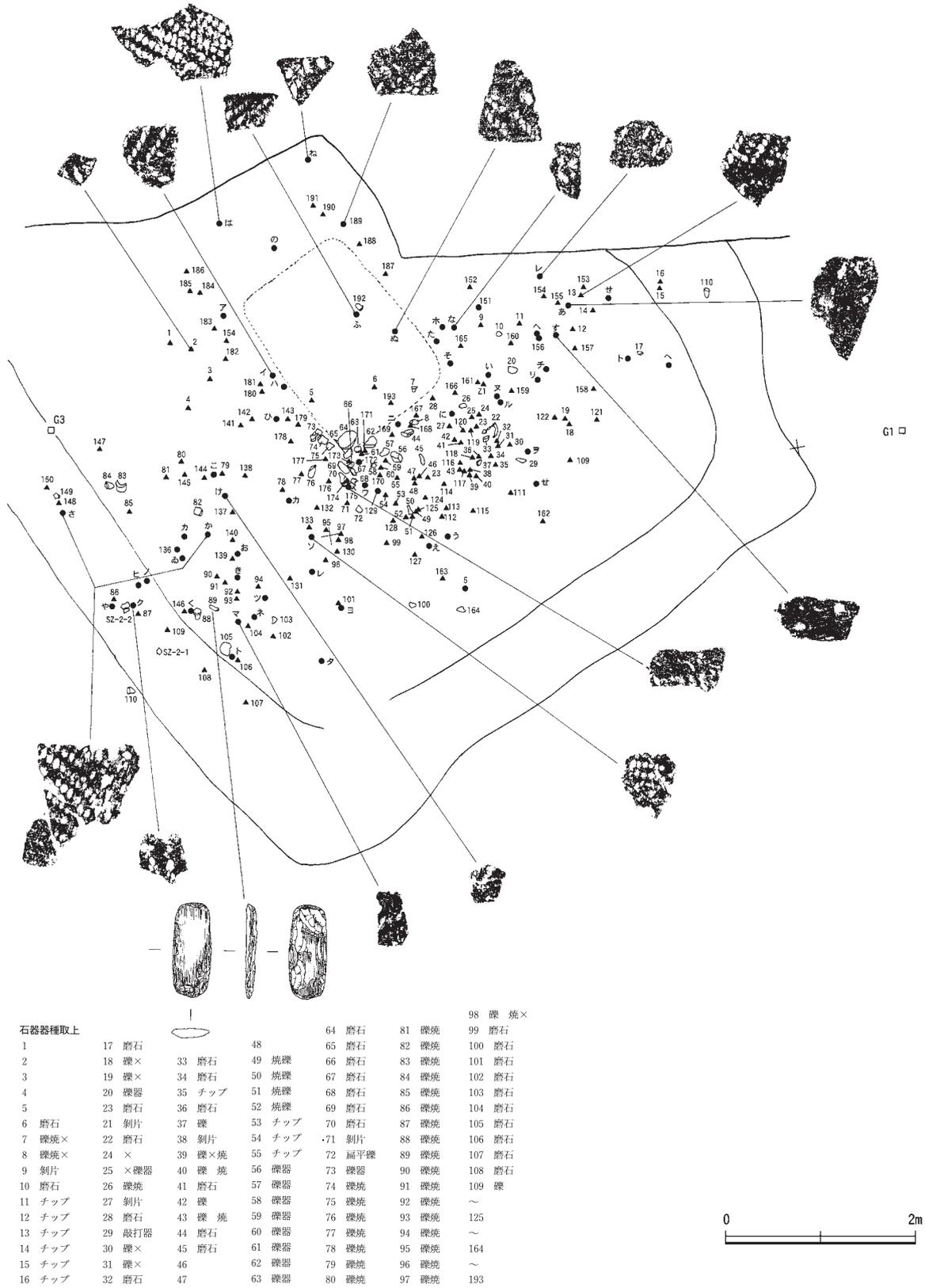
第10図 原谷遺跡一括出土遺物(1/3)、14(1/2)

第2表 原谷遺跡方形周溝墓・土壇出土遺物観察表(第9図)

No.	器種	口径	器高	底径	焼成	色調	接合状況	残存部	備考
1	二重口縁壺	14.2	24.6	10.2		内：橙 外：橙	65-50-SZ-1		
2	埴形土器					内：明赤褐 外：明赤褐	65-50-SZ-1		ハケ細目
3	埴形土器					内：明黄褐 外：赤褐	65-50-SZ-1	体部・破片	
4	不明土器					内：黒 外：橙	65-50-SZ-1		内面黒色板材に押圧痕あり 壺底部ではない
5	台付甕					内：橙 外：明褐	65-50-SZ-1	脚部	
6	台付甕					内：橙 外：橙	65-50-SZ-1	脚部	
7	高坏形土器					内：明赤褐 外：明赤褐	65-50-SZ-2		
8	大形壺					内：にぶい褐 外：褐	65-50-SZ-3		内面ケズリ 外面ヘラナデ
8	大形壺					内：橙 外：にぶい黄橙	65-50-SZ-3		頸部文様帯LR縄文2段
8	大形壺					内：にぶい黄橙 外：にぶい黄橙	65-50-SZ-3 SZ-3		
8	大形壺					内：にぶい褐 外：褐	65-50-SZ-3		
9	須恵器・坏					内：灰 外：灰	65-50-SK-4	底部	8c後半 南比企産
10	甕					内：明赤褐 外：明褐	65-50-SK-2	底部	内面ナデ 外面ケズリ

第3表 原谷遺跡一括出土遺物観察表(第10図)

No.	器種	口径	器高	底径	焼成	色調	接合状況	残存部	備考
1	埴					内：明赤褐 外：赤褐	65-172-フ	口縁・破片	
2	埴形土器					内：にぶい黄橙 外：橙	65-50		凡化マメツ コヨナデ 指頭圧痕
3	埴形土器					内：赤 外：赤	65-172-フ	胴部	
4	小形精製土器					内：明赤褐 外：赤	65-172-フ	埴器台	
5	器台					内：明赤褐 外：明赤褐	172表	脚部	精良土器
6	小形精製土器					内：赤褐 外：赤褐	172表	器台	内外赤彩
7	小形壺・埴					内：橙 外：橙		コップ形の底部	
8	小形壺					内：橙 外：橙	65-172-フ	底部	
9	有段口縁壺					内：明赤褐 外：明赤褐	65-172-フ		
10	有段口縁壺					内：にぶい橙 外：にぶい黄橙	65-172-フ	口縁部	砂粒多
11	甕形土器	18.9				内：橙 外：橙	65-172		
12	甕形土器					内：橙 外：橙	65-172		
13	大形壺			11.2		内：橙 外：橙		底部	有段口縁か
14	吉ヶ谷式土器					内：にぶい黄橙 外：橙	65-50	甕形の口頸部片	LR 縄文
15	中世在地産甕					内：橙 外：明褐	65-172-フ		蔵骨器



第1図 原谷遺跡包含層遺物出土状態 (1 / 60)

1、縄文土器（第12～15図 第4・5表） 縄文土器の分類については、I群一草創期（多縄文系）II群一早期（撚糸文・押型文・無文・条痕文系）の2群に分けて行った。出土土器割合は①多縄文系土器46点 37.4%、②撚糸文系土器41点 33.3%、③押型文系土器1点 0.8%、④無文土器12点 9.8%、⑤条痕文系土器23点 18.7%である。

第I群土器（第12・13図1～46 口絵図版3、4） 多縄文系土器を一括した。総数46点を確認しているが、微細な破片が主であり全形を想定できるものない。類別の視点は施文手法の差により、次の3類に分類し、文様構成、原体により細別する。なお、類別の困難なものもありあくまでも観察者の主観に拠る。

1類 「押圧縄文」を施すもの 縄 側面圧痕

1種 羽状構成とするもの a—L原体 1. 4. 6. 16
b—R原体 2. 7. 9～12

2種 斜位構成とするもの a—L原体 13～15
b—R原体 19

2類 「回転縄文」を施すもの 縄、絡条体による斜縄文を施すもの

1種 単節縄文 a—RL原体 17. 18. 20.
b—LR原体 21. 24

2種 無節縄文 原体の撚り目が明瞭なもの
a—l 原体の回転 絡条体 25～30.32.33.36.45.46
b—r 原体の回転 絡条体 31
c—l 原体の回転+絡条体側面圧痕 37. 39
d—l 原体の回転+絡条体自縄自巻A種側面圧痕 41

3類 絡条体を主に施文するもので回転施文、側面圧痕文により羽状構成とするもの

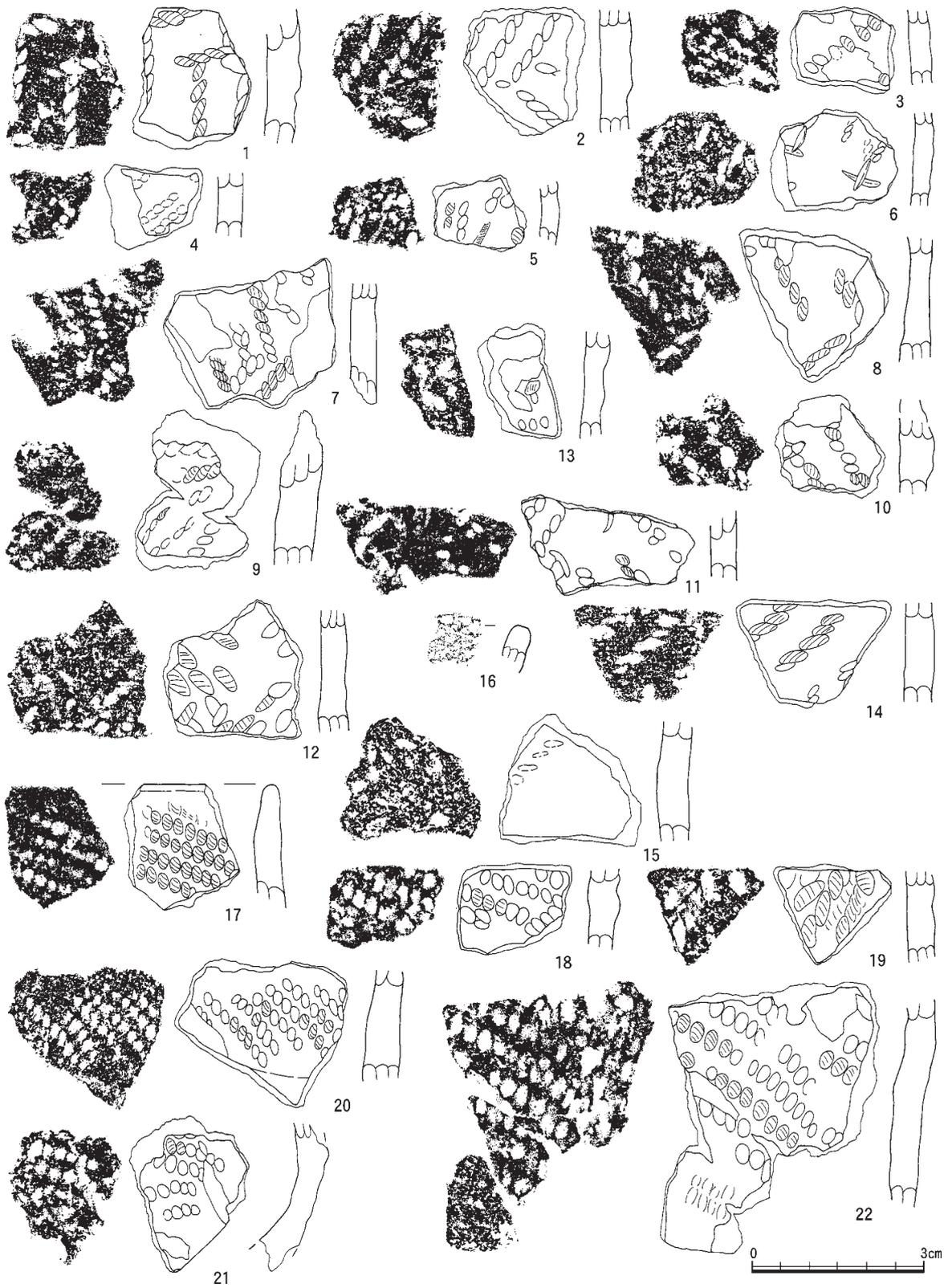
1種 羽状構成 a 絡条体 自縄自巻A種 38. 40
b 絡条体 自縄自巻B種 3. 5. 8. 22～24. 42. 43. 44

原体等の特徴について触れると、1は1段Lの押圧、深く明瞭に押捺される。2はR。3は1段Lの半置半転か。7は絡条体自縄自巻B種に近いものがある。11は爪痕風の刺突が残るが爪形文ではない。17は2段RLで節条とも明瞭で口縁部横位に施す。口縁は先細りで丸くなる。21は底部移行部分である。22～24は絡条体自縄自巻B種で明瞭に押捺される。25は内削ぎ状の口縁をしている。Lの回転であるが、半置半転状に押圧の強弱が現れている。26は条間が広く0段の絡条体で自縄自巻B種と思われる。33は縦位0段r横位に0段lが認められる。37は絡条体自縄自巻A種で押捺が強いが、地紋となる回転文は浅目である。38は爪痕が残る。40は器面横位に僅かに稜線が観察されることから内反する口縁部分に当たる。

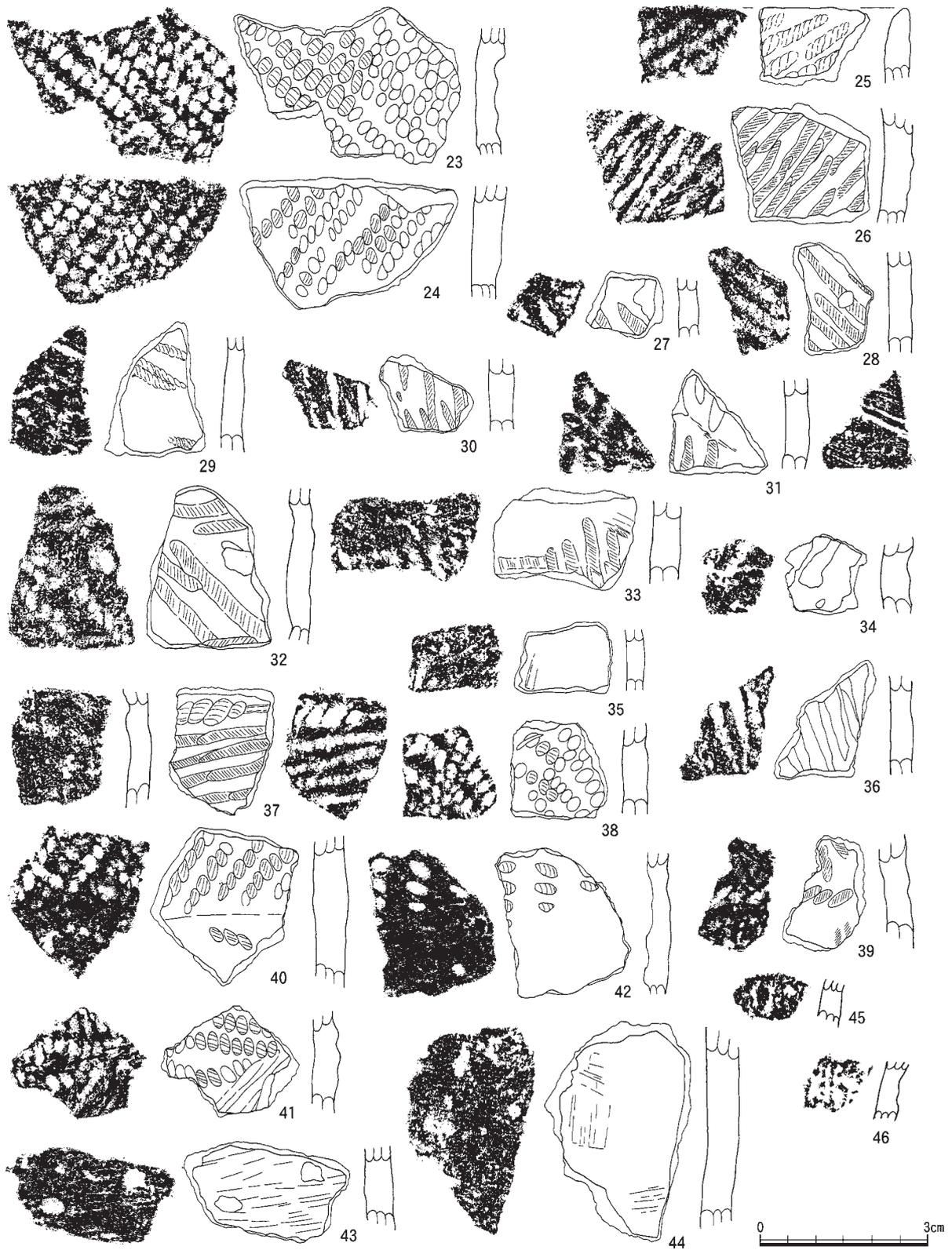
第II群土器

1類 撚糸文系土器を一括した。総数39点で確認しているが、その施文手法の差により次の種に細別する。

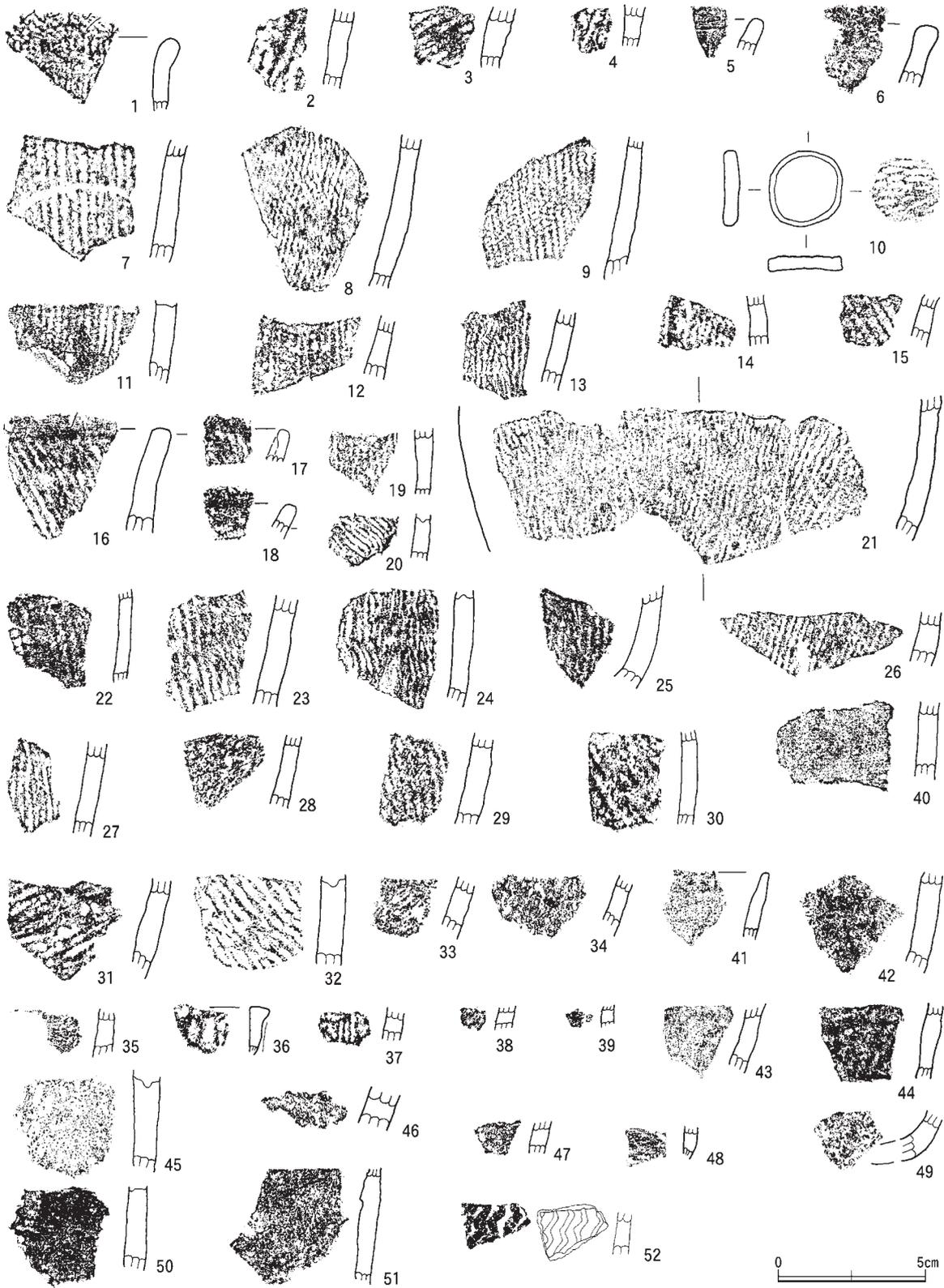
a種（第14図1）口縁部文様帯と胴部文様帯から構成されるもので、口縁部文様帯は口唇上面に施文される。第II様式に区分され、井草II式とされる土器である。1は口縁がやや肥厚し、口唇の上面から外面にRL、



第12圖 原谷遺跡包含層出土遺物1 (1 / 1)



第13図 原谷遺跡包含層出土遺物2 (1 / 1)



第14圖 原谷遺跡包含層出土遺物3(1/2)



第15図 原谷遺跡包含層出土遺物4(1/2)

胴部はRLが施文される。JY型である。

b種(第15図53・54) 頸部文様帯と胴部文様帯から構成されるもので、口縁部が丸みを帯びて肥厚し、やや外反している。口縁直下は無文部が残り、外折部分に原体RLの側面圧痕を押捺し、胴部文様帯を施す。Y型であり、第II様式から第III様式への移行期に置かれるものである。

c種(第14図2~39) 胴部文様帯で構成されるもので、口縁部の形態はやや肥厚する6のほかは角頭状を呈しやや外反する5、16、17、18、36がある。Y型でRLが施文される。胴部文様帯部分は各々、施文原体は異なるが施文の間隔は割合密である。J型は7、9、15でRLである。他はY型でRLである。20は無節と思われる。21は胴下半部に当たり遺存部での径は約17cmである。10は土器片加工の円盤で、直径約2.6cmを測る。第III様式に区分され、概ね夏島式に区分される。

2類（第14図52）押型文系土器である。52は縦走する連続山形文が施文される。施間隔はやや広い。

3類（第14図40～51）無文土器である。41は口縁部だが、平縁ではなく突起を持つ部分であるようだ。先細りする口縁部は薄く端部は丸く造られる。49は底部付近の破片で丸底風になる。

4類（第15図55～77）擦痕・条痕を持つ土器である。55～60、63、64は条痕が薄く目立たない。61、62、65～77は内外面を縦走または横走する条痕文およびナデ調整を施している。56は口縁部が肥厚する。60は口唇にキザミを持つ。また、右面に穿孔があり補修孔と考えている。

これらの土器は文様帯を構成することではなく、粗製の土器である。早期末に一般的多く見られる土器であるが、本遺跡では条痕文系土器とともに出土する第IV様式以降の稲荷台式土器や沈線文系土器・条痕文系土器である野島式・鶴ヶ島台式などの土器群をまったく欠いている。本遺跡の擦痕・条痕を持つ土器は第III様式以前の土器群に伴う例として考える余地がありそうである。

2、石器（第16～19図 第6表）本遺跡からは遺物包含層を主に多数の石器が出土したが、遺構に伴い出土したものはなかった。時期的には出土土器とともに縄文時代草創期から早期前半の時期に収まるものと考え、以下に器種ごとに扱う。

彫刻器（第16図1）船底状の形をする彫刻器で石材はチャートである。使用痕は明瞭でないが右側下端を刃部としている。

搔器（第16図2）旧態は偏平で木の葉状を呈し、側縁を刃部としていた片面加工の搔器である。透明度の高い黒曜石製である。

石鏃（第16図3）側縁基部の剝離調整が微細で良く整っている。漆黒色の黒曜石を使用している。尖頭器様であるが石鏃とした。

局部磨製石斧（第16図4）自然偏平礫を加工した石斧で側縁・刃部を調整した後、研磨を加えて整えている。比較的薄く造られている。

三角錐形石器（第16図13）三角錐状の握り部と平坦な打面を作出した三角錐形石器である。器面のほぼ全面に丁寧な整形加工が施され、断面形はほぼ三角形状をしている。底面部の傾斜角度は90°前後を示す。

礫器（第17図14～19.27）

a類14、15、17、18は、略楕円礫の長軸辺を刃部として整形したもの。表面を大きく剝離調整しているが自然面を1/2以上残している。裏面は自然面のままとしている。

b類16は、略楕円礫の短軸辺を刃部として整形したもの。剝離調整はa類と同じ。

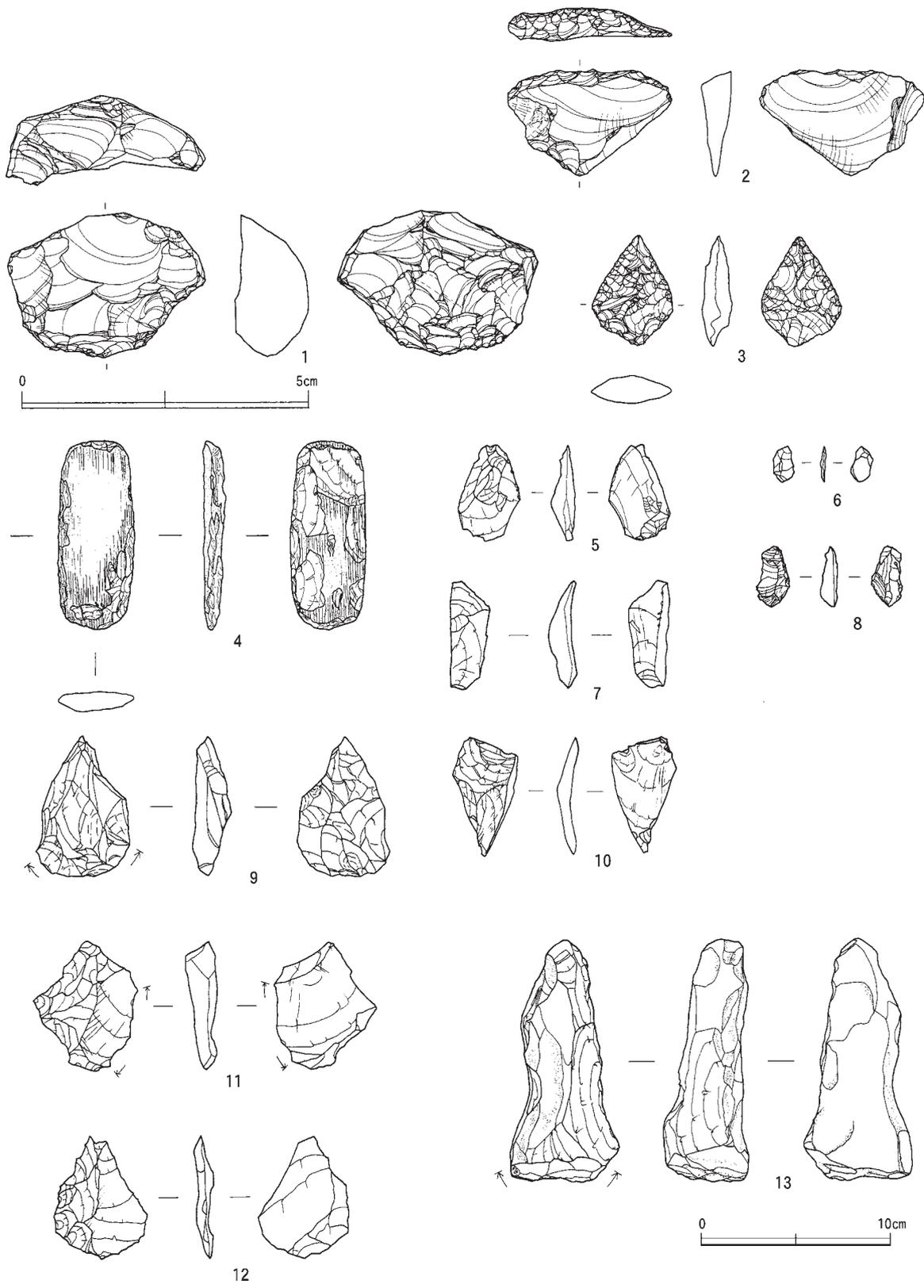
打製石斧（17図20、28、18図21）28は刃部を欠失するが短冊形をする打製石斧。20、21は撥形をする打製石斧である。正面を打割調整面とし、裏面は自然面を残している。刃部は直線的に仕上げられている。

磨製石斧（第18図29）三角柱状を呈し、全面を研磨する磨製石斧の基部破片である。

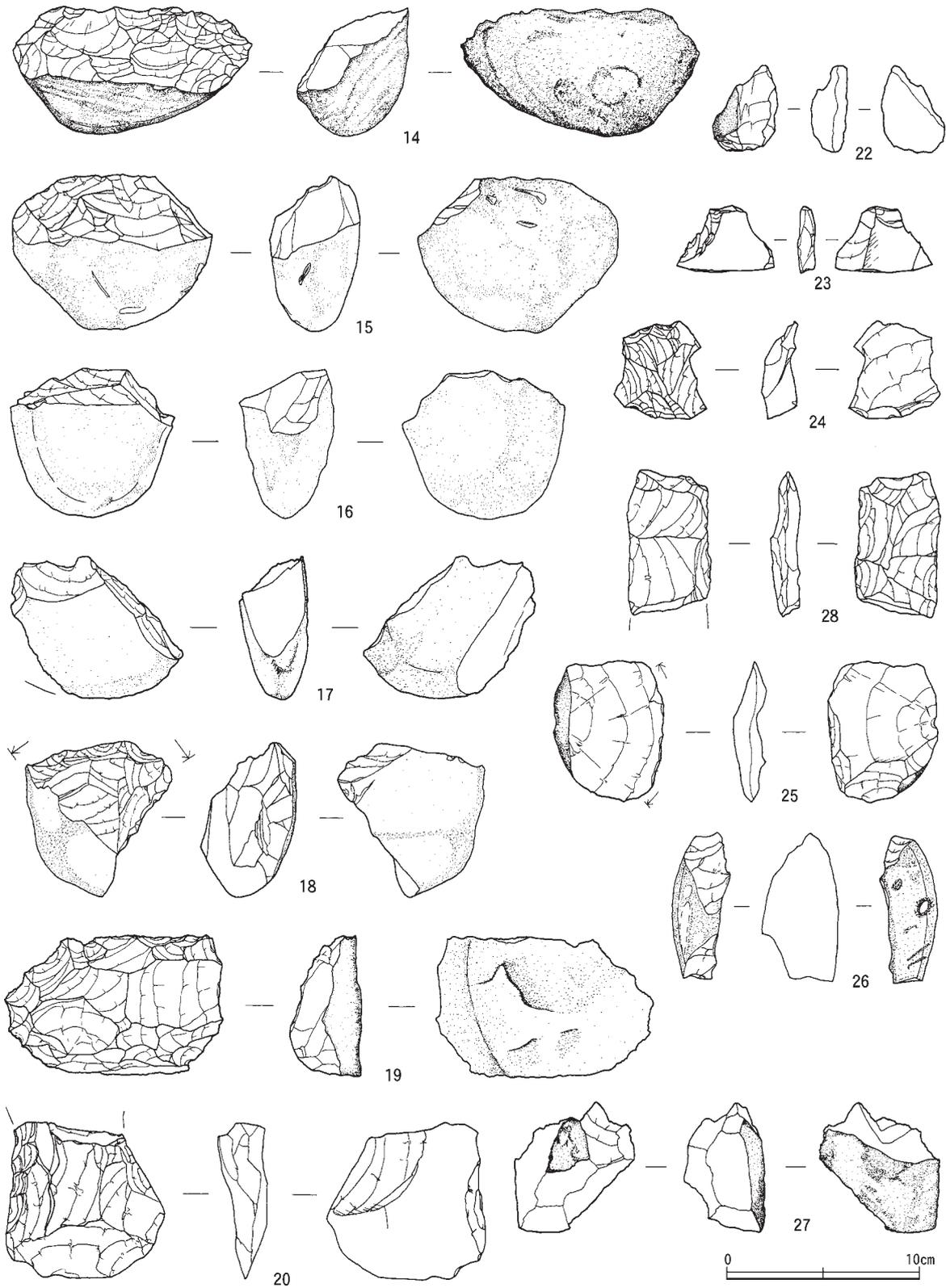
偏平石器（第18図30）全体的に磨かれた観を呈しており、側縁の中位に対向して調整が加えられている。下端を刃部とする研磨の痕跡が認められないが局部磨製石斧の可能性があるとと思われる。

磨石（第18図31～33、第19図34～47）32、33は大型の石材を用いるが、他は12～15cmほどの楕円礫や棒状礫を使用している。被熱を受け破損しているものが多い。なお、45.46については形状がスタンプ型石器に類似するものの打割面には研磨や磨耗痕は認められない。

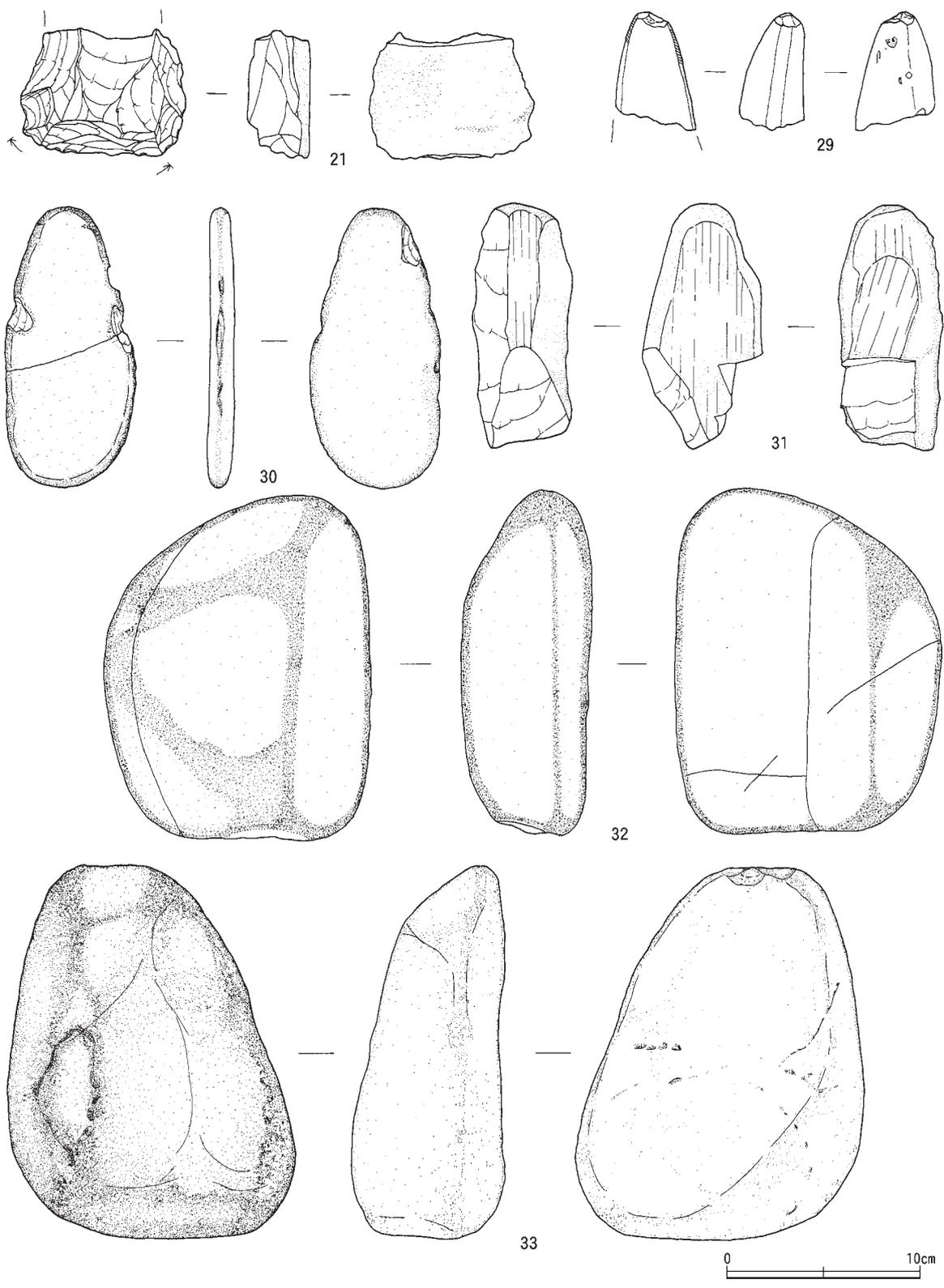
剥片（第16図5～12、第17図22、23、25、26）8は黒曜石・5～7・9から12はチャート石材の剥片類である。石材から搔器・石鏃等の母岩としたものであろう。22、23、25、26は礫斧・打斧などから派生したも



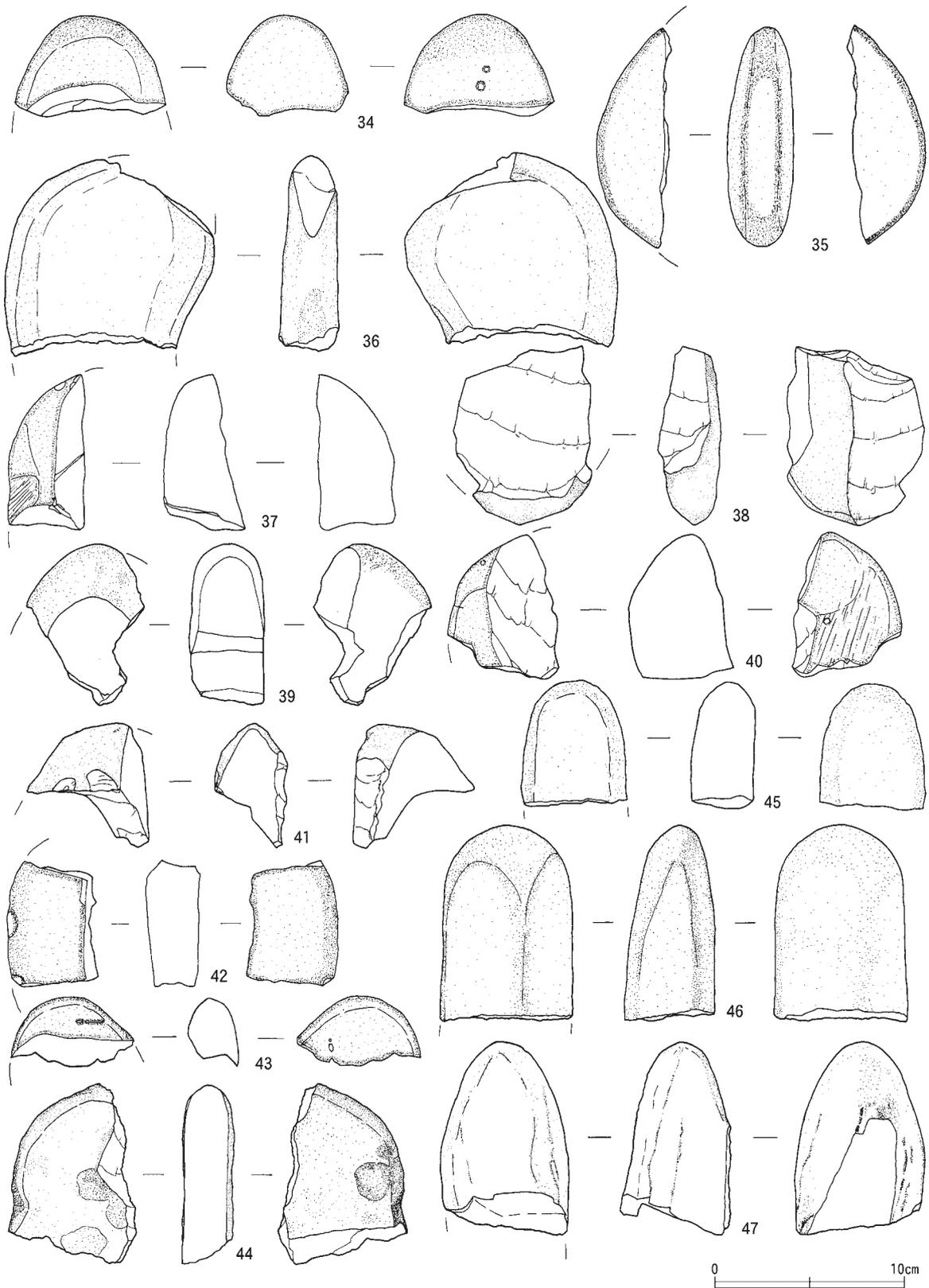
第16図 原谷遺跡包含層出土石器1~3(1/1)、4~13(1/3)



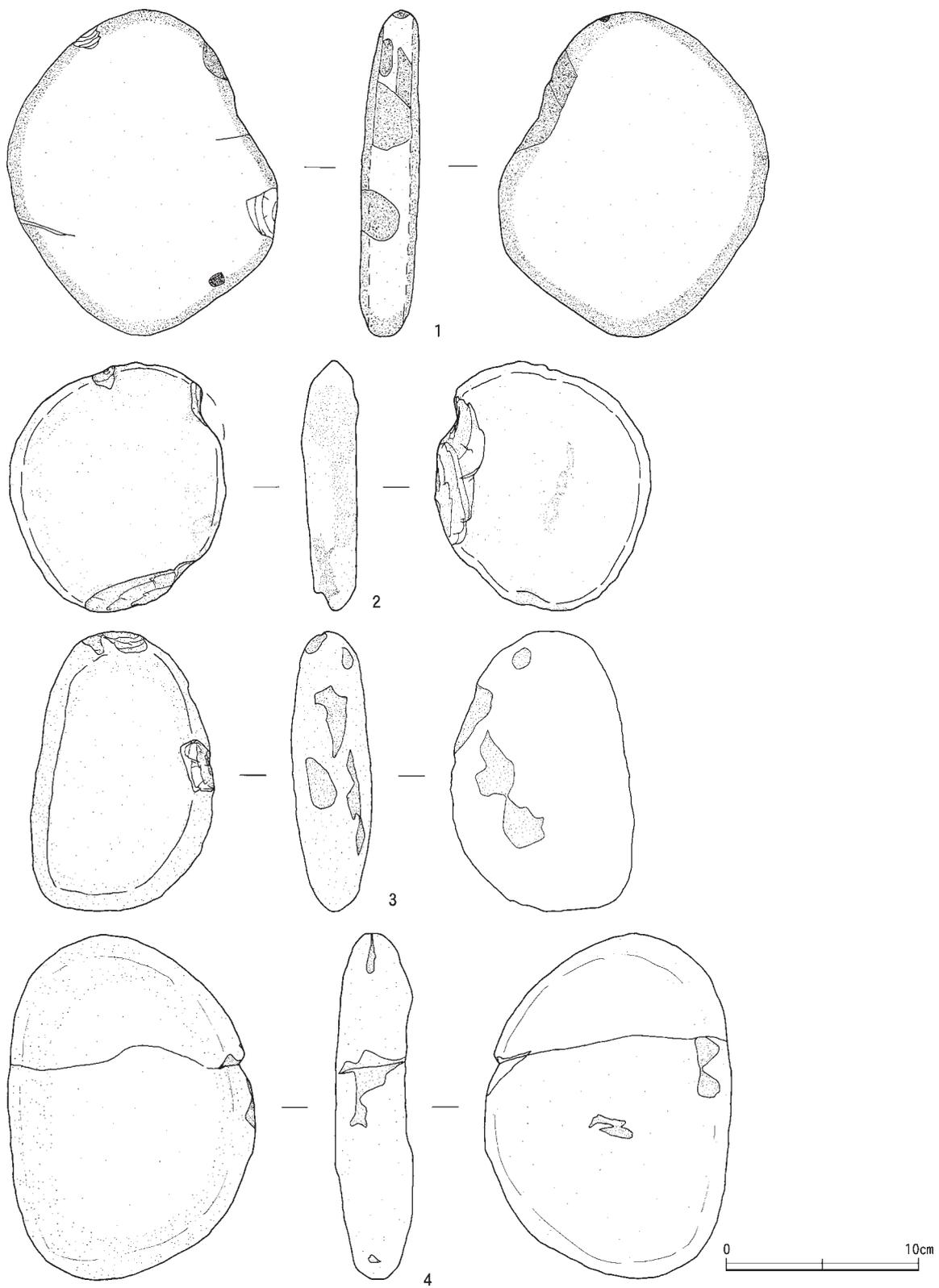
第1圖 原谷遺跡包含層出土石器(1/3)



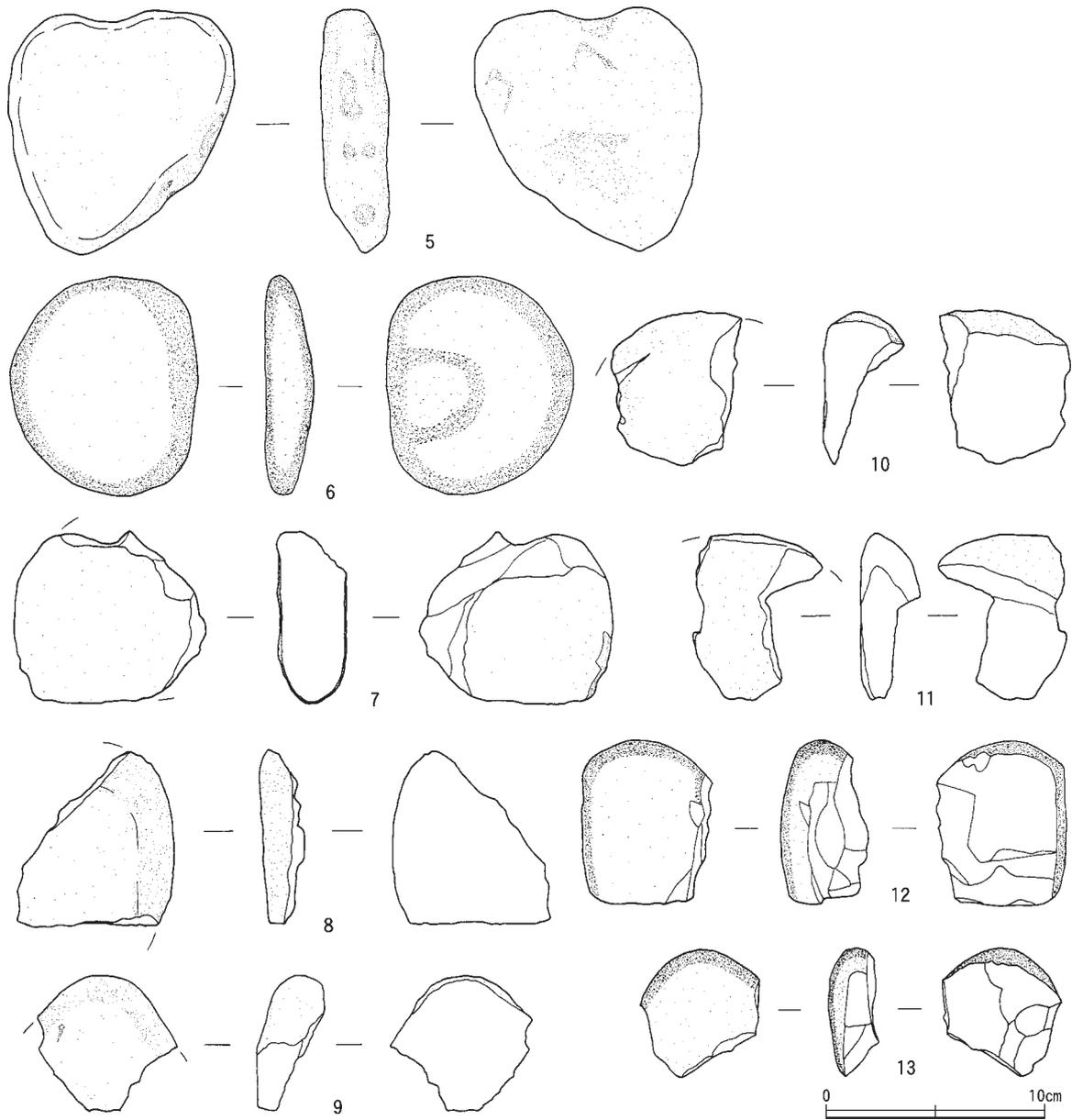
第18圖 原谷遺跡包含層出土石器(1/3)



第19圖 原谷遺跡包含層出土石器(1/3)



第2図 原谷遺跡第1号集石出土石器(1/3)



第2図 原谷遺跡第1号集石出土石器(1/3)

のだろう。

なお、調査区および包含層出土で、図化に至らない自然礫(石器と同程度風化しているが無加工のもの)・破損礫(自然面や分割面を残すが明瞭な加工痕と判別できないもの)、焼礫(被熱した自然礫、破損礫など)・剝片などは、総数201点、総重量9.26kgであった。

第4表 原谷遺跡包含層出土遺物観察表(第12、13図)

No	主 文 様	原 体	胎 土	色 調	残存部	備 考
1	側面圧痕 1段Lの押圧 羽状	Lひも	細	内：にぶい橙 外：にぶい橙	体部	65-50
2	絡状体圧痕 羽状 側面圧底	絡状体 LR		内：褐 外：褐	不明	65-50-SC-1-イ
3	絡条体 側面圧痕 絡条体圧痕 自巻B		細	内：橙 外：橙	体部	SZ-1
4	絡条体 回転縄文 2段LR		細	内：橙 外：橙	体部	65-50
5	絡条体 回転 B 1段	L?	細	内：にぶい橙 外：橙	体部	65-50
6	1段Lの押圧		細	内：橙 外：橙	体部	SC-1-レ
7	絡条体圧痕 羽状 自巻B 回転	絡条体 LR	細粒	内：橙 外：にぶい橙	不明	SZ-2
8	絡条体 側面圧痕 R	自巻B	細粒	内：にぶい黄橙 外：にぶい橙	不明	65-60
9	絡条体圧痕 テヲ 側面圧痕	絡条体 LR	石英 表石 小石	内：にぶい赤褐 外：にぶい褐	不明	65-50-2片
10	絡条体 小部分圧痕	不明	細粒 雲母	内：にぶい赤褐 外：にぶい褐	体部	65-50-SC-1-7
11	絡条体圧痕 小部分押圧 爪形? 1段	R	細	内：にぶい赤褐 外：にぶい赤褐	体部	65-50
12	絡条体 1段 自巻B	LR	細	内：橙 外：にぶい橙	体部	SZ-1-189
13	絡条体 側面圧痕 浅い	不明	細	内：にぶい橙 外：にぶい橙	体部	SZ-2-な
14	絡条体 小部分圧痕	フ R	細	内：灰黄 外：にぶい黄橙	体部	SZ-1
15	無文		細	内：にぶい黄橙 外：にぶい橙	体部	SZ-1
16	絡状体圧痕 口縁土 体 斜位(羽状構成か)	1段rか	小石 長石 砂		口縁部	フク土か
17	絡条体 浅い側面?回転か	絡条体 R 自巻B	細粒	内：灰黄褐 外：にぶい橙	口縁部	65-50-フ
18	2段RL回転	L	細	内：橙 外：にぶい橙	体部	65-50
19	絡条体 半回転 押圧 撚糸の 1段	R	細	内：にぶい橙 外：にぶい橙	体部	SZ-2-ね
20	絡条体 自巻B 1段	LR	細	内：にぶい褐 外：灰黄褐	体部	SZ-1
21	2段回転LR		細	内：にぶい赤褐 外：にぶい赤褐	底部	SC-1-ソ
22	絡条体 自巻B 回転	絡条体 LR	細粒	内：にぶい黄橙 外：にぶい黄橙	体部	SC-2-さ、か
23	絡条体縄文 単節 斜条文	絡条体 LR	細粒	内：にぶい橙 外：にぶい橙	不明	SC-1は SC-1-ロ
24	絡条体 自巻B 1段	R	細	内：にぶい黄橙 外：にぶい黄橙	体部	65-50
25	無節 自巻B	R	細粒	内：にぶい橙 外：にぶい橙	口縁部	SZ-2-ふ
26	絡条体 回転 0段1		細	内：橙 外：橙	体部	SZ-1
27	絡条体 回転 0段1		細	内：橙 外：橙	体部	SZ-2 2
28	回転 0段1		細	内：にぶい黄橙 外：橙	体部	SZ-1
29	絡条体 自巻B 0段	爪跡? L	細粒	内：にぶい赤褐 外：にぶい褐	体部	65-50
30	絡条体 回転 B 0段		細	内：橙 外：橙	体部	SZ-1
31	0段rの押圧か		良細	内：橙 外：にぶい橙	体部	65-50
32	回転 0段1ひもか			内：にぶい橙 外：にぶい橙	体部	SZ-2-ぬ
33	絡条体 回転 0段1 0段r	2種か 1とr	良細	内：橙 外：灰黄褐	口縁部	SC-1-175
34	絡条体 部分押圧		良細	内：にぶい赤褐 外：灰褐	体部	SC-1-け
35	条痕文	貝殻	細	内：橙 外：橙	体部	SZ-1
36	絡条体条痕		細	内：橙 外：橙	体部	65-50
37	絡条体 回転 1段Rの押圧	一部押圧	細	内：橙 外：橙	口縁部	65-50
38	絡条体 側面 1/2回転圧痕 内：条痕	爪跡? Rひも		内：にぶい橙 外：にぶい橙	体部	65-50
39	絡条体 側面 1/2回転圧痕 内：条痕	自巻B 無段	細粒	内：にぶい橙 外：にぶい橙	不明	SC-2-て
40	絡条体圧痕 側面圧痕 R	自巻B ウラ ナデ	細砂	内：褐灰 外：にぶい黄橙	頸部	SS1-13
41	絡条体 側面圧痕 条痕 R	自巻B	細粒	内：にぶい橙 外：にぶい橙	不明	SZ-1
42	絡条体圧痕(自巻B? 0段)	絡条体	細粒	内：橙 外：にぶい黄橙	不明	65-50-フク土
43	無文 擦痕		細粒	内：橙 外：橙	不明	SC-1-す
44	無文部		細粒	内：にぶい橙 外：橙	体部	SC-2-あ
45	多縄文か			内：にぶい褐 外：にぶい褐	胴部	65-50-SC-1-つ
46	多縄文系か			内：赤褐 外：赤褐	胴部	SZ-2-ね

第5表 原谷遺跡包含層出土遺物観察表(第14、15図)

No	主 文 様	型 式	色 調	残存部	備 考
1	LR縄文	井草 I	内：橙 外：橙	口縁部	65-50-SC-1-ト
2	LR撚糸文	夏島 II	内：赤褐 外：赤褐	胴部	65-50-SC-1-ヲ
3	LR撚糸文	夏島 II	内：赤褐 外：赤褐	胴部	65-50
4	LR撚糸文	夏島 II	内：赤褐 外：赤褐	胴部	
5	撚糸文	夏島 II	内：橙 外：橙	口縁部	65-50-SC-2-い
6		夏島か	内：橙 外：橙	口縁部	65-50-SZ-2, 1
7	LR撚糸文	夏島 II	内：橙 外：橙	口頸部	65-50
8	LR撚糸文	夏島 I、II	内：橙 外：にぶい橙	胴部	65-50-SZ-2, 2
9	RL縄文	夏島 I~II	内：にぶい橙 外：にぶい橙	胴部	65-50-SK-1
10	撚糸文土器	RL縄文	内：橙 外：橙	土製円盤	65-50-SC-1-セ
11	LR撚糸文	井草 II	内：にぶい黄橙 外：橙	口頸部	65-50
12	LR撚糸文	夏島 II	内：明赤褐 外：橙	胴部	65-50-SC-1, 2
13	LR撚糸文	夏島 II	内：暗灰黄 外：橙	胴部	65-50
14	LR撚糸文	夏島 II	内：橙 外：にぶい褐	底部付近	65-50-SC-1-レ

原谷遺跡

No	主 文 様	型 式	色 調	残 存 部	備 考
15	LR捺糸文	夏島II	内：橙 外：橙	胴部	65-50-SZ-2
16	LR捺糸文 斜位施文	夏島II	内：橙 外：明赤褐	口縁部	65-50-SC-1-そ
17	LR捺糸文	夏島II	内：橙 外：橙	口縁部	65-50-SC-1, 172
18	No55と同一個体	夏島II	内：にぶい黄橙 外：にぶい黄橙	口縁部	65-50-SZ-1
19	LR捺糸文	夏島II	内：明赤褐 外：橙	胴部	65-50-SC-1-た
20	LR捺糸文	夏島II	内：褐 外：褐	胴部	65-50
21	LR捺糸文	夏島II	内：橙 外：浅黄	底体部	65-50
22	捺糸文LR	夏島II	内：にぶい黄橙 外：にぶい黄橙	胴部	65-50-SC-1-ち
23	LR捺糸文	夏島II	内：にぶい黄橙 外：にぶい黄橙	体部下半	65-50-SC-1-ハ
24	内面炭化物 LR捺糸文	夏島II	内：にぶい黄 外：にぶい黄橙	底部	65-50
25	捺糸文LR	夏島II	内：にぶい黄橙 外：にぶい黄橙	底部付近	65-50
26	LR捺糸文 捺糸絡状体	夏島II	内：にぶい黄橙 外：橙	胴部	65-50
27	LR捺糸文	夏島II	内：明赤褐 外：褐灰	胴部	65-50
28	LR捺糸文	夏島II	内：橙 外：橙	胴部	65-50-SC-1-ネ
29	RL捺糸文	夏島II	内：浅黄橙 外：浅黄橙	底体部	65-50-SZ-1
30	LR捺糸文 縄文浅い	夏島II	内：にぶい黄橙 外：橙	胴部	65-50-SC-2-え
31	LR捺糸文	夏島II	内：にぶい黄橙 外：にぶい黄橙	体底部	65-50
32	LR捺糸文 グレている		内：明黄褐 外：明黄褐	胴部	65-50-SC-1-156
33	No54と同一系 捺糸条痕的		内：にぶい黄橙 外：にぶい黄橙	胴部	65-50
34	No54系統と同一 RL捺糸文		内：にぶい黄橙 外：にぶい黄橙	胴部	65-50-SC-1-き
35	LR捺糸文 No54系統と同一		内：にぶい黄橙 外：にぶい黄橙	胴部	65-50-SZ-2
36	器面荒れ 捺糸文系か		内：橙 外：橙	胴部	65-50
37	LR捺糸文		内：にぶい黄橙 外：にぶい橙	胴部	65-50-SZ-1
38	早期無紋		内：明赤褐 外：明赤褐	胴部	65-50-SC-2-ニ
39			内：黒 外：黒	胴部	65-50-SZ-2
40	無文		内：にぶい黄褐 外：にぶい黄褐	口頸部	65-50-SC-1-ツ
41	無文土器？口縁波状を呈す？		内：橙 外：にぶい黄橙	口縁部	65-50-SC-1-オ
42			内：にぶい黄橙 外：にぶい黄橙	底体部	65-50-SZ-2-に
43	無文		内：にぶい黄橙 外：にぶい黄橙	胴部	65-50
44	無文		内：橙 外：橙	胴部	65-50
45	LR捺糸文		内：明黄褐 外：明黄褐	胴部	65-50-SZ-1
46	条痕文系の土器か		内：にぶい黄褐 外：にぶい褐	胴部	65-50-SZ-1
47	No54系統と同一		内：にぶい黄褐 外：にぶい黄褐	胴部	65-50-SZ-2
48	早期無文系		内：にぶい黄橙 外：にぶい黄橙	胴部	65-50-SC-1-せ
49	捺糸文系		内：橙 外：にぶい黄橙	底部	65-50-SZ-2
50	無文		内：にぶい褐 外：にぶい黄褐	底体部	65-50
51	早期無文		内：にぶい黄橙 外：橙	胴部	65-50-SC-1, 3
52	山形押型文 縦走施文		内：にぶい赤褐 外：にぶい赤褐	体部	
53	口線捺糸圧痕		内：にぶい黄橙 外：にぶい黄橙	口縁部	65-50-SC-1, 136/ 65-50-SC-2-お
54	No53, 54は同一個体		内：にぶい黄橙 外：にぶい黄橙	口縁部	65-50-SC-1
55	No53, 54と別個体 同一形式		内：にぶい黄褐 外：にぶい黄褐	口縁部	65-50-SZ-2
56	無文土器		内：にぶい黄橙 外：にぶい橙	口縁部	65-50-SC-1-ヤ
57	条痕文系		内：橙 外：にぶい褐	口縁部	172表
58	条痕文系		内：橙 外：橙	口縁部	65-172-フ
59	条痕文系		内：にぶい赤褐 外：明赤褐	口縁部	65-172-フ
60	条痕文系		内：明赤褐 外：明赤褐	口縁部	65-172-フ
61	条痕文系		内：にぶい黄橙 外：にぶい黄橙	胴部	65-50-SC-1
62	条痕文系		内：にぶい赤褐 外：にぶい赤褐	胴部	
63	条痕文系		内：にぶい黄褐 外：明赤褐	胴部	65-50-SC-1-ニ
64	条痕文系 繊維多		内：明赤褐 外：明赤褐	胴部	65-50-SC-1-タ
65	条痕文系		内：にぶい黄褐 外：にぶい黄橙	胴部	65-50-SC-1-ろ/ 65-50-SC-1-へ/ 65-50-SC-1-ソ
66	条痕文系 繊維多		内：にぶい黄橙 外：にぶい黄橙	底部付近	65-172-フ
67	条痕文系 繊維少		内：にぶい赤褐 外：にぶい褐	胴部	65-50-SC-1-ル/ 65-50-SC-1-ヌ
68	条痕文系 繊維少		内：橙 外：橙	胴部	65-172-フ
69	条痕文系		内：橙 外：橙	胴部	65-172-フ
70	条痕文系 繊維少		内：にぶい褐 外：にぶい褐	胴部	65-50
71	条痕文系		内：にぶい赤褐 外：にぶい赤褐	胴部	65-172
72	条痕系		内：明赤褐 外：にぶい赤褐	胴部	65-50-SZ-2
73	条痕文系		内：にぶい赤褐 外：にぶい褐	胴部	65-50
74	条痕文系		内：明赤褐 外：明赤褐	胴部	SZ-1
75	条痕文系		内：にぶい褐 外：にぶい褐	胴部	65-50-SZ-2
76			内：にぶい黄橙 外：にぶい黄橙	胴部	65-50-SC-1-し
77			内：赤褐 外：赤褐	胴部	

第6表 原谷遺跡包含層出土遺物観察表(第16, 17, 18, 19図)

No.	器種	石材	最大長	最大幅	最大厚	重量	残存率	形状	研磨	敲打	凹	備考
1	彫刻器	チャート	3.1	2.5	1.3	11.5	100	船形				
2	エンドスクレイパー	黒燧石	2.7	2.2	0.5	1.9	100	翼状				
3	ポイント	黒燧石	2.1	1.8	0.5	1.0	100					
4	磨製石斧	千枚岩	(10.0)	(4.0)	(1.1)	75.5			全面			sz-2, 89
5		黒色チャート	(3.8)	(2.0)	(0.8)	4.7						
6		黒色チャート	(1.3)	(0.8)	(0.2)	0.2						
7	剥片	チャート	(3.8)	(1.3)	(0.8)	3.7						
8	剥片	黒燧石	(2.1)	(1.1)	(0.6)	0.8						
9	搔器	チャート	(5.0)	(3.1)	(1.2)	19.9						
10	剥片	黒色チャート	(4.2)	(2.1)	(0.4)	5.0						
11	搔器	黒色チャート	(4.5)	(3.6)	(1.0)	13.8						
12	搔器	黒色チャート	(4.2)	(3.2)	(0.5)	6.7						
13		砂岩	(12.8)	(5.6)	(4.1)	357.8		握槌状				三角錐形
14	礫器	粘板岩	(6.6)	(12.2)	(5.9)	485.9						
15	礫器	砂岩(粗粒)	(18.6)	(8.9)	4.7	500.5						
16	礫器	粘板岩	(7.8)	8.3	4.8	391.9	完存					
17	礫器	砂岩(粗粒)	(9.4)	(5.9)	(3.2)	260.1	半欠					
18	礫器	砂岩(細粒)	(8.0)	(7.5)	4.5	288.1						
19	礫器	砂岩(中粒)	(7.4)	(11.0)	(3.7)	354.5						
20	打斧(分銅形)	砂岩(中粒)	(8.1)	(7.1)	(2.4)	158.5						
21	礫斧	砂岩(中粒)	(6.6)	(8.5)	(3.2)	220.1						
22	打斧	砂岩	(4.8)	(3.0)	(1.8)	20.3						打斧の破片
23		黒色チャート	(2.3)	(3.3)	(0.5)	5.6						
24		砂岩(細粒)	(5.1)	(4.9)	(1.1)	30.6						
25	搔器	砂岩(中粒)	(7.2)	(5.6)	(1.4)	72.0						
26	剥片	砂岩	(7.7)	(2.8)	(3.9)	81.9						
27	破片礫か礫器片の一部	砂岩	(6.7)	(6.2)	(4.2)	147.3						
28	打斧	砂岩(粗粒)	(7.6)	(4.2)	(1.4)	66.0		短冊形				
29	磨製石斧	砂岩(細粒)	(6.1)	4.0	3.3	100.5		三角柱状				緑色擬灰岩
30	扁平磨石orへら状石器	砂岩(細粒)	(14.5)	6.7	1.3	80.0			全面			
31	磨石	砂岩(中粒被熱)	(12.7)	(6.7)	(4.9)	432.2						
32	磨石	石英閃緑岩	18.0	13.7	6.7	2620.3						
33	磨石	砂岩(中粒)	19.3	14.5	7.8	2848.9	完存		被熱			
34	磨石	石英閃緑岩	(5.4)	(7.8)	(6.3)	292.7			全面			
35	磨石	石英閃緑岩	(11.5)	(3.8)	(3.5)	176.0						
36	磨石	石英閃緑岩	(10.2)	10.8	3.1	553.7						
37	磨石	砂岩(中粒)	(8.3)	(4.0)	(3.9)	112.7						
38	磨石	砂岩(中粒)	(9.5)	(7.0)	(3.2)	243.8			被熱			
39	磨石	砂岩(中粒)	(8.5)	(6.2)	(3.8)	231.5			被熱			
40	磨石	砂岩(中粒)	(7.6)	(5.6)	(5.0)	186.8			被熱			
41	磨石	砂岩(中粒)	(6.6)	(6.6)	(3.7)	107.4						磨石の破片
42	磨石	角閃黒雲母安山岩	(6.6)	(4.6)	2.8	136.7						
43	磨石	砂岩(中粒)	(3.6)	(6.3)	(2.5)	44.9						
44	磨石(凹石転用)	石英閃緑岩	(9.5)	(6.8)	2.7	238.6						
45	磨石	石英閃緑岩	(6.7)	5.3	3.3	176.7						破損
46	磨石	石英閃緑岩	(10.3)	6.9	4.7	534.8	半欠		良			
47	磨石	砂岩(中粒)	(10.2)	6.6	(5.7)	492.9			被熱			

第7表 原谷遺跡1号集石出土石器観察表(第20, 21図)

No.	器種	石材	最大長	最大幅	最大厚	重量	残存率	形状	研磨	敲打	凹	備考
1	磨石	石英閃緑岩	17.0	13.7	3.0	984.2						扁平
2	磨石	石英閃緑岩	13.0	11.3	2.9	579.0						扁平
3	磨石	石英閃緑岩	14.6	9.2	4.0	800.4						扁平
4	磨石	石英閃緑岩	(18.0)	12.8	3.8	363.6						扁平
5	磨石	石英閃緑岩	11.1	10.2	3.0	500.8	完存					扁平
6	磨石	石英閃緑岩	10.0	8.5	2.2	277.3			良			扁平
7	磨石	石英閃緑岩	(7.9)	(8.8)	3.0	299.1						扁平
8	磨石	石英閃緑岩	(8.0)	(6.8)	(1.8)	130.3						
9	磨石	石英閃緑岩	(6.2)	(6.5)	(2.6)	94.8						
10		石英閃緑岩	(7.0)	(5.7)	(3.6)	129.7						
11	磨石	石英閃緑岩	(7.5)	(5.7)	2.7	96.8						扁平
12		石英閃緑岩	(7.5)	(5.8)	(4.0)	195.3						
13		石英閃緑岩	(5.9)	(5.3)	(2.1)	69.9						

てらうち
寺内遺跡 10次



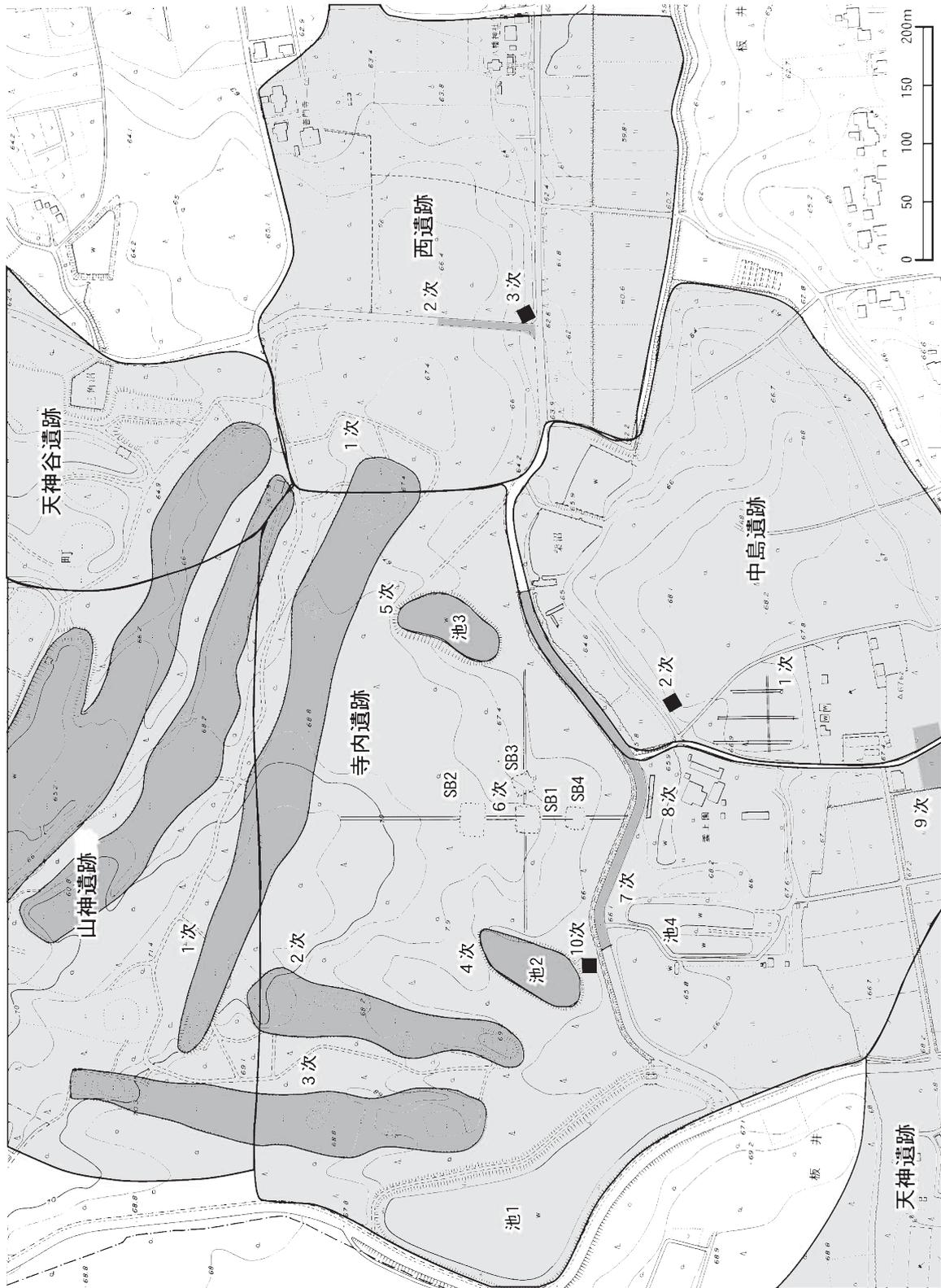
III 寺内遺跡の調査

1 寺内遺跡の立地と環境

歴史的環境 寺内遺跡は寺院伽藍跡を中心に広範な寺地を有しているが遺跡範囲のほとんどが山林内に広がるため、過去の調査はほんの一部について実施しているに過ぎない。過去の調査については「江南町史資料編1 考古」(註1)、「寺内廃寺範囲確認調査報告書」(註2)に報告しているが、南北方位に並ぶ中門跡—金堂跡—講堂跡を中心とする伽藍区画—寺域区画—寺地が広がる八世紀初頭から十世紀にかけて存続した寺院跡である。およその寺地規模は北辺570m・西辺550m・南辺450m・東辺530mを測り、東北部分には「東院」墨書土器の出土した寺内の居住域が想定されるなど寺院の維持施設が寺域を囲み、寺域内には「上院」墨書に示される政務機関などが所在し、中心部に三重塔・金堂を中心とした伽藍域が配置されることが判明している。それぞれの区画は、堀、溝、築地が巡ることがわかっており、本格的な寺院の構造をしている。賤院等に相当する東院集落や、金堂・講堂などの出土遺物により、八世紀第2四半期ころの創建、九世紀第2四半期ころ再建整備、十世紀前半代に火災により焼失し、焼失後に再建はされなかったと推定している。当地男衾郡地方の大領であった壬生吉志氏本拠地およびその氏寺である可能性が高い。

寺内廃寺の周囲には東院地区集落に東接する西遺跡が広がり、寺院と同時期の集落であることがわかっていいる。今回の西遺跡発掘調査でも同時期の住居跡が見かっている。北側に接する天神谷遺跡では窯跡が発掘されており、長頸瓶のみを焼成していた。一時的に寺で使用する須恵器を製作したものと推定される。西側は行政区が異なり、深谷市となるが竪穴住居と掘立柱建物を中心に置き区画施設で構成される遺構が発掘された百済木遺跡が所在する。七世紀後半から八世紀初頭の時期とされ、寺内廃寺の造営に先行する集落として重視している。同様に当地で寺内廃寺の造営に先行する有力古墳群としては、北方2kmに所在する鹿島古墳群と南方1kmに所在する立野古墳群が所在する。六世紀後半から造墓の始まる鹿島古墳群に比して七世紀前半より始まる立野古墳群が、渡来系氏族吉志氏が壬生部の管掌者となって当地に入植したと推定される時期に一致すると考えている。2004年以降の立野古墳群の発掘調査では八角形古墳をはじめとする15基の古墳を調査しているが、金銅製毛彫花卉形杏葉や横太刀などが出土し、八世紀第1四半期においても祭祀が継続している古墳も存在することから壬生吉志氏の一族が造営した墳墓であった可能性が高いと考えている(註3)。立野古墳群の東から北に広がる桜山遺跡はその集落域である。寺内廃寺の南側台地部では天神遺跡から男衾郡式内社出雲乃伊波比神社と推定する現鹿島神社の所在する鹿島遺跡へ続き、円面硯の出土した集落である岩比田遺跡となる。両遺跡の前面は和田川の狭い開析谷を隔て同時期の集落が調査されている塩西遺跡へと続く。東南側には寺内廃寺参道および参道口の所在した中島遺跡が広がる。中島遺跡は壬生氏の居所想定地のひとつでもある。

この寺院を含めた当時の神社・集落などの生活空間については、寺—式内社ラインに一致する方格地割がこの間に実施された可能性があると考えている。迅速図・地籍図・1948年撮影航空写真により読み取った情報を元に発掘遺構を重ね合わせ想定したもので、寺内廃寺と式内社出雲乃伊波比神社を結ぶ直線を南北基準線、現在の県道に重なる古代道路(想定男衾郡衙路)およびこれと並行する田畑の畦畔を東西基準線として認め、約130mの方格地割が寺内廃寺の建設と共に設定されたと推測したものである。先の集落遺跡はこの区画に大まかに規制された地方都市的な景観を現出していたものと推定される。これは「武蔵寺内廃寺の空間構成について」〔註2〕に示したものである。なお、参道が分岐する東西道路は熊谷市域を走る「東山道武蔵道」より分岐して荒川右岸を西方に男衾郡衙に至る路線であると考えている。



第2図 寺内遺跡・中島遺跡・西遺跡発掘調査位置図(1/5000) ■発掘調査地点

地理的環境 今回の寺内遺跡の発掘調査地点は、寺内廃寺想定寺域内の西南部分に当たると考え、西側に広がる谷地形や湧水地であった土地性状から、寺域の一部は谷地形を造成して平坦地を確保していると予想した。これは、現ゴルフ場の西側の調整池2基の発掘調査によっても観察されており、西池の場合ではその掘削時にかつての湿地また沼地であった泥質土と藻泥層の堆積層が3mあまり見られ、廃寺付近の参道部分の調査では池沼部に灯明皿使用の土器群が大量に廃棄されている状況が発掘されていた。

地形・地質の特徴としては、遺跡の北側0.8km付近に活断層のひとつとされる「江南断層」が西北—東南方向N-70°-W方位・落差7mで走行しているとされる。江南断層は、東側より西側に乗り上げる逆断層で、江南台地南縁部の野原地区に所在する丸山遺跡の発掘調査では段差3.2mと確認された(註4)。この江南断層は関東平野北西部に位置し北西—南東方向に連なる長さ50kmに及ぶ活断層群で、他に磯部断層・平井断層・上川断層・櫛引断層・深谷断層があり、深谷断層系に集約される。関東北部では弘仁9年(818)に大地震が起こったことが記録され、深谷断層周辺では深谷市居立遺跡・城北遺跡など(註5)で噴砂や液状化痕が発掘されており、同時期の地震痕跡と推定されている。今のところ江南断層近辺では弘仁9年の地震痕跡とは判定されていないが噴砂痕が宮脇遺跡で見つかっている(註6)。また、江南台地に侵食する谷の多くが北西南東方位に開口し、あるいはこの方位に歪んでいるが、これは地震活動による地形とも推定される。寺内廃寺の西側に所在する湧水と池沼は断層に起因した地下水脈の変動により生まれたものと考えられるのではないだろうか。

丸山遺跡地点では地震活動時期は縄文時代前期以降～弥生時代までの間とされ、古代での活動履歴は明らかではない(註7)。ただ、大地震のあった弘仁9年は寺内廃寺では伽藍が営まれていた時期であり、九世紀以降の差替瓦と思われる瓦の使用が認められることから、寺院建物に多少の被害が出ていたのかもしれない。この時期に行われたと推定している寺院の拡張整備の一因には地震の影響があったと考えることができる。

註1 江南町1996「江南町史 資料編1 考古」

註2 江南町教育委員会 2002 江南町文化財発掘調査報告書 第13集『寺内遺跡範囲確認調査』

註3 江南町教育委員会 2005 江南町文化財発掘調査報告書 第14集『立野古墳群』

註4 江南町教育委員会 1996 江南町文化財発掘調査報告書 第12集『丸山遺跡』

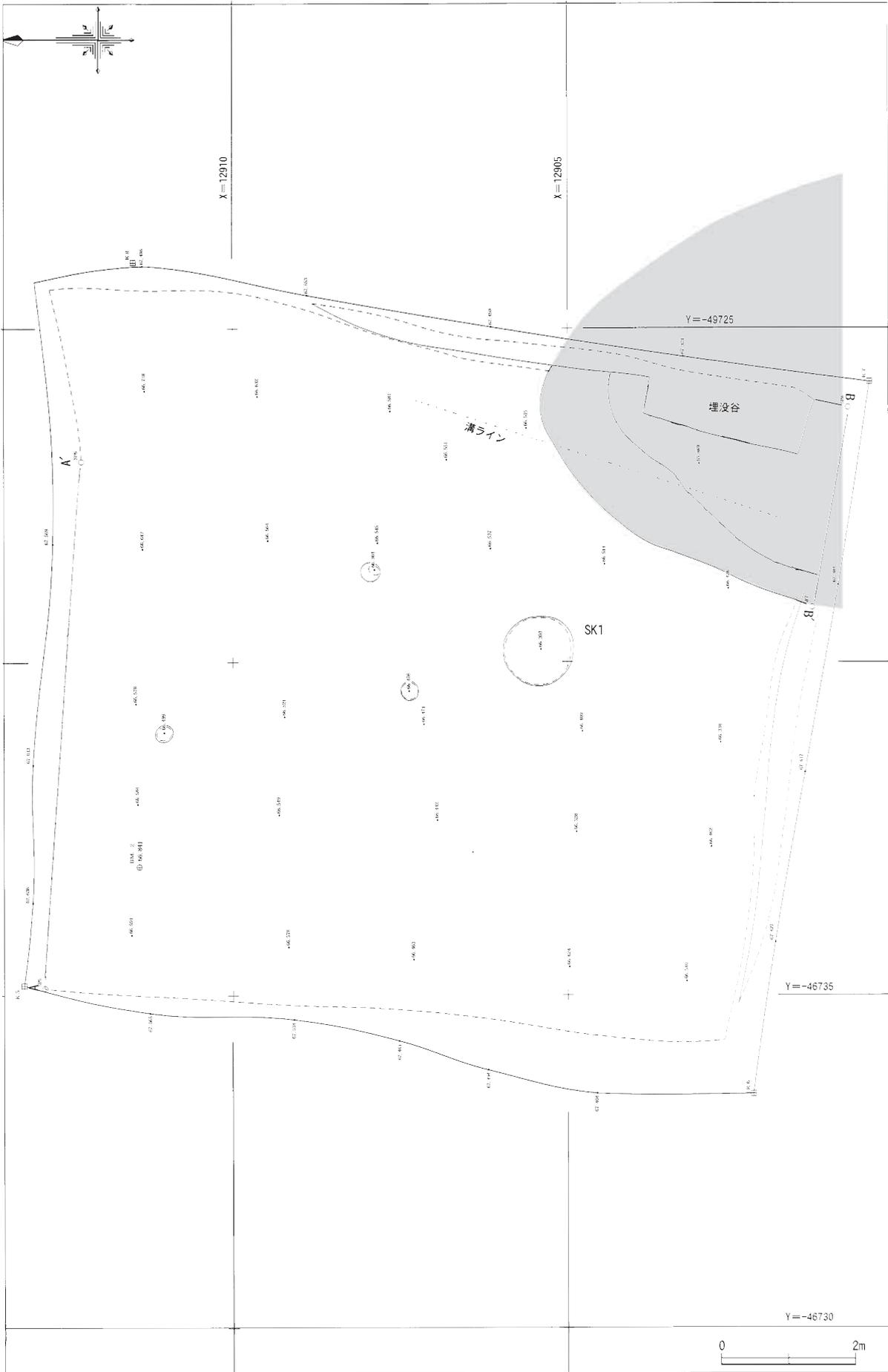
註5 (財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1995『城北遺跡』 同事業団報告書第150集

註6 熊谷市教育委員会 2009 熊谷文化財発掘調査報告書 第5集『市内遺跡群II』

註7 水野清秀 他「埼玉県岡部町および江南町における深谷断層系の活動履歴調査」産業技術総合研究所地質調査総合センター「断層・古地震研究報告」第2号(2002)

2 検出された遺構と遺物

発掘調査 今回の調査地点は第10次になり、伽藍地区画の西南想定地に近接する部分になる(第22図)。現地地形では平坦面であるが、旧地形では谷地形と想定されるため自然埋没なのか、あるいは寺院の造成に伴う整地がなされたのかという土地の履歴について明らかすることができると考えた。調査地は鉄塔敷地の10m方形内で、針葉樹の植林地でありこれを伐採し、抜痕は発掘作業とともに進めていったが、旧谷に埋没する黒泥色の堆積土は水分を良く貯留するらしいことからほとんどの木の根は水平方向への根張りが強く、他の場所とは生育が異なっていた。基準土層は北壁(第24図A-A')を例にとると、山林腐植土下は保水性の良い漆黒土(第1層)、やや締まった黒色土(第2層)、やや粘質の黒褐色土(第3層)となり層中に切れ切りに浅間Bテフラ(As-B)を挟む。2層からは古代の土器が、7層中からは縄文土器が少量出土する。黒灰色土層(第4層)はガラス質微粒子を多く含むことからローム土が粘土化したものと思われ、さらに下層の灰白色土はハードロームの粘土化したものと思われる。なお、南壁では第18層に縄文土器を含む。



第23図 寺内遺跡10次遺構配置図(1/80)

1) 遺構について

調査地点の概要 調査地点の概要を第23図 寺内遺跡10次遺構配置図で整理し説明する。

調査区は、遺構確認面が第4層上面となり66.60～66.40mを測る僅かに南下がりの地形で、東南隅部に現れた旧谷頭部分では65.80～65.40mと下がっている。調査区では時代不詳の不整形土壇が1基・小ピットが検出された。また、南東側で造成土・溝跡を確認している。溝の下位には谷地形があることから当初よりこの位置に溝を設置することで周辺の整地を行っていったと考えられる。溝跡・谷の主軸はN-17°-E方位と見込まれ、寺内廃寺の寺域区画の溝とほぼ軸が並行することから、寺域西南部分の排水溝として機能していたのではないかと推定される。

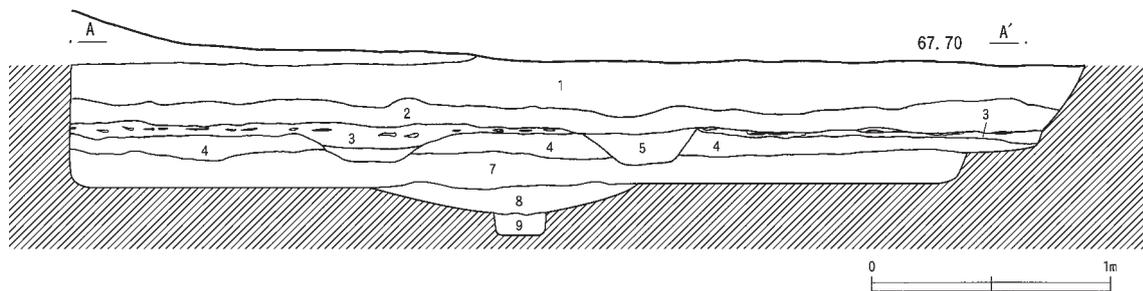
溝跡 (第24図B-B' 口絵5) 土層断面にて規模を測っている。2.6m×0.6mの広く浅い溝である。旧谷地形の西側を埋めず残すことで溝を造りだしている。埋没土は3～9層で粒子の細かい漆黒色土が基本であり、保水性が高く9層中で浸出した。溝の軸は谷の軸を踏襲するが、谷自体は北側にはあまり延長しない、溝もいわば造成平坦地の肩部分として整形されたものと思われ、北への延長は僅かではないかと考えられる。また、3層中には火山灰と思われる灰色砂層が1層確認できた。分析の結果、天仁元年(1108)に噴出した浅間Bテフラ(As-B)と推定され、後章での自然化学分析の結果においてもこの結果が報告されている。浅間Bテフラはほとんど埋没した溝覆土3層に観察され、北壁のA-A'3層中にも観察されることから、降灰時点では滞水状態であったと思われ一面に堆積したものと推定される。このことは調査区周辺が12世紀初頭までには湿地状の環境から、その後乾燥と滞水を繰り返す湿潤な環境を経過してきたことを物語っている。

谷地形と造成 調査地は溝下に現れた17層が調査地点での最下層であり旧谷の最下面に当たる。ここが谷中央となり谷幅は約5mになる。谷は東側から10～17層により埋め立てられる。層位から17、16、13層が1期の造成で、16層を挟んで黒色土(上位-黒2、下位-黒1)が堆積することから2次期の放置期間があったようである。自然化学分析によると黒1層については陸生種の珪藻を主に含み、炭化材・過熱を受けた植物片等が混じっている。このことは寺内廃寺の創建前夜は松林と草地在りとなるような里山の環境にあったと想定される。寺院地の造成に際しては刈り払い後に草藪などの焼却と片づけを行いながら、埋土作業を行っていることが想定できる。このような山林地の景観を北方に負い、南側に湧水と池沼を控え南方には郡衙道を望むことができたと考えられる。このような占地の在方は、風水思想上の四神相応の地に位置しているといえるだろう。黒2層の堆積も同様な工程によるものであろう。

第2期の造成は10、11、12層で、ローム土を主体に埋土し谷を埋めながら13層を嵩上げしている。この造成で得られた第10層上面が寺内廃寺の整備された時期に相当するものと推定される。

自然化学分析では黒1層に含まれる木片(シダ植物の葉・松か)の放射性炭素年代を測定しているが、これによると2点の木質は、それぞれ425～578、323～44年の暦年代を示している。時期はかなり遡るが創建再～建整備以前の時期を示す溝覆土を覆うテフラの年代とも齟齬はない。また、テフラ下面の3b層より出土した炭化種子(ヤマモモか)の放射性炭素年代は802～973年の暦年代を示していることも矛盾はない。

なお、出土遺物の中で瓦・須恵器はいずれも細片だが溝覆土の4層～2層にかけて出土した。

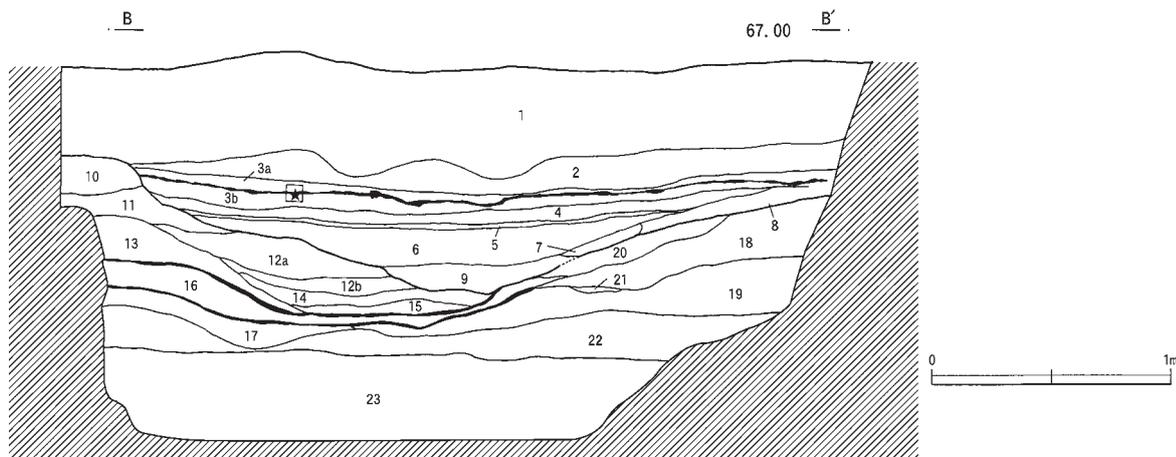


北壁

土層説明 (A A')

- | | |
|--|---|
| <p>1 黒茶褐色土層 細粒、粘性少
 2 黒色土 黒味強い、細粒、粘性少ない、火山灰粒子少量
 3 漆黒色土 灰色火山灰層、ダマ状に肥厚へ薄く堆積(As-Bか)を含む
 ※火山灰層は3層の全体にみられるが連続していない、所々途切れる状況
 4 黒褐色土 ローム粒子、根の鉄分が見られる、粗粒、粘性やや強い—遺物、奈・平を含む—布目瓦出土
 ※遺物を少量含む
 5 黒茶褐色土 粘性弱、やや砂質
 6 灰黒色土 粘性弱、砂質</p> | <p>7 灰褐色粘土層 粘性強く固くしまる、ローム粒、鉄分多—水積ローム土か—縄文
 ※造成土か、ローム土を主体にした—調査区は土土層上で検出面とした
 8 灰黄色土 砂質、粘性低い、粗粒
 9 所見
 7層—寺院地の造成土
 4層—創建造成～3層堆積までの造成か堆積土</p> |
|--|---|

当地は、常時ではないが雨水の溝留するような低地部で7層の造成整地を行ったが4—3層の堆積をみた特に3層は水漬状池で(湿地状) As-Bが堆積した溝状の掘込

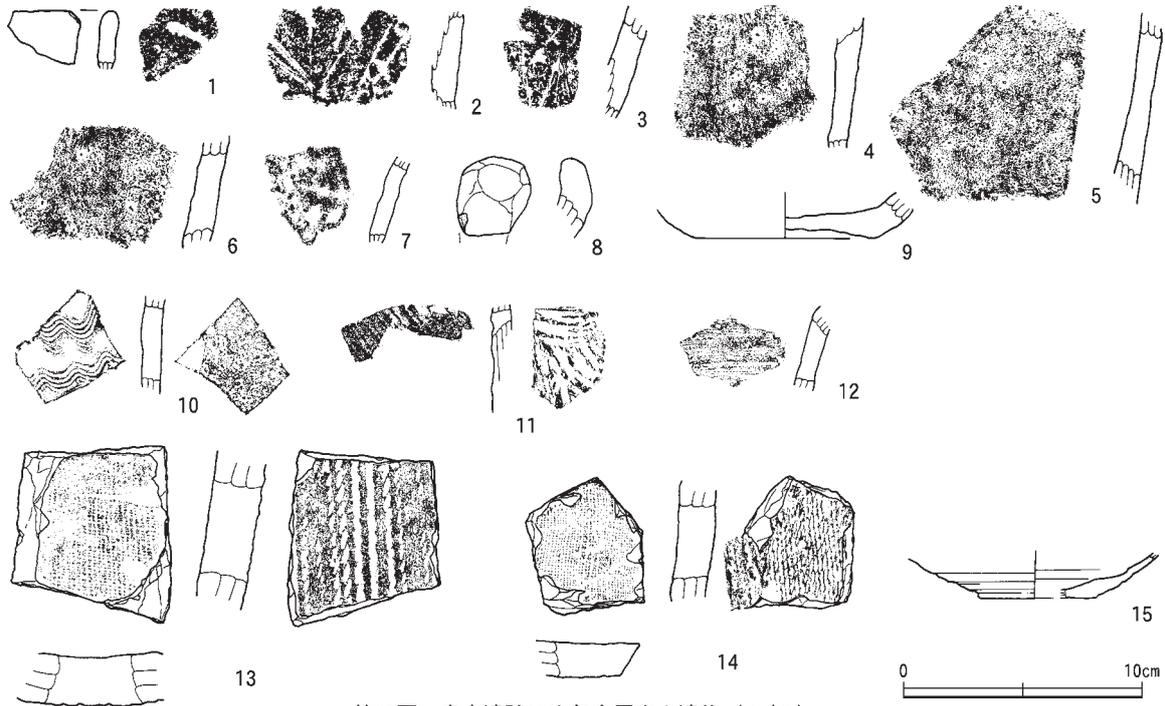


溝・埋没谷

土層説明 (B B')

- | | |
|---|--|
| <p>1 黒褐色土 砂質、粘性少
 2 黒色土 やや砂質—遺物少瓦
 3a 漆黒色土 黒味が強い、粘質あり—遺物少瓦
 3b 漆黒色土 黒味が強い
 3層中に As-B を挟む、As-B は所、ダマ状にかたまり波打つが概ね均一に堆積する、合板用サンプル採取
 4 黒褐色土 均質な、黒褐色土
 5 4層中の黒灰色土の溝層
 6 黒褐色土 均質な、黒褐色土、やや粘質
 7 黄褐色土 ロームより細粒、細砂、粘性強、良質な、カベ土状
 本層は薄く上下方の水平方向に帯状に堆積
 8 黒灰色土 粘質、水漬の粘土、硬くしまる
 9 黒灰色土 灰色味強、粘質、軟質
 10 黒褐色土 黒色味強い
 11 黒灰色土 黒色味強い
 12a 灰黒色土 灰色味強い、粘土化したローム粒子を多く含む
 12b 灰黒色土 黒色味強い、ローム粒子少
 13 粘土化したローム塊、黄白色、酸化鉄斑 1～3cm大、灰黒色土を含む混土層
 14 灰黒色土 黄白色粘土、ローム塊の混土層
 15 灰黒色土層 黒色土薄層を挟む混土層
 15—16間に黒色土の薄層を挟む
 17 混土層 灰黒色土、ローム土粘土化、黄白色土</p> | <p>18 黒灰色土 粘質土、硬くしまる—谷地形の埋没土(縄文期の地表)
 19 黄灰色粘土層に黒色土、ローム粘土が斑状に入る層
 22層への漸移層
 20 黒褐色土層 褐色土粒を含む
 21 黄白色粘土塊
 22 黄灰色粘土層 やや砂質、粘性強
 23 黄灰色純粘土層 粘性強、細粒、緻密
 ※ 18層土面—縄文期の地表
 17—19—18層上の凹地は旧谷地形
 16—10層はAs-B堆積記までに谷を埋め立てた造成土→寺創又は拡張期
 溝1—9層は寺の西側溝か又は湧水池か
 溝2—6層は寺の西側溝か又は湧水池か
 □はサンプル採取位置</p> |
|---|--|

第24図 寺内遺跡10次土層断面図(1/30)



第25図 寺内遺跡10次包含層出土遺物 (1/3)

第8表 寺内遺跡10次出土遺物観察表 (第25図)

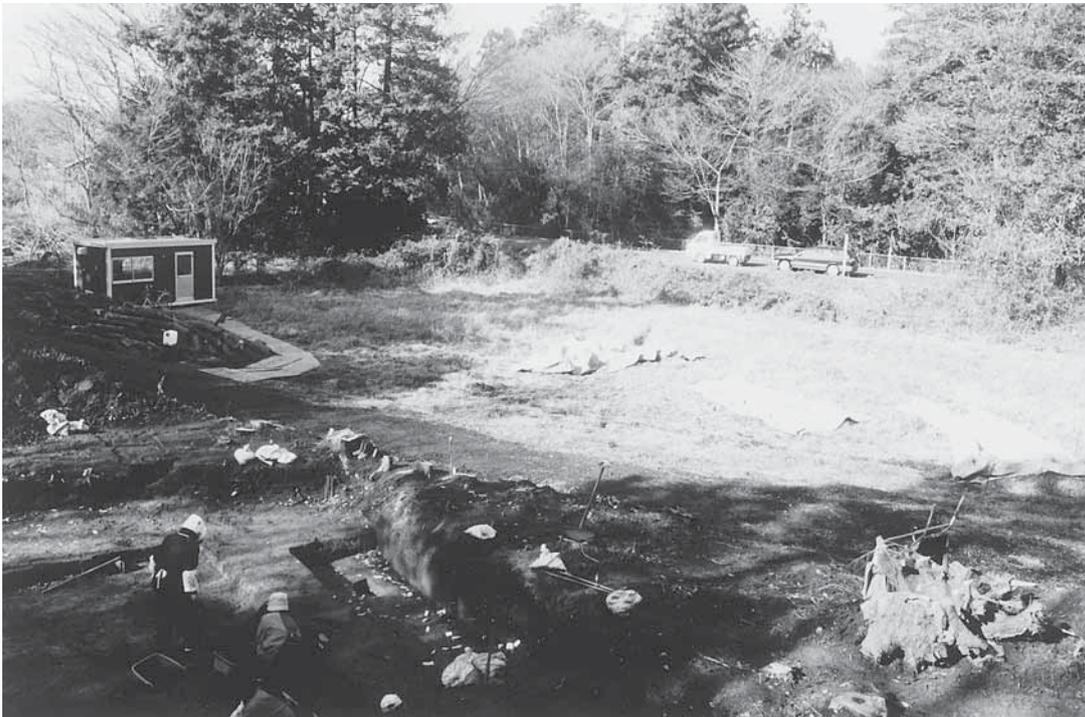
No	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	縄文土器				石英 細砂		にぶい黄橙		状の沈線
2	縄文土器						にぶい黄褐		表面荒れ 文様剝離不明
3	縄文土器						淡黄		状文
4	縄文土器								
5	縄文土器				片岩多		淡黄 断面内面：黒色		表面凡化 文様不明 5,6,7は同一胎土
6	縄文土器				片岩多		淡黄 断面内面：黒色		表面凡化 文様不明
7	縄文土器				片岩多		淡黄		表面凡化 文様不明
8	縄文土器			(7.4)			淡黄 断面内面：黒色	底部	器面凡化剝離 文様不明
9	縄文土器・後期						暗灰黄		表裏面凡化剝離
10	須恵器・甕						灰	口縁部	ヨコナデ
11	須恵器・甕						黄灰	胴部小片	内：円弧タタキ
12	須恵器・甕						灰褐	口頸部	クシ6本 自然釉
13	平瓦	布目高さ10cm、幅11cm(1cm)			細砂 長石 斜状物				南比企産 タタキ縄タタキ 1枚造
14	平瓦	布目高さ11cm、幅6cm(1cm)			細砂 小石 斜状物		灰青色		南比企産 タタキ後ナデ 1枚造
15	須恵器						橙		底部

2) 出土遺物について

包含層出土の遺物 (第25図 第8表)

調査区からの出土遺物は碎片が多く、実測可能な遺物は図示した15個体の縄文土器・須恵器・瓦である。1～9は縄文土器片で沈線で羽状文を描く。粗製の土器で他の無文の土器とともに後期堀の内式の中に含まれるものであろう。10～12は須恵器小破片で、10は須恵器甕の口縁部に波状文が二段施文される。焼きは薄手で堅緻である。13は一枚造の平瓦で凹面布目、2cm間に縦12緯14本を数え、凸面は粗めの縄叩きで整形されている。14は1枚造りの平瓦で凹面布目、2cm間に縦18緯19本を数える、凸面は細かい縄叩きで整形されている。これらの須恵器・瓦はいずれも九世紀前半ころのものと思われる。

なかじま
中島遺跡 2次



IV 中島遺跡2次の調査

1 中島遺跡の立地と環境

歴史的環境(第22図参照) 中島遺跡は寺内廃寺の寺地範囲の南東側に広がる標高66~68mの平坦な山林台地で、周囲に谷が取り巻くため島状の景観をしている(写真図版1)。地名の起りはこの地形にあり、西側に湧水点をもち明治中ごろまでは寺内廃寺に近接する一帯は湿地由来の谷縁(ヤベリ)地名となっており、この排水が寺内廃寺の伽藍域を区分する谷を流下し柴沼(寺内沼)に貯水され、東方に開ける下流の水田用水となっている。南側は寺内廃寺からの参道が中島遺跡の西側台地縁を通り南下するが、平成10年の調査では寺内遺跡9次調査地点で参道口の遺構を検出している(註1)。参道口遺構は東西から取り付く区画溝と寺内から延びる両側溝をもつ路面幅9mの参道との交点にあたり、中門想定地から300mを測る。参道には柱穴がありその構造から寺地の区画を明示する性格をもった棟門遺構と推定している(註1)。さらに南側地点で、東から入る侵食谷に接続する排水路で南側台地部と切り離される。また、昭和40年代に寺内廃寺の西側湧水地に釣堀が掘削され、50年代に周囲の水田の区画整備がなされた。同時期、柴沼へ至る谷津田についても現況の範囲で土地改良と水路改修が行われ、平成2年のゴルフ場造営により寺内廃寺南側から西遺跡へ通ずる道路が新たに山林内を造成して造られた。

この地形で特に注意されることは、寺内廃寺伽藍側と中島遺跡を隔てる谷地形(中島の谷)のあり方である。本来中島遺跡の南側に入る侵食谷を見ると狭長な谷が進入するものの、最奥部のため池となって留まっている。谷を取り巻く等高線もこれに沿って収束することからほとんど旧地形を残していると考えられる。江南台地部を解析する谷のほとんどはこのような形状をしている。一方、北側に侵入する谷は上下の柴沼を越えて谷縁の湿地へ続く。この谷間が不自然なのは寺内沼までの谷地形と「中島の谷」の方位が80°近く南に折れること。谷の形状幅が約30m程度だが直線的であり、谷部分へ移行する斜面がないこと。などが観察される。これらのことから、前記の特徴は中島遺跡側では台地縁の削り落とし、伽藍側では谷を造成し平坦地を拡張するなどの地形改変を行っているためと考えられる。当初の谷の姿は柴沼の位置が旧来の谷最奥部に当たり、中島一寺内間はそれほど深い谷は入ってはいなかったと思われる。現在見る谷の景観は人工的な地形改変によるものであると考えられる。人工の要因と開田や溜池構築の時期を考えることが改変の理由となるが、その結論は寺内廃寺の創建とその伽藍整備および寺地の維持によるものである。

発掘調査による知見では、現在の谷田に設定した試掘溝により、ローム面が水田半ばで確認され旧来の谷が狭く参道付近の谷縁付近まで達していないこと。谷北側の伽藍内部は造成土により土盛り、平坦地の拡張を谷側に行っていること(寺内7次)などが想定された。寺内廃寺伽藍東側に設置された雨水池(池3)の発掘調査(寺内5次)では住居群とこのような整地層が窺われたことなどが証拠として上げられる(註2)。

前述のような「中島の谷」の開削は、寺内廃寺伽藍域を造成する際に、次のような諸環境を整備することを意図して行われたと考えている。伽藍域と中島遺跡の寺内維持施設を区分することで寺域と俗地を隔てるため。谷縁付近の湧水点からの排水を容易にすること。また、柴沼の貯水量を安定させかつその水量を有効に利用すること。このような地形の改変により持たされる効果は、寺を造営し維持した檀越の経済活動に反映され、集落域での金属加工や寺領や周辺地での農業生産などの成果向上に現れたものと思われる。なお、谷田経営に関してはほぼ後世へそのまま受け継がれてきていると考えられる(註3)。

今回の発掘調査でも、堅穴住居跡より鉄滓が出土しており、第5次調査地点と同様に小鍛冶施設が想定される。場所・時期からみても寺内廃寺の維持に関った施設であり、古代にあつては寺内廃寺の南東部に位置

し寺地と南側に広がる鹿島遺跡の集落域との中間地帯に当たることから、寺の檀越であったと推定する「壬生吉志氏」の居住域である可能性もある。

中世期では、方形郭を構成する土塁状の高まりが参道跡に接して観察され谷縁館跡として報告している(註1)。一部分ではあるが発掘調査の結果、北辺の土塁1(第4トレンチ)は、幅5.2m、深さ0.8mの堀と基部幅7.2m、現状高1.2mの土塁が確認され、土塁3(第5トレンチ)では文明18年の紀年銘(1486)を持つ板碑などの出土遺物から中世後期には氏名は伝わっていないが、このころの有力土豪の築造と推定される。当所、板井地域は前節「寺内遺跡の調査」での「歴史的環境」にも述べたが、古代男衾郡の大領であった壬生吉志福正の本拠地と、郡式内三社の一社である「出雲乃伊波比神社」の所在する郡中枢の一所と想定している。当時の郡家は未発見だが現在の寄居町赤浜～男衾付近を候補地としているが、いずれにしても荒川右岸台地域である。寺内廃寺南面を通ると思われる古代道路はこの郡家へ至る荒川右岸地方の台地を結ぶ幹線道として、以後中世～現代へと踏襲しているものと思われる(註3)。

谷足館跡より出土した板碑の作られた文明年中は、古河公方足利成氏と扇谷・山内両上杉氏の抗争・対峙から、山内上杉氏に叛いた長尾影春の抵抗と絡み合い北武蔵一帯は戦時下の緊張にあった。「小山文書」によると文明10年(1478)鉢形城に拠っていた長尾影春は、熊谷・成田付近に軍陣を構える足利成氏と、村岡付近に対峙していた上杉方を背後から衝くべく板屋(板井)に出陣したとされる。板屋とは板井の地名表記で、永禄9年(1566)の北条氏邦文書に板屋(板井)の地を併和又八郎に与えたことでも見られる(註4)。僅かな文書資料ではあるが谷足館跡と板井地区の歴史を解く鍵のひとつである。なお、この近辺では中世武士の拠点や氏名はほとんど伝わっていないが、戦国期末には深谷上杉氏に従ったといわれる小久保氏が隣村千代に館を有していることが知られているなど、深谷上杉氏以後、後北条支配下の寄居鉢形城を拠点とした北条氏、忍城を拠点とした成田氏、松山城を拠点とした上田氏に属するなどが錯綜していたようであり、熊谷市域を拠点としたものは見られないようである。小久保氏の領有地千代村は文禄4年(1595)の検地を受けており当地方では最も初期の検地実施場所でもあった(註5)。

註1 江南町教育委員会 2002 江南町文化財発掘調査報告書 第13集『寺内遺跡範囲確認調査』

註2 江南町1996 「江南町史 資料編1 考古」

註3 江南町教育委員会 2002 江南町文化財発掘調査報告書 第13集『寺内遺跡範囲確認調査』・江南町教育委員会 2005 江南町文化財発掘調査報告書 第14集『立野古墳群』

註4 江南町 1998 「江南町史 資料編2 古代・中世」

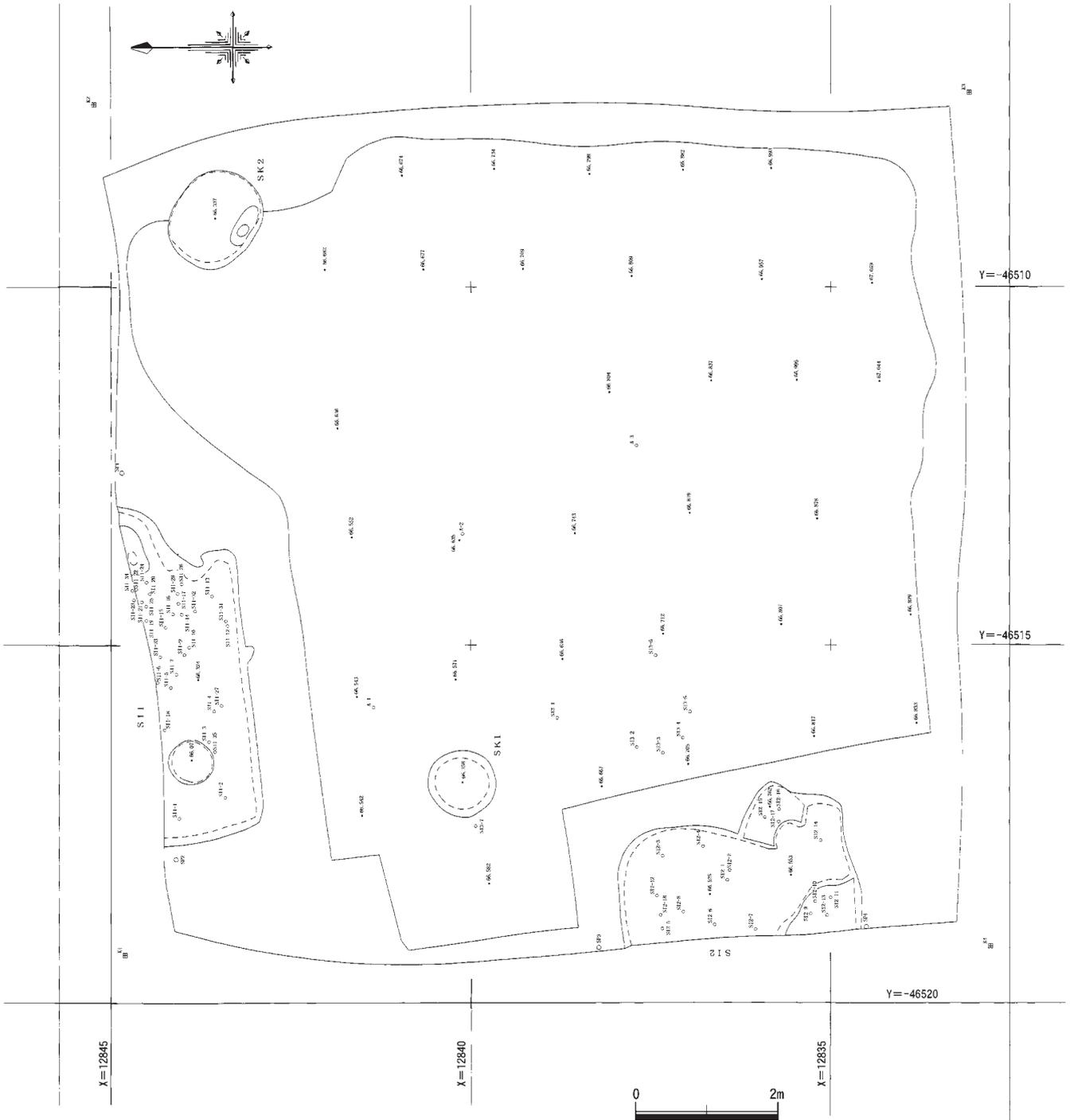
註5 江南町 2003 「江南町史 資料編3 近世」・江南町 2005 江南町史 通史編 上巻」

2 検出された遺構と遺物

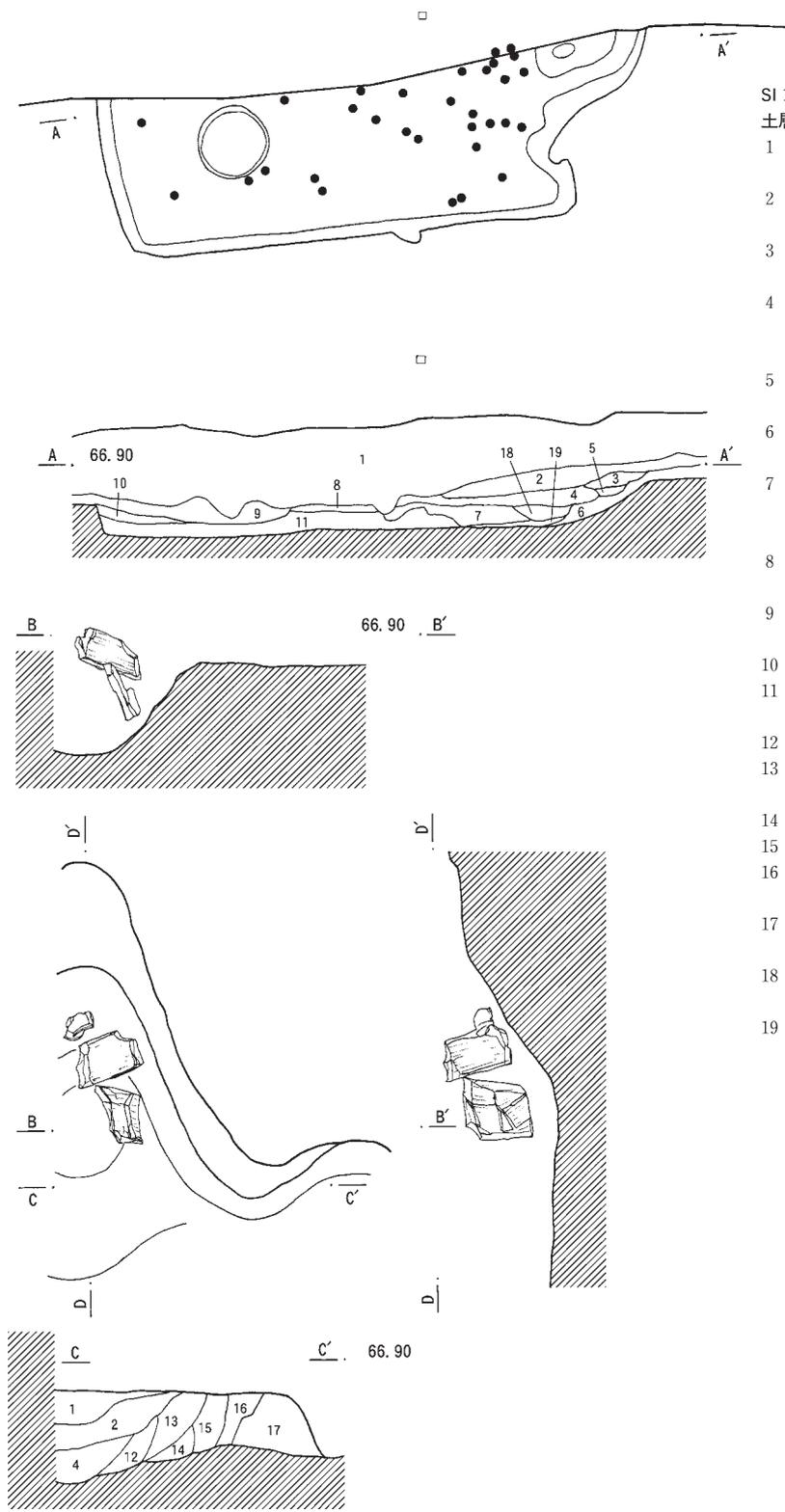
1) 遺構について

調査地点の概要 (第26図) 調査区は約10m方形で、平安時代の竪穴住居跡2軒、土壇1基を検出している。遺構は確認できなかったが縄文時代後期の土器が包含層より出土している。今回の調査地点は第2次になり、中島遺跡の北辺部分になる。現地は谷に面した平坦地で水田面とは約1mの段差を持っている。現在の水田と調査区の山林部との間に農道が造られているが、これは昭和50年代に造成されたもので山側を削平している。調査区の北側に検出された1号住居跡の北壁は、これによって削り取られている可能性がある。

現状では山林地であり、40年～50年以前に植林がなされている。発掘作業では抜根はせず人力で根の処理をしながら除去する方法で発掘を進めた。基準土層は江南台地の典型的な山土で①腐植土か②ローム土混じりの茶褐色土―③黄茶褐色ローム層―④黄褐色ローム層になる。古代以前の遺構確認面はたいていの場合



第 26 図 中島遺跡 2 次遺構配置図 (1 / 80)



- SI 1
土層説明 (A-A', D-D')
- 1 黒褐色土 細粒粘質、フク土、山林土
 - 2 黒茶褐色土 細粒粘質、焼土粒子混じり
 - 3 赤茶褐色土 細粒粘質、ローム粒子、焼土混じり、カマド天井周辺土
 - 4 茶褐色土 細粒粘質、粘質強い、焼土ローム土混じり、カマド天井構築土
 - 5 赤茶褐色土 焼土混じり、カマド天井土
 - 6 赤黄色土 ローム土、カマド中一下層土、赤変
 - 7 茶褐色土 ローム、白色粘土粒混じり、カマド周辺土、上面硬化、貼床面
 - 8 ロームブロック土 粘質土—貼床面、硬化
 - 9 黒褐色土 ローム土、焼土、炭化物混じり土
 - 10 黄褐色土 ローム土を多く含む
 - 11 黒褐色土 ローム土混在—貼床下の埋め土
 - 12 茶褐色粘質土 焼土多
 - 13 茶褐色粘土 焼土ローム多—カマド内壁面、片岩埋め込み土
 - 14 黒茶褐色土 カマド構築土
 - 15 カマド袖構築土 片岩埋め込み土
 - 16 黄茶褐色土 粘土、ローム、カマド芯
 - 17 カマド袖構築土 茶褐色土、硬くしまる、右袖外面
 - 18 茶褐色土 焼土、粘質土、天井一部か
 - 19 焼土層

第2図 中島遺跡2次第1号住居跡(1/60)・カマド跡(1/30)

2層中から遺構を切り込んでいるが、確認面は③層上面となる場合が多い。

第1号住居跡 SI 1 (第27図) 調査区の北側に住居南辺の一部を検出している。東辺にカマドをもつ方形竪穴と思われる。北辺は区外になることから、ほぼ全体の3分の1を調査したに過ぎない。住居はカマドを通る軸線を主軸とするとN-83°-Eの傾きを示す。南辺3.9m、西辺1.35mを測る。表土から住居内部まで大きくかく乱が入るが、覆土は主に5層の堆積が認められる。覆土中には土師器。須恵器等の破片を交えている。南壁・西壁は70~80°で立ち上がり、ほぼ直線的である。床面は直床でローム硬質面で止まる。カマド前面を中心に硬くしまっている。床面上から13、14の須恵器杯、須恵器甕破片、鉄滓が出土している。鍛冶炉や羽口などは調査範囲では見つからなかったが、第5次地点調査で大鍛冶炉、鍛冶炉などの鉄器加工遺構が見つかったので、本住居も製鉄関係の工房的建物であった可能性があろう。

カマド跡は東壁に位置し、南側ほぼ2分の1を検出した。平面三角形状を呈し、袖は壁の一部を掘り残すことで芯とし粘土を貼って燃焼部を構築している。長さ1.8m、燃焼部の長さ1.0mで、煙道の大半はかく乱で失われていた。燃焼部は建物外に位置し、おそらく掛け口の部分が東壁線上に位置する。なお、このカマドは緑泥石片岩の板状石を組み込んで燃焼室を作っており、耐火性及び耐久度の高い造りとなっている。鍛冶を行うためのカマドあったかもしれない。土師器甕、須恵器破片を覆土中に含んでいた。

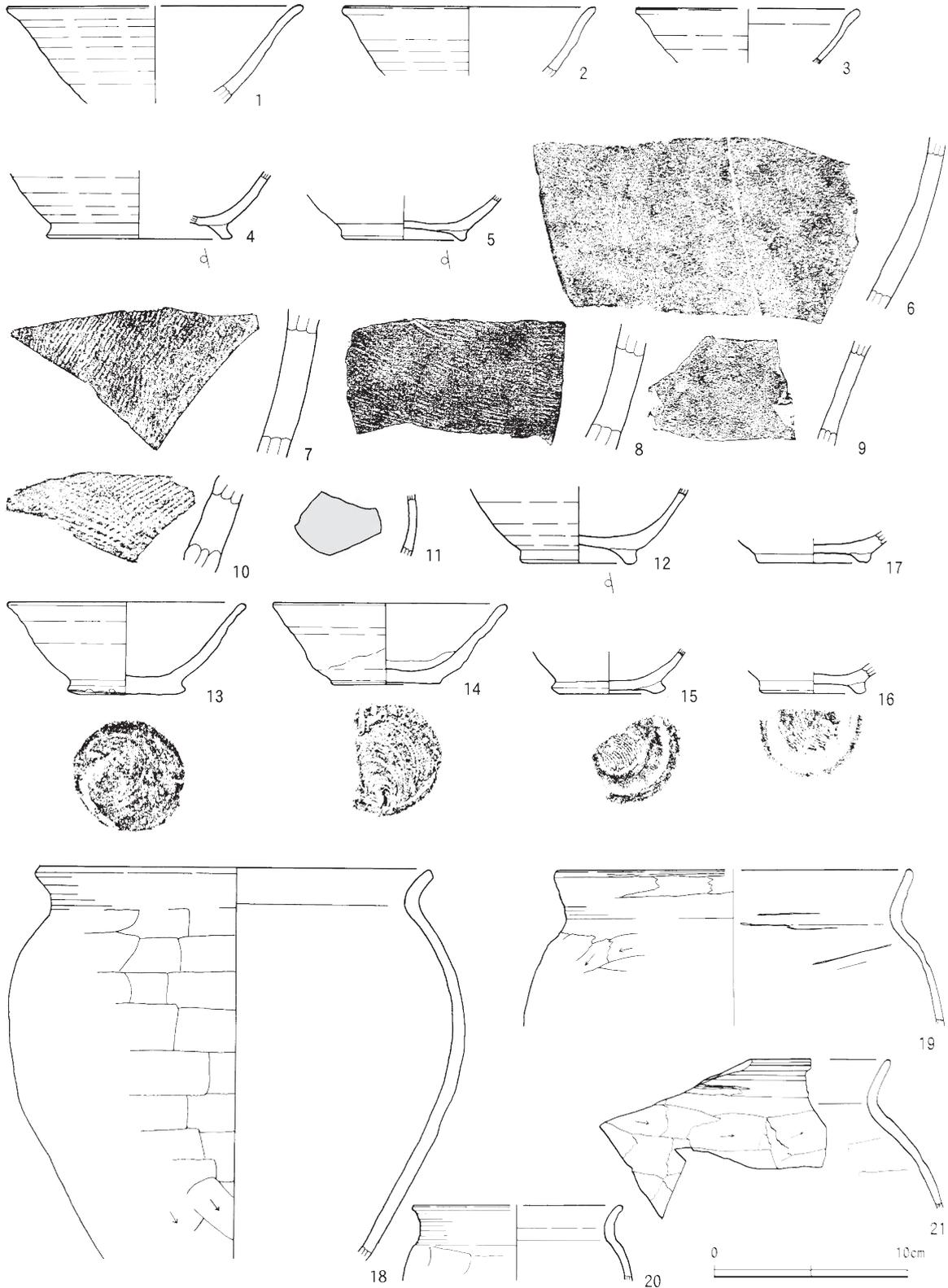
出土遺物 (第28・29図 第9表) 出土遺物は床面及びカマドからであり、須恵器杯・甕、土師器甕・羽釜、土師質須恵器高台杯などが出土している。およそ9世紀後半代から10世紀にかかる遺物である。

1~5は須恵器杯で、焼成良好で灰色、青灰色をしている。胎土から末野産と思われる。1、4は口径が15cmを超える大型の杯で4のように高台がつくものである。12~16は焼成不良の土師質の須恵器である。14は器内面に黒耀色の炭化物がこびりついていることから灯火器の使用が想定される。18~34は土師器甕型土器である。18は体部上半に最大径をもち、口縁部が「くの字」状に短く外反する。19は口縁部が直立気味に長く立ち上がる。21、22はやや肩の張る器形から、台付甕であろう。22~34までは小片であるが甕の口縁部と底部である。35、36は羽釜の一部で鏝の突出は1.6センチとやや低い。37~40は鉄滓で、覆土下層または床面から出土している。37は碗形をしているがほぼ2分の1に分割されているようである。分割面は平坦である。38.39.40は小型で全体が残っている。

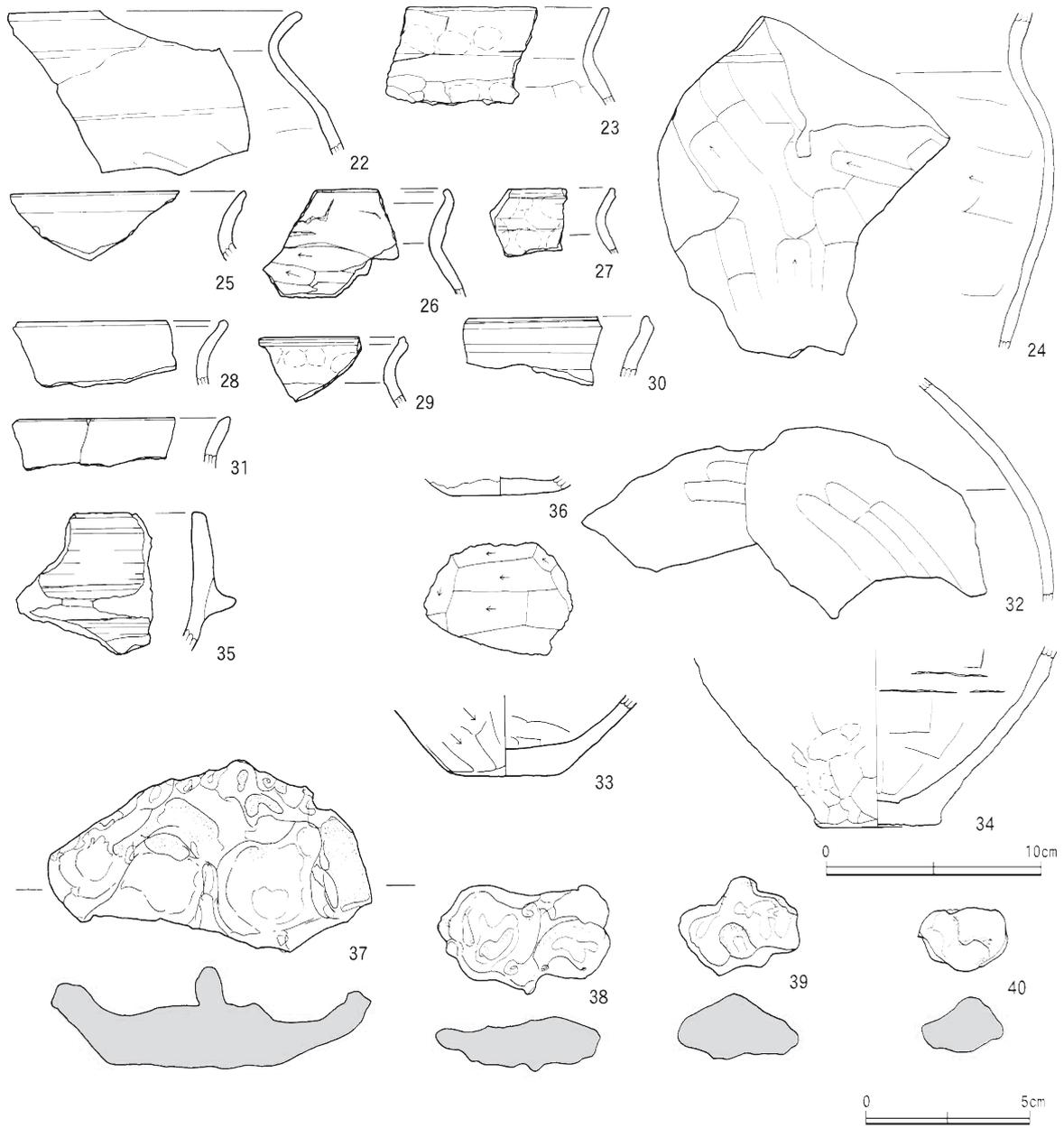
第2号住居跡 SI 2 (第30図) 調査区の西側に住居東辺の一部を検出している。東辺にカマドをもつ方形竪穴と思われる。西辺は区外になることから、ほぼ全体の2分の1を調査したに過ぎない。住居はカマドを通る軸線を主軸とするとN-82°-Eの傾きを示す。南辺1.8m、東辺3.2m、北辺1.4mを測る。覆土は主に3層の堆積が認められる。覆土中には土師器。須恵器等の破片を交えている。南壁・東壁は70~80°で立ち上がり、ほぼ直線的であるが、北東隅は丸くなり、南東隅部はかまど壁を残して突出する。床面は直床、ローム硬質面で止まるが、床面はあまり締まりがない。床面上から1、2、3の須恵器杯、須恵器甕破片などが出土している。

カマド跡は東壁に位置し全体を検出したが、あまり焼土化していないため遺存状態は不良である。平面三角形状を呈し、袖は壁の一部を掘り残すことで芯とし粘土を貼って燃焼部を構築しているようである。長さ0.8m、幅0.7mでほぼ燃焼部を残している。煙道の大半は失われていた。

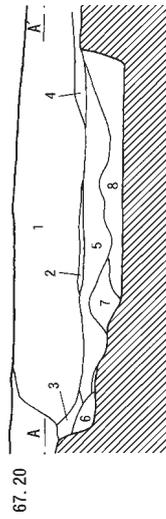
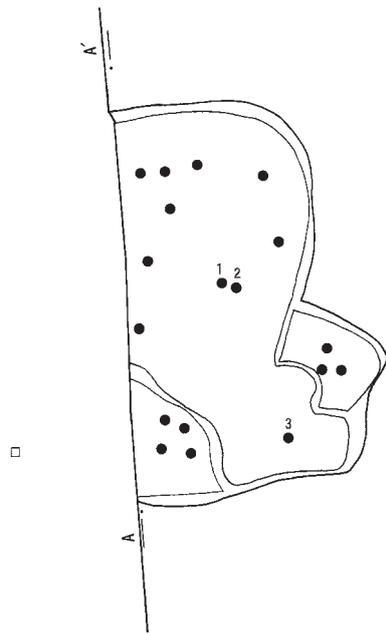
出土遺物 (第31図・第10表) 出土遺物は床面及びカマドからであり、須恵器杯・甕、土師器甕・羽釜、土師質須恵器高台杯などが出土している。およそ9世紀後半代から10世紀にかかる遺物である。



第28図 中島遺跡2次第1号住居出土遺物(1/3)



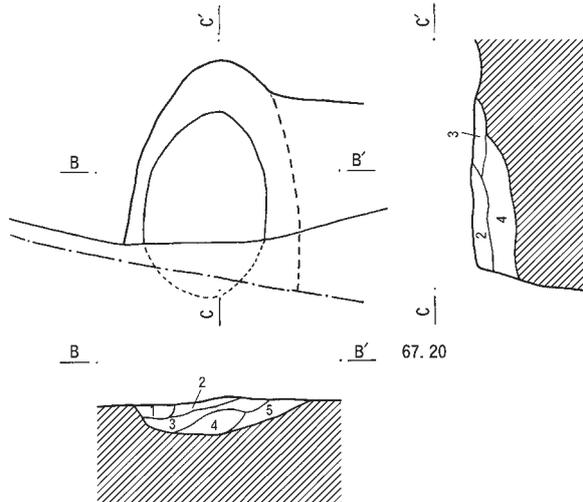
第29図 中島遺跡2次第1号住居出土遺物(1/3) 37~40(1/2)



SI 2

土層説明 (A-A')

- 1 表土 山土、腐食土、黒色土、細粒、粘質
 - 2 黒褐色土 硬くしまる、床面
 - 3 黒褐色土 ローム粒子を含む、粘質
 - 4 暗褐色土 ローム粒子混じり
 - 5 暗褐色土 黒色土、ローム土を斑状に混じる、上層硬くしまる、中下層は軟質
 - 6 暗褐色土 黒色土を多く含む、ローム土少量含む
 - 7 ハードローム塊・黒色土、茶褐色土を混在する層
 - 8 茶褐色土 ローム粒子、混じり、埋め戻し土
- ※ 2層5層上面を床面とする、以下は貼り床
遺物は1層中及び床上より出土

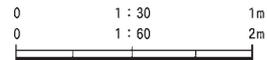


SI 2 カマド

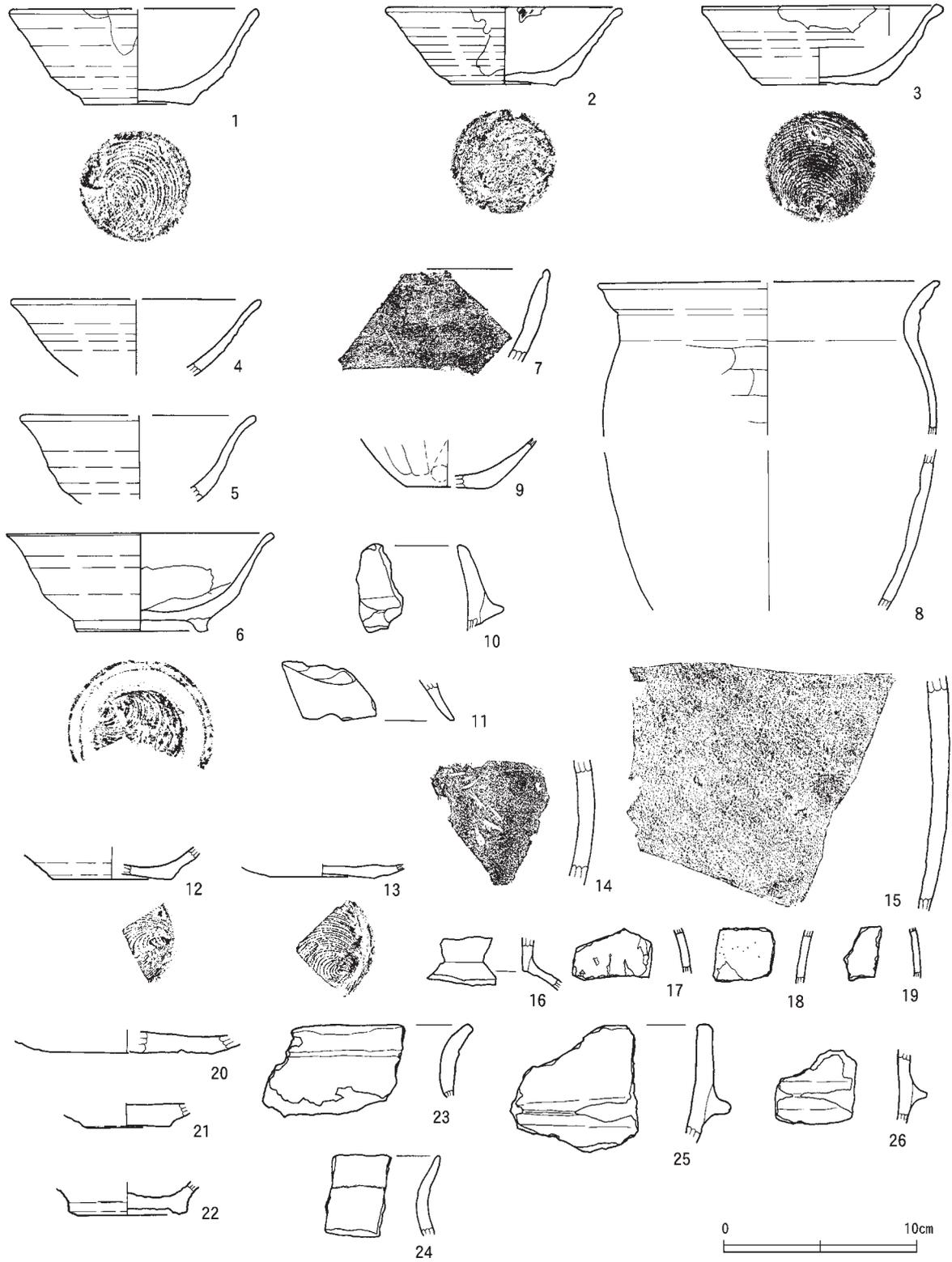
土層説明 (B-B', C-C')

- 1 ソフトローム混じり黄褐色土 細粒
- 2 茶褐色土 黒色土混じり
- 3 茶褐色土 焼土小塊、粒子混じり
- 4 焼土、ローム土混じり、茶褐色土
- 5 黄茶褐色土 ローム混じり

焼成不良、あまり使用されなかった
火床はソフトローム地山、あまり焼けていない
遺物No.16カマド中出土



第30図 中島遺跡2次第2号住居跡(1/60)・カマド跡(1/30)



第3図 中島遺跡 2 次第 2 号住居跡出土遺物 (1 ~ 11) ・ 調査区一括 (12 ~ 26) (1 / 3)



第32図 中島遺跡2次一括出土遺物(1/3)

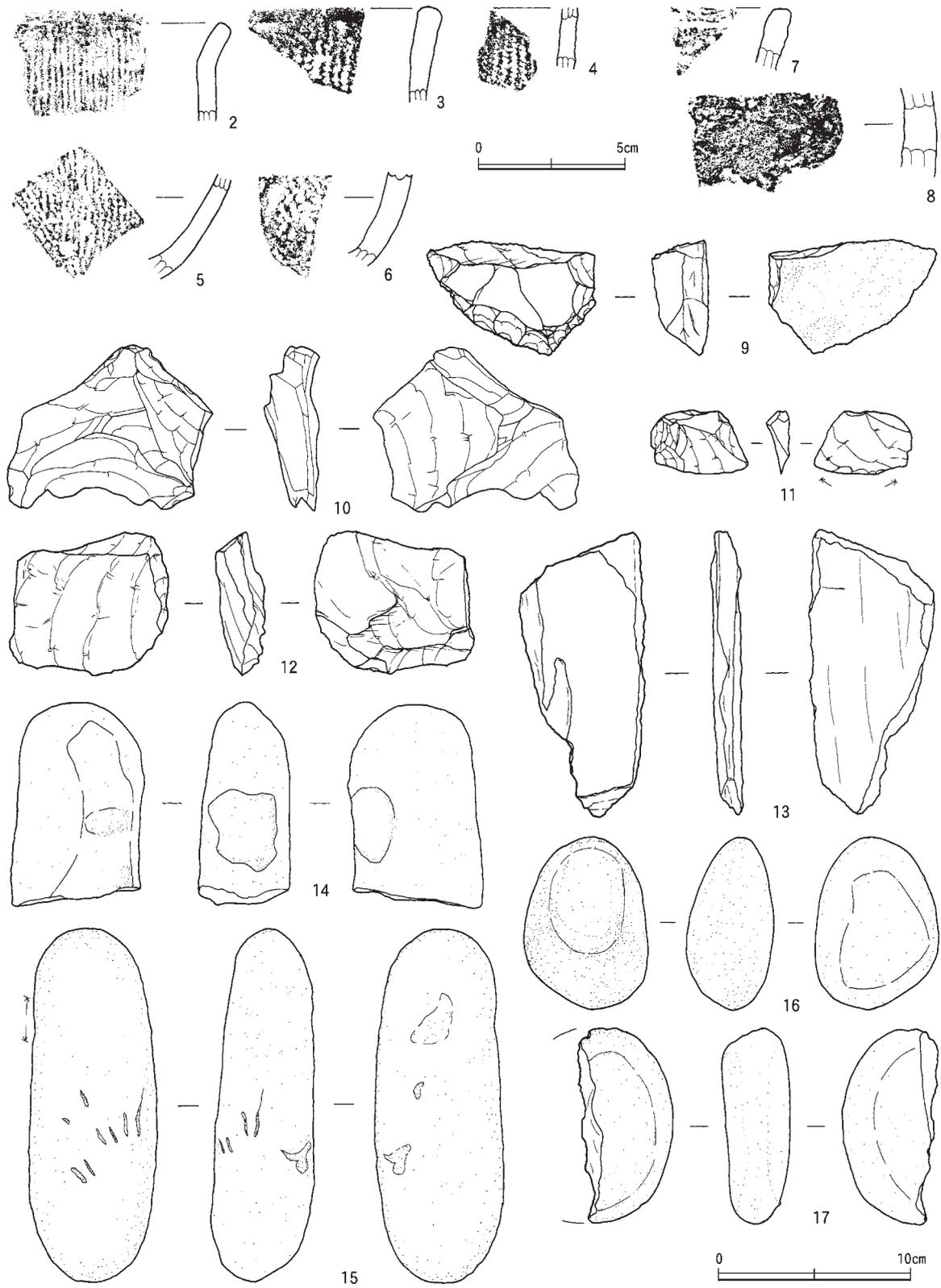
1～3は土師質須恵器杯である。1はやや体部が張る。2・3は体部は直線的である。口径、底径、器形ともほぼそろっており焼成も似通う。油煙、灯心跡が残り明らかに灯火器に使用されている。6は体部下半に明瞭な稜段を持ち、稜碗風である。内面にタール状炭化物や広く付着しており灯火器であったと思われる。16～19は灰釉陶器破片である。破片となっているが長頸壺か瓶であろう。10、25、26は羽釜で10は口縁部が内反、25は外反する。

2) 出土遺物について (第32～34図 第11表)

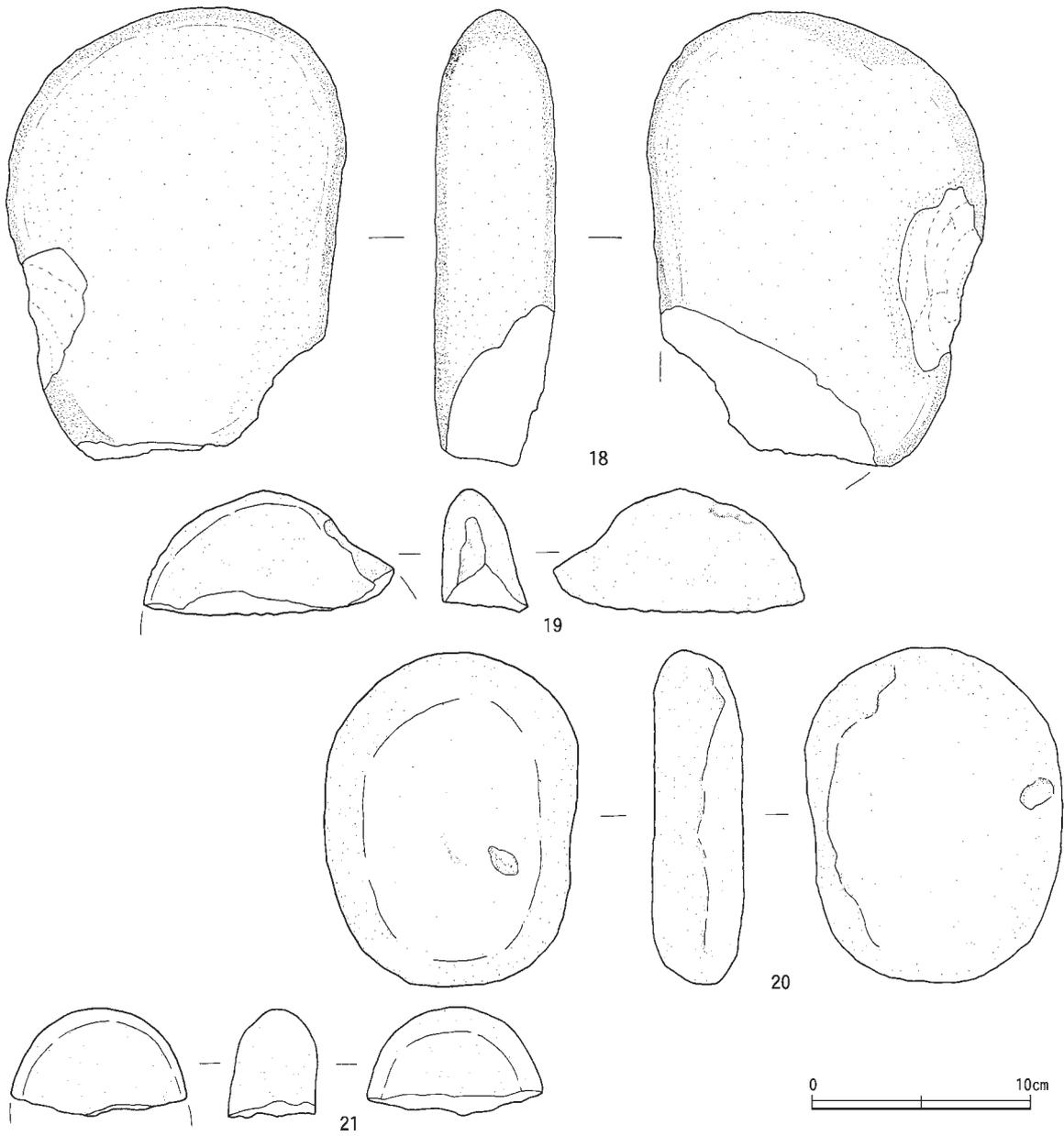
調査区出土の一括の遺物について取り上げる。器形を窺いえない土師器細片などを除くと、すべて縄文時代の遺物であるが、当該期の遺構は調査区から見つかっていない。

第32図1は深鉢型土器で、口縁から胴下半までの体部で円周の約3分の2まで遺存していた。口縁部外面にはU字状の弧線内に縦方位の沈線を4～5本充填した図を四単位残している、円周から振り分けると当初は6単位であったと思われる。体部はヘラなどでされているが文様は施されていない。縄文時代後期の粗製土器と思われる。第33図2～6は縄文時代早期撚糸文系土器である。1は口縁が外反し口唇上面に撚糸文を、口縁直下からは同じ撚糸文を垂下させている。撚糸はRLで井草II式に相当する。3はやや肥厚する真直ぐな口縁部から撚糸文を垂下させる。4は体部か。5・6はともに底部付近であるが、撚糸は5がRL、6はLRでいずれも夏島式である。7・8は条痕文土器で7は口縁部に絡状体圧痕をもつことから子母口式にあてられる。

石器は縄文時代に属する一群で、9は片面に礫表皮を残すことから礫斧・礫器の破片と思われる。10、12は大形の剝片である。14は棒状礫の分割材であるが、折面はとくに磨耗がなくスタンプ形石器としては未使用と思われる。15～21は磨石で15が棒状であるほか、他はすべて楕円扁平礫を使用している。



第3図 中島遺跡2次一括出土遺物(1/3)、2~8(1/2)



第 34 図 中島遺跡 2 次一括出土遺物 (1 / 3)

第9表 中島遺跡2次第1号住居出土遺物観察表(第28.29図)

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	須恵器・坏	(15.2)	(5.0)				灰白		末野
2	須恵器・坏	(13.0)	(3.6)				灰白		末野 口縁部ユビナデ 砂粒多
3	土師器・坏	(11.6)	(2.8)				灰		
4	須恵器・坏		(3.5)	(8.4)			灰	付高台	2, 4は同一個体
5	須恵器・坏		(2.3)	(6.0)			灰	付高台	末野
6	須恵器・甕						灰白		表面被熱 やや風化 南比企
7	須恵器・甕						灰		8と同一個体
8	須恵器・甕						灰		内:円弧タタキ 外:平行タタキ 南比企
9	須恵器・甕						青黒	口頸部	末野か
10	須恵器・甕						暗青灰	体部	内:ヨコナデ 外:平行タタキ 末野か 炭化層あり断面
11	灰袖陶器						灰白	壺小片	外:自然釉 濃緑色
12	土師質須恵器・高台付椀		(3.9)	(6.0)			にぶい黄		
13	須恵器・椀	(12.3)	(4.8)	(6.1)			内:にぶい褐 外:褐灰		底部は粘土板状 粘土本主 末野
14	土師器・坏	(12.1)	(4.2)	(5.6)			にぶい赤褐		油房付着 灯明皿か
15	須恵器・高台椀			(5.8)			浅黄		焼成不良 末野
16	須恵器・高台椀			(5.4)			橙		焼成やや不良 赤色 末野
17	須恵器・高台椀			(5.6)			褐		軟質小石多 焼成不良 末野
18	土師器・壺	(20.6)	(20.3)				黄橙		器厚日の甕 内面黒色質付着 煮炊用か 底部欠 底部33と同一個体か
19	土師器・壺	(18.4)	(8.1)	—			にぶい黄橙		
20	土師器・壺	(10.8)	(3.9)	—			にぶい橙		
21	土師器・壺						橙	口縁1/8	焼土固着 カマド内
22	土師器・壺						にぶい黄橙	口縁1/8	
23	土師器・壺						橙		
24	土師器・壺						橙		
25	土師器・壺						橙		
26	土師器・壺						にぶい黄橙		口縁内弯
27	土師器・壺						黄橙		
28	土師器・甕						橙		
29	土師器・壺						黒褐		27と同一個体か
30	土師器・甕						黒褐		
31	土師器・甕						橙		
32	土師器・壺						明赤褐	肩~胴部	器面風化
33	土師器・甕		(3.7)	(5.0)			橙	底部	
34	土師器・甕			(5.9)			にぶい褐		
35	土師器・羽釜						にぶい橙	ツバ部	
36	土師器・甕						にぶい褐	底部	
37	椀形鉄滓		重さ118.8g						流動形 錆化もろい
38	鉄滓		重さ40.3g						
39	鉄滓		重さ24.4g						
40	鉄滓		重さ12.8g						

第10表 中島遺跡2次第2号住居出土遺物・調査区一括出土遺物観察表(第3図)

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土師質須恵器・坏	(13.0)	5.0	5.8			橙		灯明皿
2	須恵器・坏	12.3	4.0	5.5			黄褐		灯明皿 小石砂多
3		12.4	4.1	6.0			にぶい黄橙		須恵器坏 土師質灯明皿
4	土師質須恵器・坏	(13.0)	(4.0)	—			内:にぶい褐 外:橙		
5	須恵器・坏	(11.8)	(3.9)				灰		末野 小石多
6	須恵器・高台付椀	(13.8)	(5.1)	(6.9)			灰		内面スス油質付着 灯明皿か
7	?						灰		須恵器壺肩か 鉄栓の底部か
8	土師器・壺	(17.7)	(8.0)	—			内:明赤褐 外:褐		
8	土師器・壺						内:にぶい赤褐 外:暗褐		8と同一個体
9	土師器・甕	—	(2.5)	(4.5)			内:明赤褐 外:明褐	底部	
10	土師器・羽釜						暗灰黄		
11	土師器・壺						橙	台付甕の脚裾	
12	須恵器・大型の杯か	—	(1.75)	(6.3)			灰黄		
13	須恵器・坏	—	(0.7)	(5.4)			灰		
14	須恵器・甕						内:黄灰 外:暗灰黄		
15	須恵器・甕						灰		内面円弧タタキ 外面平行タタキ
16	灰袖長頸壺						内:にぶい黄 外:灰オリーブ	小片	
17	灰袖長頸						灰白	体部片	
18	灰袖長頸壺						灰黄	頸片	
19	灰袖						灰白	小破片	
20	土師器・鉢か		(8.8)				暗灰黄		
21	土師器・甕		(4.5)				橙		
22	土師質須恵器・高台付甕		(6.1)				黄灰		風化著しい 凍製
23	土師器・壺						橙		
24	土師器・甕						橙	口縁	
25	土師器・羽釜						赤褐		
26	土師器・羽釜						暗灰黄		

第 1 表 中島遺跡 2 次一括出土遺物観察表 (第 32. 33. 34 図)

No.	器 種	口径	器高	底径	胎 土	焼成	色 調	残 存 率	備 考			
1	縄文土器・深鉢	(32.0)	(40.5)				黄橙	2 / 3	内外面ヘラナデ 後期堀ノ内?			
2	縄文土器						にぶい黄橙	口縁	井草 II LR 口長 体直下			
3	縄文土器						にぶい黄褐	口縁	夏島式			
4	縄文土器						橙	胴部	撚糸文土器 夏島 LR			
5	縄文土器						橙	胴部				
6	縄文土器						明赤褐	底部	撚糸文 夏島			
7	縄文土器						橙	口縁	子母口式 絡状体圧痕			
8	縄文土器						橙	胴部	条痕文 繊維多			
No.	器 種	石 材	最大長	最大幅	最大厚	重 量	残存率	形状	研磨	敲打	凹	備 考
9	礫器	砂岩(細粒)	(8.8)	(5.5)	(2.6)	151.5						折れか
10	大形剥片	砂岩(細粒)	(11.2)	(8.8)	(3.0)	187.1						残骸か
11		砂岩(粗粒)	(5.4)	(3.3)	(1.3)	20.2						
12	剥片(打斧か)	砂岩(細粒)	(8.0)	(7.5)	(2.0)	138.6						
13		緑泥片岩	(14.0)	(6.5)	(1.3)	196.4						片岩石皿用材か赤変炊用材であろう
14	磨石	石英班岩	(10.5)	(6.8)	(4.8)	497.6	1 / 2					全周研磨
15		砂岩(粗粒)	(18.5)	(6.4)	(5.3)	954.2						
16	磨石	石英閃緑岩	(8.9)	(6.5)	(4.6)	341.9						全周研磨
17	磨石	石英閃緑岩	(10.3)	(5.0)	(3.5)	248.1						平坦面を良く研磨している。
18	磨石	石英閃緑岩	(11.5)	(15.0)	(5.5)	2653.6						平坦面良く研磨
19	磨石	石英閃緑岩	(11.3)	(6.2)	(4.0)	275.6						全面良く研磨
20	磨石	石英閃緑岩	(10.5)	(11.5)	(4.2)	119.09						全面研磨
21	磨石	石英閃緑岩	(7.8)	(5.2)	(4.1)	219.0						全周面良く研磨

にし
西遺跡 3次



V 西遺跡3次の調査

1 西遺跡の立地と環境

歴史的環境 西遺跡と寺内廃寺、中島遺跡の位置関係は第22図で説明する。寺内廃寺伽藍跡を中心に置く寺内遺跡の周囲にはそれぞれ各方向に集落が広がるが、西遺跡は寺内廃寺から見て東側に広がる集落である。地名の西を取って遺跡名としているが、これは地名の基点が現在の柴八幡神社にあり、その社の西側に位置するため小字地名を「西」としているのである。西遺跡の中にはもとの八幡神社が所在したといわれる場所があり、「元八幡」との地名で呼ばれる。この場所は1次と2次の調査地点の間になる。本来八幡神社は寺の地主神として祀られることが多く、寺内廃寺の場合にもそうであった可能性がある。寺内廃寺の寺地東北地区は墨書土器の出土が示すとおり「東院」と呼ばれた寺院の維持機関で、資材帳などの文献にみえる「賤院」にあたるものと思われる。主に寺院施設の維持と日常生活を維持するさまざまな生産活動を行なった世俗的な実務機関で、寺で働く匠や工人・職人・農民などが一定の統制のもとに居住活動していた場所と考えている（註1）。寺内1次・5次発掘調査では、多くの竪穴住居跡・掘立柱建物と共に銅滓・鉄滓、鍛冶炉、釘・鎌などの鉄製農具、漆の塗られた土器などが多数出土している。西遺跡はこの東院集落とは寺地溝を隔てて展開する集落であるが、遺構・遺物とも規模の点と質と量の点でそれほど差異があるわけではないようである。ただ東院集落では、「東院」「寺」「花」「大家」などの墨書が出土すること、竪穴住居跡の建替、拡張が顕著に行なわれており、瓦や石材などの資材をカマドに転用している（註2）。

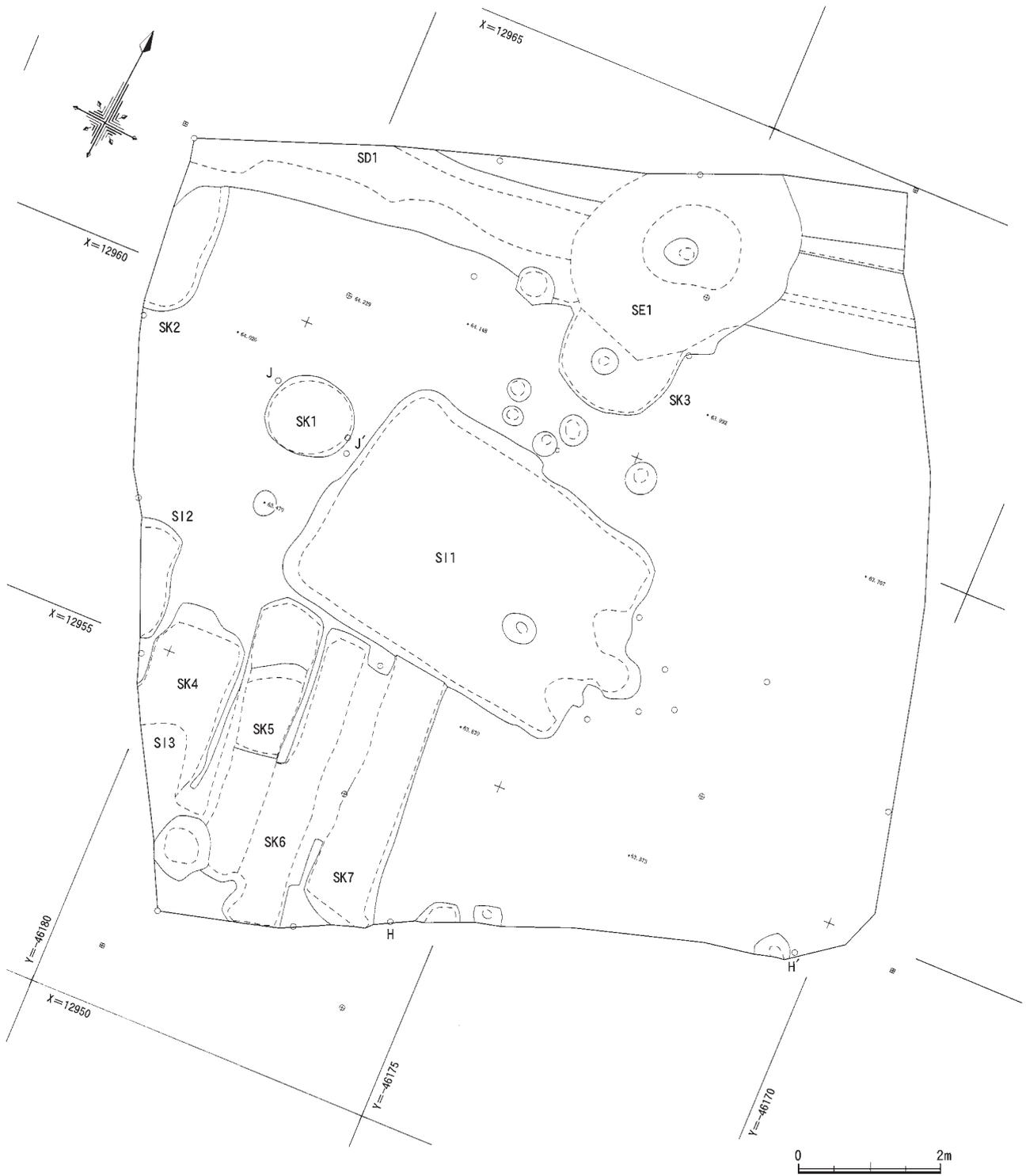
西遺跡は寺院に接する集落として東院集落との連携関係を想定するものだが、南面の柴沼から流末の谷田に向かい合う場所でもあり、おそらく寺院の農業生産に携わった人々の集落ではないかと考えている。ここに含まれる水田はいまでも「堂ノ下」の小字名で呼ばれるものがある。1次調査地点は寺地東辺溝の外側で竪穴住居跡住居5～6軒を検出している。溝の規模は幅5m深さ0.8mで内側には溝の排土を盛上げた低い土塁があったと想定されるが、侵入を拒むような厳格さはなく、区画を示すことに主眼があったのではないと思われる。2次調査地点は寺地溝の東方150m付近で、道路新設部分を調査している。調査区は谷に面する緩斜面の中下位にあたり、竪穴住居跡がまとまって検出された。住居跡の床からは鉄製の鎌が出土している。今回の調査地点である3次調査は2次調査地点に隣り合う部分である。1～3次の調査地点は前記のように任意に設定されたもので、数十年来山林であった地域であり、調査期間中にはオオタカが付近に営巣していた。地理的環境は寺内廃寺の節と大差ないので省略する。

- 註1 新井 端 1994『渡来人と仏教信仰—武蔵国寺内廃寺をめぐって— 柳田敏司・森田悌編
江南町 1996『江南町史 資料編1 考古』
江南町教育委員会 2002 江南町文化財発掘調査報告書第13集『寺内遺跡範囲確認調査』
- 註2 新井 端 1993『埼玉県大里郡江南町寺内廃寺』『日本考古学年報』45
江南町 2005『江南町史 通史編 上巻』

2 検出された遺構と遺物

1) 遺構について

調査地点の概要（第35図） 現況は南側が市道、西側も2次調査により発掘後、道路となっていた。東、北側は数十年来の山林である。標高は65～64.5mのほぼ平坦地である。調査は針葉樹の植林地を伐採し、抜根は発掘作業とともに進めていったが約10m方形の調査区から、平安時代の竪穴住居跡3軒、土壇9基、溝



第35図 西遺跡3次遺構配置図(1/80)

1条、井戸1基を検出している。うち第1号住居跡は全体を発掘した。調査区の東南部分は谷地形に移行する部分であったため、黒色土壌の堆積が厚く、第1号住居のカマド煙道は黒色土上に設定されていた。この黒色土層は1号溝付近まで延びており、当時の西遺跡を区分する谷であったかもしれない。

なお、調査区には柱穴状の小穴が数基検出されたが、覆土に現代の遺物を混入している場合、山芋掘り穴と判断している。

基準土層は北壁(第37図H-H')を例にとると、山林腐植土下は砂質の茶褐色土(第1層)、黒褐色土(第2層)、やや粘質の黒色土(第3層)黄褐色ローム土(第4層)となるが、斜面上位3層から黄褐色ローム土になる。2層からは古代～中世の土器が少量出土する。

第1号住居跡 SI 1 (第36図) 調査区のほぼ中央に位置する。東辺にカマドを持ち平面形は長方形を呈する。住居はカマドを通る軸線を主軸とするとN-100°-Eの傾きを示し、正しく方位に住居辺を合わせている。北辺4.37m、西辺3.35mを測る。東辺は3.0mとやや短い。住居の掘り込みはほぼ真直ぐで、壁の立ち上がりも70～80°で立ち上がり垂直に近い。地形が東南下がりのため北～西側の壁が高い。床面は張り床がなされておき、およそ4層の覆土が認められた。床面に明確な柱痕が認められず、柱穴跡も認められなかった。貼床下は凹凸があり不整形であるが、南壁際には貼床下の土壌があった。

遺物は床面とカマド周辺に見られ、須恵器杯・土師器杯、甕などが出土している。貼床土中から鉄釘(第40図17)が出土している。住居の時期は遺物から八世紀前半の時期に位置付けられる。

カマド跡は東壁に位置し、遺存部分の全体を検出したが、当初の煙道はほとんど検出できなかった。平面長方形状を呈し、袖は壁の一部を掘り残すことで芯とし粘土を貼って燃焼部を構築している。長さ1.5m、燃焼部の長さ1.0mで、煙道の大半は失われていたが、地山の赤変部分から1m以上を想定している。カマド燃焼部は建物内に位置し、おそらく掛け口の部分が東壁線上に位置する。なお、このカマドは焼成部がレンガ状に良く焼けており、頻繁の利用を想像させる。

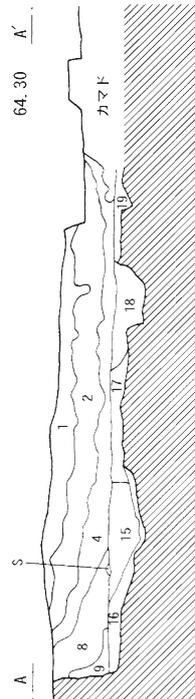
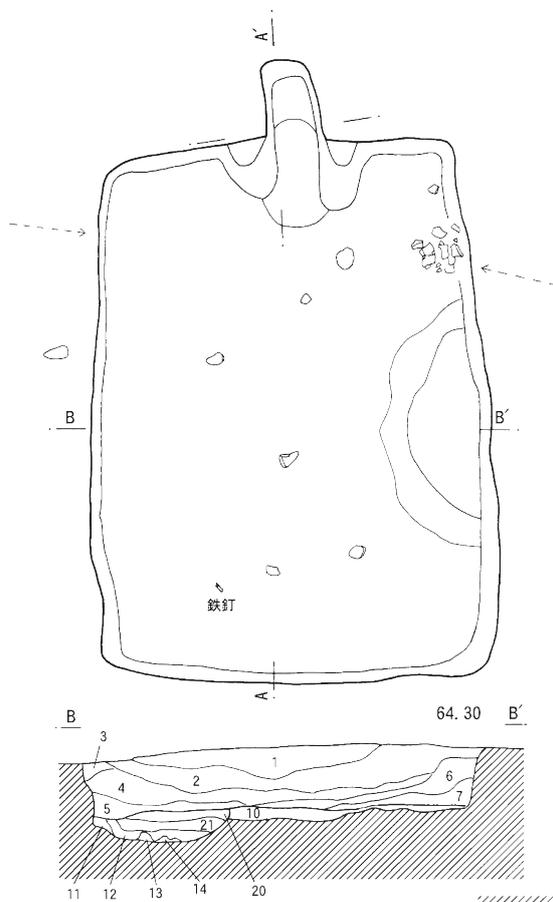
第2号住居跡 SI 2 (第37図) 調査区の西壁の一部を検出した。竪穴住居の北西隅部と思われる。掘り込みはやや浅いが、隣り合う中世期の土壌とも状況が異なるため、一応住居跡とした。出土遺物は土師器・須恵器片のみで図化できる資料はなかった。

第3号住居跡 SI 3 (第37図・第40図) 調査区の南西隅に一部を検出した。土壌4号が上位に切り合うことから、竪穴住居の遺存状態は良くない。北西隅部と思われる掘り込みが確認できたため住居跡とした。

出土遺物は土師器・須恵器片である。第40図19、20は須恵器杯で、19の底部には回転糸切痕が残る。20、21は須恵器甕の破片である。いずれも九世紀前半に位置づけられる。

第1号井戸跡 SE 1 (第35、38図) 調査区の北側、1号溝を切り込んで構築されている。平面楕円形で、上面直径2.2～2.6m、深さ0.8mを測る。断面形は漏斗状を呈し、8層下面で地山の白色粘土層となる。遺構の形状や、調査中にここより出水したため井戸跡とした。

第1号土壌 SK 1 (第35、38図) 調査区西半、第1号住居跡の西側に検出された。ほぼ円形で、直径1.2mを測る。2層に近い黒色土が覆土で深さ15cm、底面は平であった。

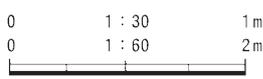
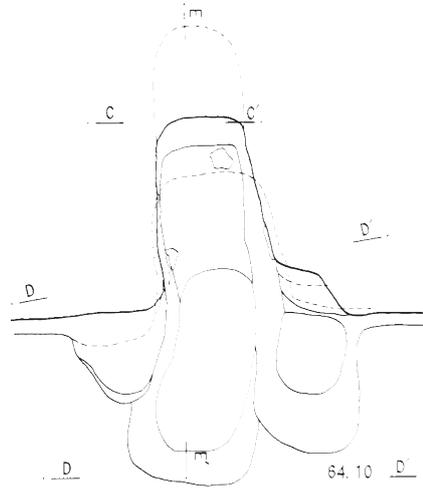
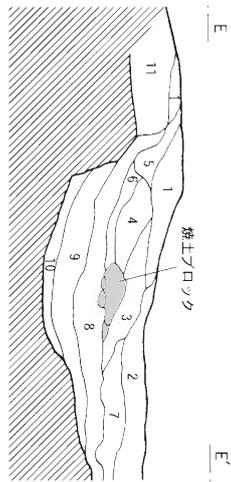


- S11 土層説明 (A A', B B')**
- 1 漆黒色土、砂質、粘性あり
 - 2 黒茶褐色土、粘質、ローム粒子多、褐色味強い、遺物少量
 - 3 黄茶褐色土、ローム土塊含む
 - 4 黒茶褐色土、細粒、ローム塊を下部に含む
 - 5 黒茶褐色土、ローム土多い、細粒
 - 6 4層と同じ
 - 7 混じり
 - 8 暗茶褐色土、ローム塊、細粒
 - 9 茶褐色土、ローム土混じり層
 - 10 暗茶褐色土、ローム土塊茶褐色土を含む土層
 - 11 暗茶褐色粘質土、地山土混在
 - 12 暗茶褐色、地山土の塊
 - 13 暗茶褐色粘質土、やや軟質
 - 14 12と同じ
- 土層説明 (C C', D D', E E')**
- 1 黄茶褐色土、焼土、ローム粒子、ローム塊混じり、粘床土硬くしまる
 - 2 地山、暗茶褐色土
 - 3 黄茶褐色土、硬質ローム塊、茶褐色土、粘床土
 - 4 暗茶褐色土、ローム土、ローム塊、焼土混在土、粘床土
 - 5 17と同じ
 - 6 ハードローム塊茶褐色土層
 - 7 粘床、硬くしまる
 - 8 ローム粒子多く含む茶褐色土
 - 9 ローム塊
 - 10 含む、ややしまる

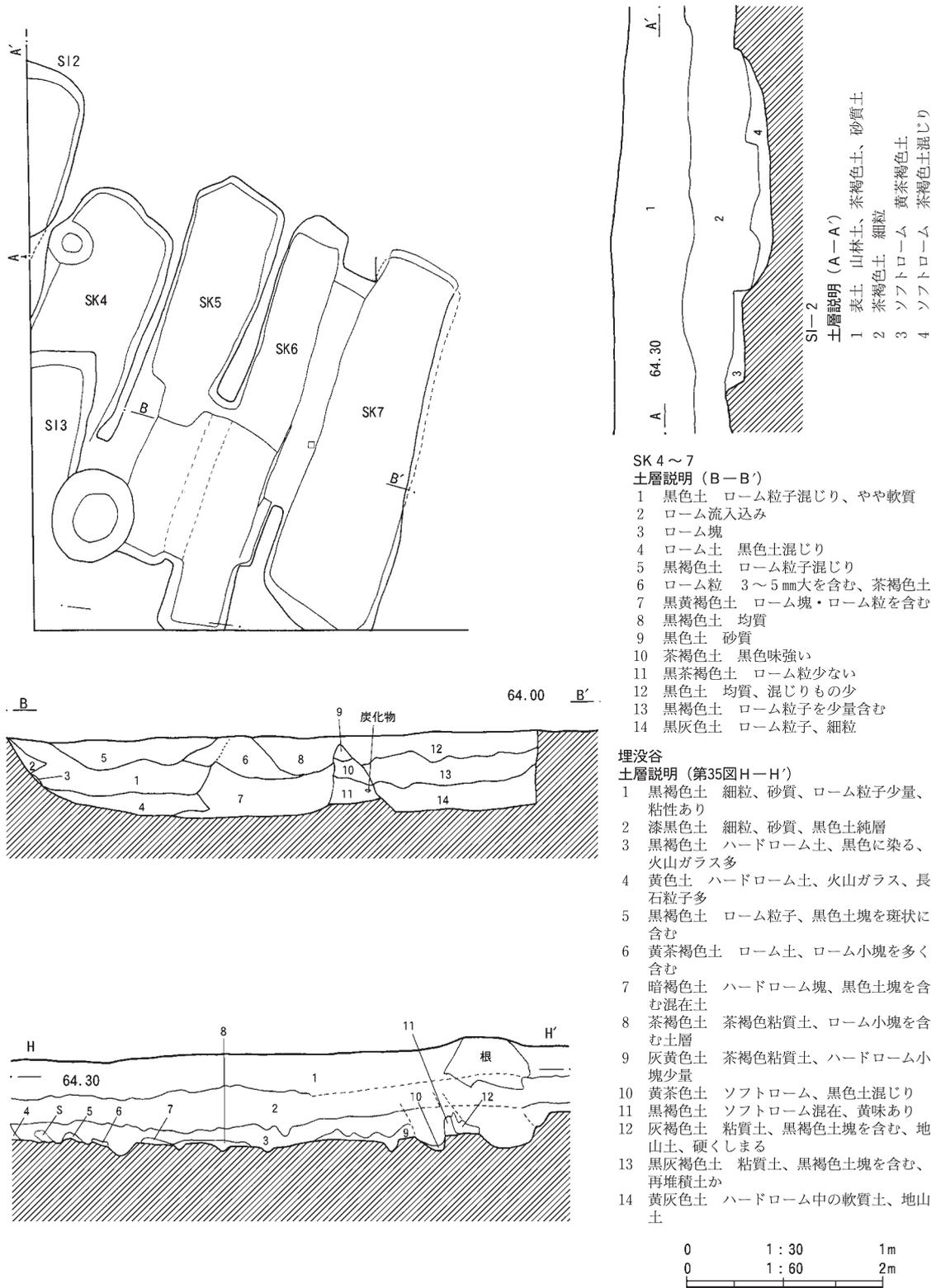
カマド

土層説明 (C C', D D', E E')

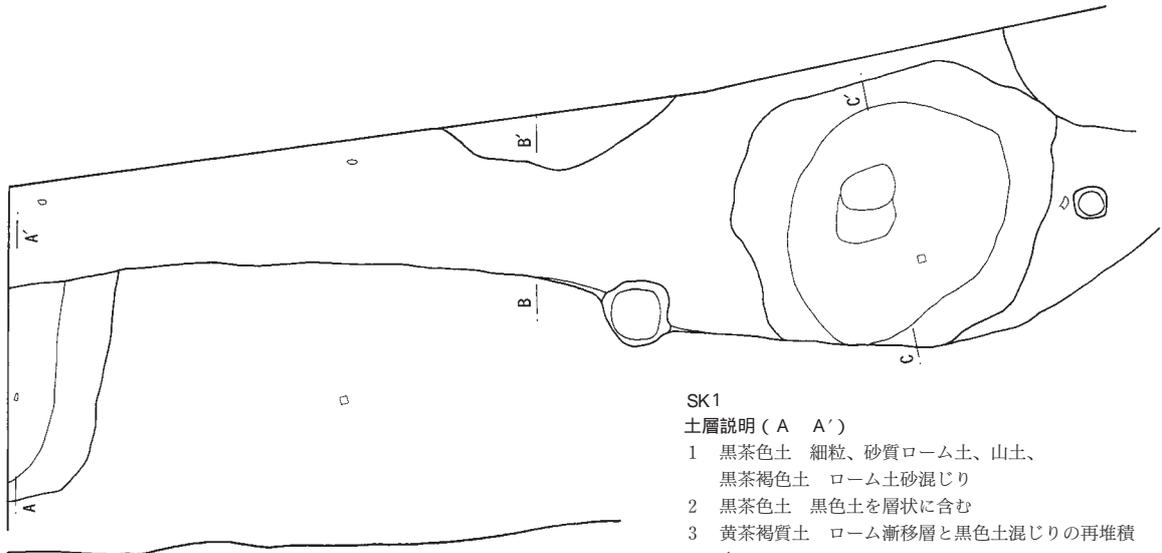
- 1 茶褐色土 ローム粒混じり、焼土多
- 2 暗茶褐色土 ローム粒子細粒、やや黄色味あり
- 3 暗灰褐色土 やや粒土質、天井、袖煙等土の流れ
- 4 灰褐色土 焼土粒子、ローム土混じり、流入土
- 5 赤茶褐色土 焼土粒子、ブロック、ローム土混在
- 6 灰白色土 粘土質、天井土か
- 7 黒茶褐色土 ローム塊、焼土ブロック、灰化物混在、カマド燃烧部
- 8 黄灰色粘質土 焼土塊、被熱、赤変層を含むカマド天井崩落土→8下面・火床
- 9 黒灰色土 砂質、炭化物、焼土粒子、カマド灰層
- 10 黄褐色土 ローム土混じり、黒茶褐色土混じり
- 11 黒色土 谷埋没土



第36図 西遺跡3次第1号住居跡(1/60)・カマド跡(1/30)



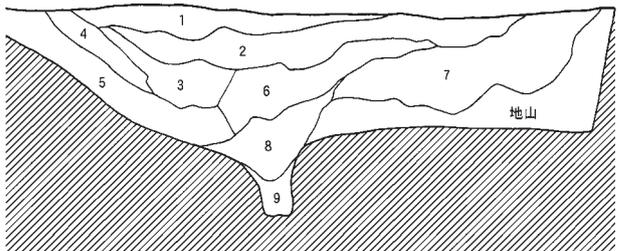
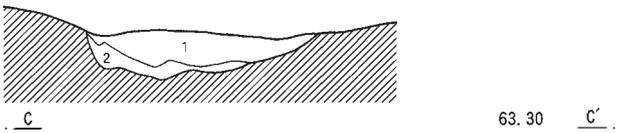
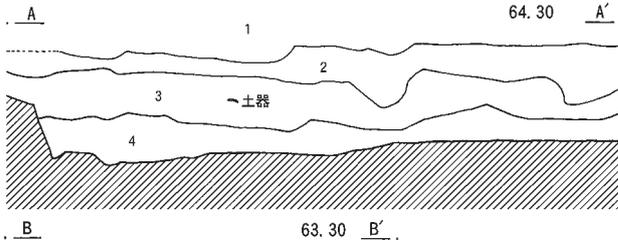
第37図 西遺跡3次第2号住居跡・土壌 (SK4～7) (1/60)・埋没谷土層 (各土層図1/30)



SK1

土層説明 (A A')

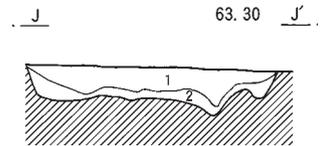
- 1 黒茶色土 細粒、砂質ローム土、山土、黒茶褐色土 ローム土砂混じり
- 2 黒茶色土 黒色土を層状に含む
- 3 黄茶褐色質土 ローム漸移層と黒色土混じりの再堆積土
・SK-1のフク土、層中に土器片あり
- 4 灰褐色土 細粒、粘質土



SD1

土層説明 (B B')

- 1 茶褐色土 細粒土、軟質均質
- 2 暗褐色土 細粒



SK1

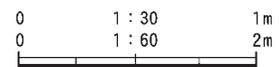
土層説明 (第3図 J J')

- 1 黒茶褐色土 ローム粒子細粒多、ローム塊少含む
- 2 黄褐色土 ローム土、黒色土混じり土

SE1

土層説明 (C-C')

- 1 黒色土 ローム粒子混じり、やや少ない
- 2 暗黄色土 ローム土、ローム塊を多く含む
- 3 ローム塊、白色粘土塊を含む混土層
- 4 灰黄色土 ローム土、白色粘土粒子直径1~10mmを含む層
- 5 暗黄褐色土 ローム土、黒色土混じり
- 6 灰黄色土 ローム土、白色粘土粒子少量、ローム塊少量
- 7 やや暗い灰黄色土 ローム小塊を斑状に含む
- 8 灰黄色土層 粘土ブロック、ハードロームブロックを混在した土層
- 9 白色粘土 黄褐色土混在土



第38図 西遺跡3次1号溝・土壌(1/60)・土層図(1/30)

第2号土壙 SK 2 (第38図) 調査区西壁に一部検出された。2層中より掘り込まれるようで、西半は調査区外、北側は1号溝に削り取られている。平面形は一部分であるため想定しがたいが、 $1.5 \times 0.8\text{m}$ の規模であった。

第3号土壙 SK 3 (第35図) 調査区の北側、1号住居跡と1号井戸跡の間に位置する。1号井戸跡に北半分を削り取られており、南側を主として約3分の2が遺存している。ほぼ円形で直径 1.5m を測る。遺物は出土していない。

第4～6号土壙 SK 1～4 (第37図 第40図) 調査区南西隅部に並列状体で確認している。掘り込み面は2層、または1層中からで、長方形を基本としている。主軸は長辺方向とし、ほぼ $N-5^{\circ}-E$ の方位を示す。4号土壙は幅 $1.0 \times$ 長さ 2.4m で掘り込みは 15cm とやや浅く、他とは異なる。5号土壙は幅 $0.9 \times$ 長さ 4.2m で掘り込みは 40cm を測る。南半分にかく乱と略方形の土壙が6号土壙部分まで切り込んでいた。6号土壙は幅 $0.6 \times$ 長さ 4.5m で掘り込みは 43cm を測る。南半分は5号土壙と同様であった。5号土壙からは甕底部(25)が出土している。6号土壙は幅が狭く長大で底面はほぼ平坦であった。5号～7号土壙の間には掘り残しの地山が残るため、両土壙を意識して幅を狭め掘削したものと推定している。7号土壙は幅 $0.8 \times$ 長さ 3.8m で掘り込みは 45cm を測る。北辺は1号竪穴住居を切り込み、南辺が幅 1m とやや広くなっている。また、西壁立ち上がりは外傾するが、東壁は垂直または内傾するなどやや掘り方が異なる。覆土は各土壙とも暫時埋め戻している状況と観察される。

出土遺物(第40図)は、5号土壙上面より渥美大甕破片(14)、甕底部(25)が出土している。また、7号土壙からは鉄釘(27、28)と2枚の渡来銭(29、41)、甕底部(30)が出土している。遺構の性格を示すものは前記のように少ないが、これらの土壙は中世期の墓墳である可能性が高いと思われる。渡来銭29は「元祐通寶」(初鑄—北宋 1086年)である。41は腐食が著しく銭種不明であった。27、28は板状をしているが、27に折返し頭部を有することから鉄釘とした。25・30の甕底部は、黄褐色を呈し、焼成が良くない。在地産と思われる。

第1号溝跡 SD 1 (第35、38図) 調査区の北側に検出された。掘り込みは1層中よりなされたと考えられる。調査前の現況でもこの部分がやや窪み、調査区外の東側に連続していること視認できる。また、現地での土地境に一致していることもあり、比較的新しい時期に設定された東西方向に伸びる土地境の溝である可能性が高い。溝跡は長さ 10m 、幅 $1.0 \sim 1.2\text{m}$ 、深さ 20cm を測る底面の平坦な溝で、 $N-82^{\circ}-E$ 方位を持っている。遺物は第40図23須恵器片などが覆土から出土している。

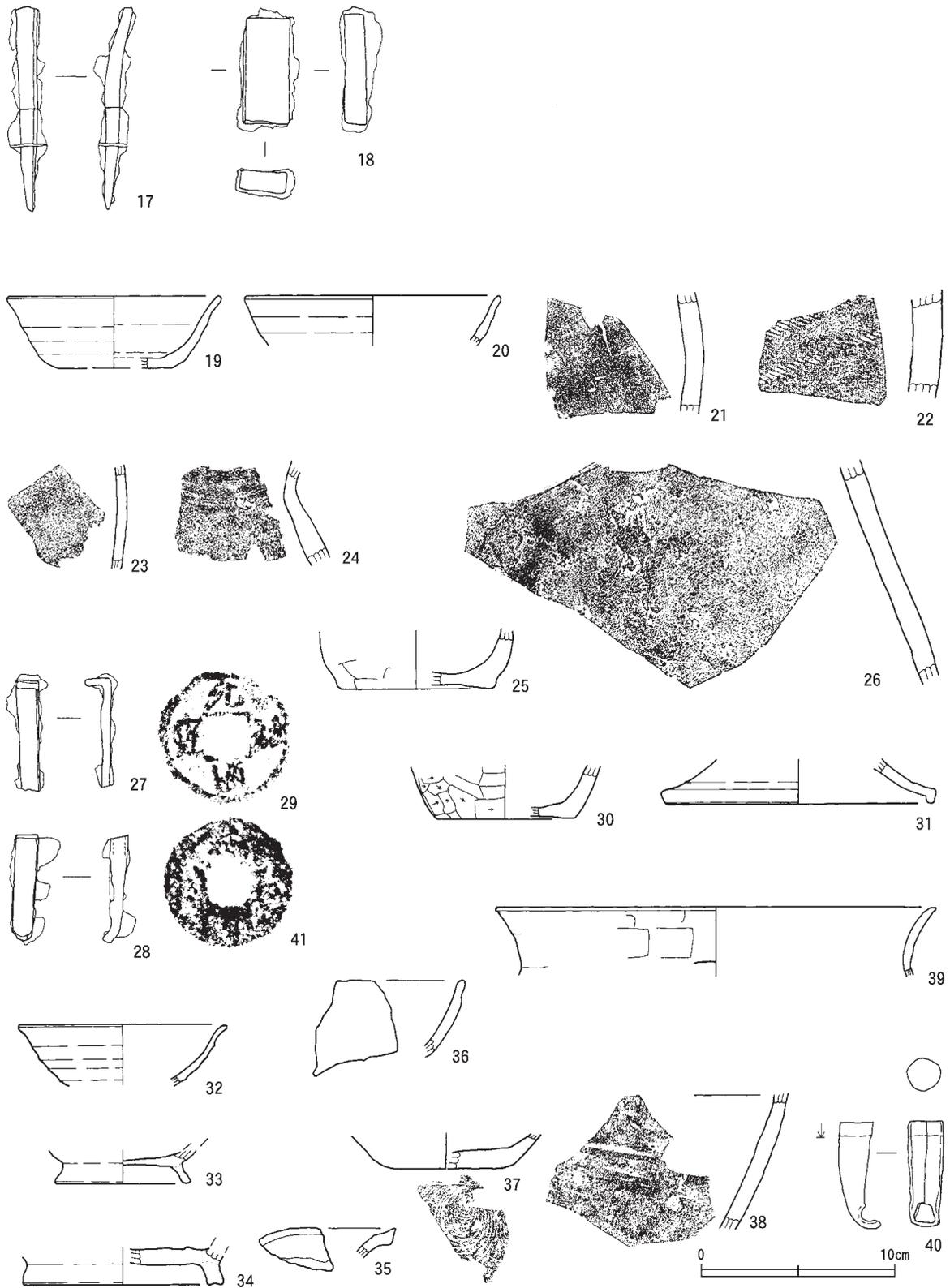
2) 出土遺物について

第1号住居跡(第39図 第13表)

1は口径 15cm を超える大型の須恵器無台碗で、体部は丸味をもつが口縁は直立し内傾する平面を持つ。薄く丁寧な作りであり、底面及び体部下にかけては回転ヘラ削りを施している。2は須恵器杯の破片、3は大型の杯で、1と同じく口縁は内傾する平面を持つが、口縁端部は外方につまみ出されている。4は器高の低い盤状の杯で底部内面から口縁部へは爪先痕跡を残さないが急に立ち上がる。5、6は底部のみであるが、1と同じく底部は回転ヘラ削りを施している。なお、5は墨書の一部が残るが「之」の最終角に近い。6は、



第39图 西遺跡3次第1号住居出土遺物(1/3)



第40图 西遺跡3次第1、3号住居・土壇・一括出土遺物(1/3)、17、18、27、28、40(1/2)、29(1/1)



第4図 西遺跡3次出土遺物(1/3)

底部外面に僅かに朱書が残り、「寺」文字と判断される。7はつまみ部分を欠失するが須恵器蓋である。これらの須恵器は、いずれも8世紀第1四半期から第2四半期ころに南比企窯跡群で生産された製品である。

8は、土師器杯で内面底部にらせん状の暗文が施文され、口縁部には放射状の暗文が施される。11、12も同形態の杯であるが暗文は施されない。9は手捏状の杯で指頭圧痕を残さないが体部の歪みが認められる。

10は無台の土師器碗で9より口径が大きく、底部が平坦となっている。13は須恵器甕の口頸部片である。15、16は土師器甕で、器壁は薄く口径・胴径がほぼ等しい。体部上半は横へラケズリ以下を縦へラケズリとする。これらの土師器は、八世紀初頭に位置づけられる。17は釘と思われる断面方形の鉄片である。18は平板状の鉄片で、製品であるのか不詳である。

包含層出土の遺物（第40・41図 第12・13表）

碎片が多く、実測可能な遺物は図示した18点で縄文時代石器、古代～近世期の遺物であった。32～39は須恵器杯、同高台部、須恵器瓶底部、土師器甕である。40は近世期のキセル吸い口部分で青銅製である。

第41図1～9は縄文時代の石器で、1は表面の一部と裏面の前面に礫皮を残し、大きな剝離調整で刃部を造る礫器である。2は裏面に礫皮を残す打斧である。3、4は小型で撥形の打斧。5は楕円形の磨き石、6は棒状の磨石で2面に砥都面とした平坦面がある。6、9、9は剥片である。縄文時代土器の出土はなかったが、礫器などの出土から縄文時代早期から中期の所産と考えられる。

第12表 西遺跡3次出土遺物観察表（第4図）

No	器種	石材	最大長	最大幅	最大厚	重量	残存率	形状	研磨	敲打	凹	備考
1	礫器	砂岩(粗粒)	(10.5)	(10.4)	(4.8)	718.3						
2	礫器	砂岩(中粒)	(10.6)	(8.7)	(3.5)	366.4						
3	打斧	砂岩(中粒)	(7.7)	(4.2)	(1.2)	45.5						
4	打斧	砂岩(細粒)	(9.2)	(4.3)	(0.9)	49.6						
5	磨石	砂岩(細粒)	9.6	(5.4)	2.6	219.8						
6	磨石	角閃石黒雲母安山岩	(7.7)	(6.6)	(2.6)	166.5						
7	磨石	砂岩(細粒)	15.7	5.3	5.2	534.6						
8	剥片	砂岩(細粒)	(6.7)	(5.2)	(2.0)	61.5						
9	剥片	チャート	(2.0)	(1.5)	(0.4)	1.9						

第 13表 西遺跡 3 次出土遺物観察表 (第 39. 40図)

No.	器 種	口径	器高	底径	胎 土	焼成	色 調	残 存 率	備 考
1	須恵器・坏	(16.4)	5.9	8.2			青灰		
2	須恵器・坏	(13.2)	(3.2)				灰		骨針状粒子多量混入
3	須恵器・坏	(16.8)	(5.1)				灰		
4	須恵器・坏	(13.4)	3.6	(8.6)					底部回転へラ調整 骨針状粒子多量混入 5と同一個体か?
5	須恵器・坏		(1.1)	7.4			明褐		骨針状粒子多量混入 底部外面墨書あり
6	須恵器・坏		(1.2)	6.6			灰		底部調整 回転系切り 底部周辺回転へラ削り
7	須恵器・蓋	(16.2)	(2.7)	—			灰		骨針状粒子少量混入
8	土師器・坏	(14.2)	3.6	(8.8)			明褐		
9	須恵器・坏	(11.4)	3.5	5.2			灰白/灰		
10	土師器・坏	(14.0)	4.8	(9.0)			褐灰		
11	土師器・坏	(13.0)	(3.0)	—			橙		
12	土師器・坏	(13.8)	(2.6)	—			にぶい赤褐		
13	須恵器・壺	(24.4)	(10.3)	—			灰		
14	須恵器・甕						暗灰黄		
15	土師器・甕	20.8	—	—			明赤褐		
16	土師器・甕	(23.1)	(17.6)	—			にぶい黄橙		
17	鉄鏃	重さ3.8g							
18	鍛造鉄片	最大長3.6、最大幅1.5、最大厚0.7、重さ30.2g、製品：不明						略長方形	
19	須恵器・坏	(11.0)	(3.75)	(5.8)			灰		骨針状粒子多量混入 底部回転系切り調整
20	須恵器・坏	(13.2)	(2.6)	—			灰		骨針状粒子少量混入
21	須恵器・甕						灰黄		
22	須恵器・甕						褐灰		
23	須恵器・甕						オリーブ黒		
24	常滑・甕						灰褐		
25	中世在地・甕	—	(3.0)	(8.1)			内：にぶい褐 外：明赤褐		
26	須恵器・甕						暗灰黄		
27	鉄釘	重さ3.8g							
28	鉄釘	重さ5.3g							
29	元祐通宝								(北宋)1086年
30	中世在地・甕	—	(2.8)	(7.3)			内：橙 外：にぶい黄橙		
31	須恵器・蓋	(14.1)	(2.3)	—			内：灰褐 外：にぶい褐、灰褐		
32	須恵器・坏	(10.8)	(3.2)	—			内：灰オリーブ 外：灰		骨針状粒子多量混入
33	須恵器・高台椀	—	(1.7)	(7.0)			灰		
34	須恵器・高台椀	—	(1.9)	(10.4)			灰		
35	須恵器・長頸瓶						灰		
36	須恵器・坏						灰		
37	須恵器・坏	—	(1.8)	(6.0)			灰		
38	須恵器・甕						灰白		
39	土師器・甕	(32.8)	(3.6)	—			橙		
40	キセル吸口	最大厚0.8mm、直径0.8~0.9mm、重さ4.5g							

いっぽんぎまえ
一本木前遺跡6次



VI 一本木前遺跡6次の調査

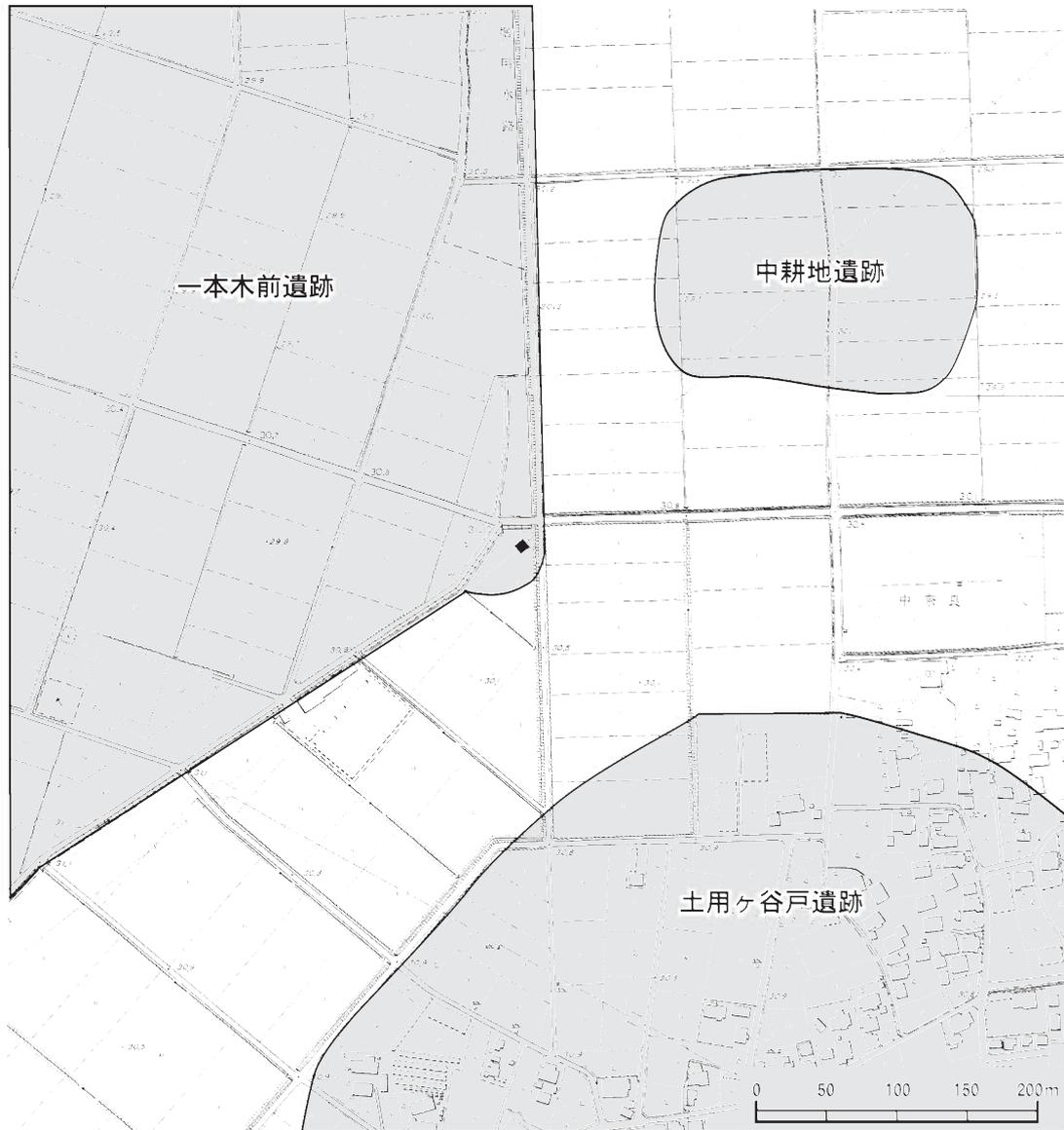
1 一本木前遺跡の立地と環境

歴史・地理的環境 一本木前遺跡の所在する東別府～上奈良地区は新荒川扇状地上に立地し、標高約30mの低平な土地となっている。現況では水田と、僅かな微高地に集落が集中する田園地帯である。土地改良により旧地表は失われているが、昭和20年代の航空写真では乱流する旧河道・条里区画の痕跡や残存水田などが観察される。現在は西から南側に位置する櫛引台地との間に国道17号線バイパスが走っている。

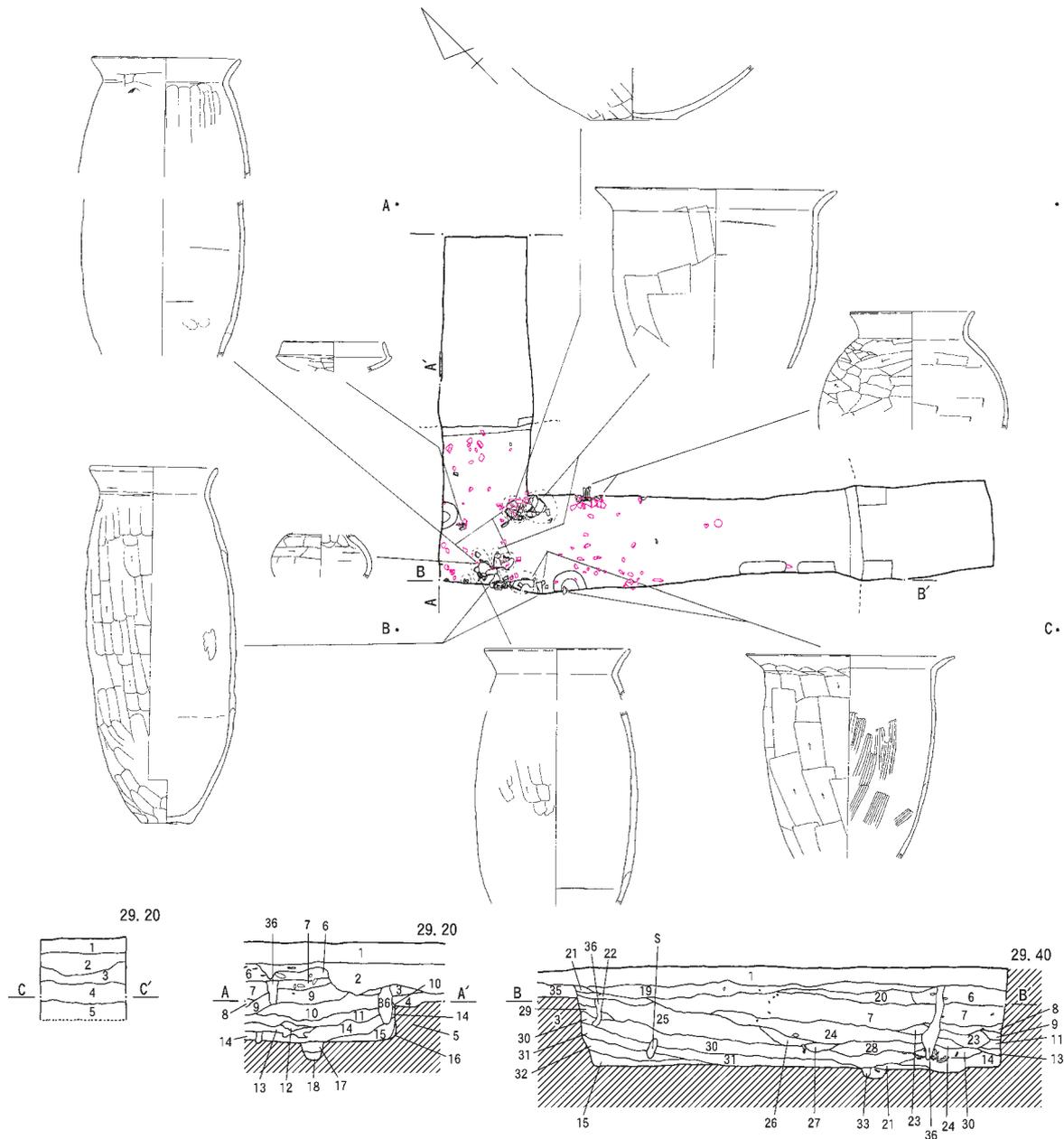
一本木前遺跡はこの広大な水田地帯に眠る別府条里遺跡の東辺に位置する集落遺跡である。古くから条里遺跡と考えられていたことから、周辺には古代集落が埋没していると想定されていた。現在までの農業関連開発などで、天神下遺跡、土用ヶ谷戸遺跡、中耕地遺跡などが発掘調査され、古墳時代以降奈良・平安時代の複合集落であると考えられた。実際、遺跡を埋める土壌は砂、シルト、粘土が幾重にも入り組む堆積層で3mにも達している。このような深部に所在する遺跡のあり方は当地では普遍的であり、なかなか遺跡所在の確認は難しく、地形観察とともに古航空写真や試掘調査が欠かせない。

この遺跡の内容が直接知られることとなったのは、平成10年から新奈良川第3調整池の設置に伴い61,280㎡の対象地を発掘調査したことによるものであり、A～Fに区分した工区に合わせ、5次・5か年を熊谷市教育委員会が実施した。第1次（平成10年度 A区）、第2次（平成11年度 A・B・D・E区）、第3次（平成12年度 B・E・F区）、第4次（平成13年度 B・C・F区）、第5次（平成14年度A・B・C区）にわたる発掘調査の成果は『一本木前遺跡Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ』（註1）の報告書に盛られているが、とくに古墳時代から古代にかかる複合集落の調査成果と大量の遺物には圧倒される。歴史的環境は前記の報告書に詳しく、本報告でも既報文に譲るが、発見遺構の数量について参考のため以下に掲げる。発見遺構の主体は竪穴式住居跡で古墳時代—430軒、奈良・平安時代—82軒、他に埋葬主体部の検出された方形周溝墓4基と古墳時代祭祀遺構と推定される遺物集中跡6箇所などが注目される。他に、縄文時代・弥生時代の遺物包含層も確認され、遺跡範囲と質の拡大が想定されている。当該時期の根絡遺跡（註2）、天神下遺跡（註3）、砂田遺跡（註4）、柳町遺跡（註5）、上敷免北遺跡（註6）、上敷免遺跡（註7）、新屋敷東・本郷前東遺跡（註8）、宮ヶ谷戸遺跡（註9）、原遺跡（註10）、城北遺跡（註11）、居立遺跡（註12）、前遺跡（註13）、戸森前遺跡（註14）、城西遺跡（註15）、八日市前遺跡（註16）、東川端遺跡（註17）、清水上遺跡（註18）、飯塚南遺跡（註19）、道ヶ谷戸遺跡（註20）などの集落がいずれも国道17号バイパス等の建設により発掘調査されているが、扇状地上での古墳～古代集落の遺跡数・集落規模の拡大傾向が著しい。これらの諸遺跡を遠望する位置（櫛引台地縁部に位置）にある幡羅郡衙遺跡や西別府祭祀遺跡あり方は、古代地域社会と地方支配を象徴しているようだ。これらの遺跡を結ぶ福川の上流では、榛澤郡衙跡と想定される中宿遺跡（註21）と滝下遺跡（註22）では運河の想定がなされて、同様な地形環境にある幡羅遺跡でも、集落間または郡衙間での通行や交流を想定可能である。また、一本木前遺跡において顕著に見られる、「河川の入り江脇祭祀」は七世紀～八世紀まで見られ、祭祀遺物の中に石製品や馬骨・船形木製品などを交えている。これらの水辺の祭祀は、先掲の遺跡やさらに東部地域の遺跡でも発見が知られており、低地の村々に特徴的に行われている。古墳時代後期以降律令期まで継続されたこれらの祭祀行為の理解は、研究の著についたばかりである。祭祀に献ぜられた馬とその飼育のあり方など考えるべき視点が多く想定されている。

今次の発掘調査は、一本木前遺跡の最東部に当たる場所となり、現況水路を越えて東側に遺跡が拡大していることが明らかとなった（第42図）。同遺跡としては通算して第6次調査となったものである。



第42図 一本木前遺跡発掘調査位置図 (1 /5000) ■調査地点



- S11
土層説明 (A, A', B, B')
- 1 細作土
 - 2 灰白色シルト10Y-7/1 (火山灰<白色>粒少量 Fe₂O₃少量 小石少量含む 土器混入) = 撥乱層 (家屋建築時の混乱か?)
 - 3 灰黄褐色粘質土10YR-4/2 (FeO₂多量 炭化物粒 焼土粒若干 土器片若干含む) = 遺物包含層?
 - 4 灰白色シルト5Y-7/2 (FeO₂多量 焼土粒 炭化物粒若干 土器片若干含む)
 - 5 灰黄褐色シルト10YR-5/2 (FeO₂多量 灰白色シルト5Y-7/1ブロック粒若干含む) 1~5、35層は地山土
 - 6 灰色粘質土N-7/ (若干シルト質 Fe₂O₃多量に含み褐灰色10YR-4/1呈す 礫及び土器片含む 炭化物粒若干含む) + 撥乱層
 - 7 黒褐色粘質土10YR-3/2 (若干シルト質 灰色粘質土N-6/ブロック粒多量に含む 礫及び土器片含む 焼土粒・炭化物粒若干含む)
 - 8 灰オリーブ粘質土5Y-6/2 (若干シルト質 焼土粒若干含む 第7層土粒子混入)
 - 9 褐灰色粘質土10YR-4/1 (灰オリーブ粘質土5Y-6/2ブロック粒多量に含む 焼土粒・炭化物粒少量 土器片含む)
 - 10 灰オリーブ粘質土5Y-6/2 (若干シルト質 褐灰色粘質土10YR-4/1ブロック少量含む 炭化物粒若干 焼土塊若干含む)
 - 11 褐灰色粘質土10YR-5/1 (シルト質 灰白色シルト (灰?) ブロック少量 焼土粒・焼土塊多量 灰オリーブ粘質土5Y-6/2ブロックわず 褐灰色粘質土10YR-4/1ブロック多量に含む)
 - 12 10層にほぼ同じ
 - 13 黄灰色粘質土2.5Y-5/1 (若干シルト質 黄灰色土2.5Y-4/1ブロック若干 炭化物粒子わず 焼土塊若干含む)
 - 14 灰黄色シルト質粘質土2.5Y-6/2 (FeO₂多量 褐灰色粘質土10YR-4/1ブロック若干 焼土粒・炭化物粒わず含む) <シルト質感やや強い>
 - 15 暗灰黄色シルト2.5Y-5/2 (FeO₂多量 灰色粘質土N-7/粒子わずかに含む)
 - 16 褐灰色粘質土10YR-5/1
 - 17 褐灰色シルト7.5YR-4/1
 - 18 褐灰色シルト10YR-4/1 (若干粘性もつ 灰色粘質土N-7/粒子わずかに含む 焼土塊わずかに含む)
 - 19 黒褐色粘質土7.5YR-3/1 (灰色土N-6/粒子多量 火山灰<白色>粒少量 焼土粒少量 土器片含む) + 撥乱層?
 - 20 灰色粘質土N-6/ (FeO₂多量に含み黒褐色7.5YR-3/2呈す 炭化物粒若干 土器片含む) + 撥乱層?
 - 21 20層にほぼ同じ
 - 22 20層にほぼ同じ (若干シルト質 黒褐色粘質土7.5YR-3/1ブロック多量 火山灰<白色>粒若干 土器片含む)
 - 23 10層に同じ
 - 24 黒褐色粘質土2.5Y-3/2 (灰オリーブ粘質土5Y-6/2ブロック粒若干 灰色粘質土N-6/粒子少量 炭化物粒わず 焼土粒わず 土器片含む)
 - 25 灰黄色粘質土2.5Y-6/3 (褐灰色粘質土10YR-4/1ブロック少量 灰白色シルトN-7/粒子少量 FeO₂少量含む)
 - 26 黒褐色粘質土10YR-3/2 (にふい黄色シルト質2.5Y-6/3ブロック・粒子少量含む)
 - 27 褐灰色シルト質粘質土10YR-4/1 (にふい黄色シルト質2.5Y-6/3ブロックわずかに含む)
 - 28 26層にほぼ同じ (焼土粒・焼土塊若干 炭化物粒わず含む) <シルト質>
 - 29 灰黄褐色粘質土10YR-5/2 (にふい黄色粘質土2.5Y-6/3粒子少量含む)
 - 30 灰黄色粘質土2.5Y-6/2 (シルト質 褐灰色粘質土10YR-4/1粒子少量 灰白色シルトN-7/粒子少量 FeO₂多量 焼土粒わず 土器片含む)
 - 31 灰白色シルト質N-7/ (若干粘性もつ FeO₂多量 褐灰色粘質土10YR-4/1ブロックわずかに含む)
 - 32 灰白色粘質土5Y-7/2 (FeO₂多量に含み灰褐色7.5YR-4/2呈す 灰白色シルトN-7/粒子少量含む)
 - 33 褐灰色粘質土10YR-4/1 (若干シルト質 褐灰色粘質土10YR-4/1粒子わず 灰白色シルトN-7/粒子若干含む)
 - 34 褐灰色シルト質土7.5YR-4/1 (灰白色シルトN-7/粒子多量に含む 土器片含む)
 - 35 灰白色粘質土5Y-7/2 (FeO₂少量 灰白色粘質土N-7/粒子若干含む)

第44図 一本木前遺跡6次第1号住居跡(1/60)

- 註 1 a 熊谷市教育委員会 2000 「一本木前遺跡」 平成11年度熊谷市埋蔵文化財調査報告書
 b 熊谷市教育委員会 2001 「一本木前遺跡 II」 平成12年度熊谷市埋蔵文化財調査報告書
 c 熊谷市教育委員会 2002 「一本木前遺跡 III」 平成13年度熊谷市埋蔵文化財調査報告書
 d 熊谷市教育委員会 2003 「一本木前遺跡 IV」 平成14年度熊谷市埋蔵文化財調査報告書
 e 熊谷市教育委員会 2004 「一本木前遺跡 V」 平成15年度熊谷市埋蔵文化財調査報告書
- 註 2 (財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1995「根絡・横間栗・関下遺跡」 同事業団報告書 第153集
- 註 3 熊谷市教育委員会 1984 「天神下・土用ヶ谷戸遺跡」 昭和58年度熊谷市埋蔵文化財調査報告書
 熊谷市教育委員会 1988 「天神前遺跡」 昭和63年度熊谷市埋蔵文化財調査報告書
- 註 4 深谷市教育委員会 1995「砂田遺跡」 深谷市埋蔵文化財調査報告書 第41集
 深谷市教育委員会 1996 深谷市内遺跡」 深谷市埋蔵文化財調査報告書 第150集
- 註 5 (財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1993「ウツギ内・砂田・柳町遺跡」 同事業団報告書 第126集
- 註 6 (財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団 2000「上敷面北遺跡」 同事業団報告書 第248集
- 註 7 (財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1993「上敷面遺跡」 同事業団報告書 第128集
- 註 8 (財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1992「新屋敷東・本郷前東遺跡」 同事業団報告書 第111集
- 註 9 深谷市教育委員会 2006～2009「幡羅遺跡 I～IV」 深谷市埋蔵文化財調査報告書 第75、88、99、104集
- 註10 (財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1995「城北遺跡」 同事業団報告書 第150集
- 註12 (財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1995「居立・前遺跡」 同事業団報告書 第151集
- 註13 (財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1995「居立・前遺跡」 同事業団報告書 第151集
- 註14 (財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1999「戸森前遺跡」 同事業団報告書 第217集
- 註15 (財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1995「宮ヶ谷・根岸・八日市・城西遺跡」 同事業団報告書 第172集
 (財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団 2000「堀東・城西II遺跡」 同事業団報告書 第257集
 深谷市教育委員会 2005 「城西遺跡」 深谷市埋蔵文化財調査報告書 第74集
- 註16 (財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1995「宮ヶ谷・根岸・八日市・城西遺跡」 同事業団報告書 第172集
- 註17 (財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1990「東川端遺跡」 同事業団報告書 第94集
 深谷市教育委員会 1991 「東川端遺跡」 深谷市埋蔵文化財調査報告書 第33集
- 註18 (財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1994「清水上遺跡」 同事業団報告書 第152集
- 註19 (財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団 2005「飯塚古墳群 I」 同事業団報告書 第317集
 (財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1994「清水上遺跡」 同事業団報告書 第152集
- 註20 妻沼町教育委員会 1983 「飯塚南・道ヶ谷戸遺跡」 妻沼町教育委員会埋蔵文化財調査報告書 第1集
- 註21 岡部町教育委員会 1995～1999「中宿遺跡 I・II・III」 岡部町埋蔵文化財調査報告書 第1、5、4集
- 註22 岡部町教育委員会 1997「滝下遺跡」 岡部町埋蔵文化財調査報告書 第2集
 (財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1993「原ヶ谷戸・滝下遺跡」 同事業団報告書 第127集

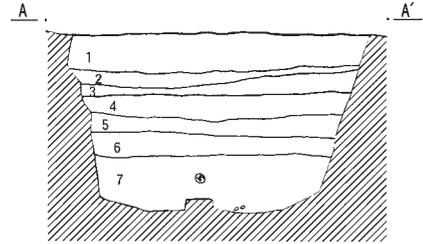
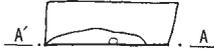
2 検出された遺構と遺物

1) 遺構について

調査地点の概要 (第42、43図) 既存鉄塔部分は当時未調査であったが、今回の調査範囲は現鉄塔敷地の外周を約1.2m拡張する口の字形部分である。北東部分に馬歯を伴う土壌、南西部分に竪穴住居跡が見つかり、住居跡位置では耕作土下15cmほどで遺構が現れたが、土地改良時に微高地状の畑地であったものを削平して水田としたものようだ。5次調査地点に近接するA・D区では古墳時代後期の住居が多数見つかっており、基準土層ではⅧ～Ⅺ層を古墳時代包含層とし、旧地形から約2.0m下位としている。

第1号住居跡 SI 1 (第4図) 住居遺構と思われる北辺・東辺の壁掘り込みが確認された。古墳時代後期の方形を呈する一軒の竪穴住居跡で、住居北東部に当たっていると推定される。60cmの掘り込みが残り、床面は平坦で直床であった。覆土は大略10層確認され、覆土中下層～住居床面に完存土器が出土した。住居の規模は検出状況から、最大北辺で4.1、東辺で1.6を測る。カマド位置は不明だが、該期の本遺跡では東カマドが北カマドを上回るようで、本住居跡も北壁・東壁のあり方から、住居主軸はN 134 Eの傾きを示すと思われる。

遺物は覆土中(赤色表示)・下層と床面(黒色表示)に見られ、土師器杯、甕、鉄滓などが出土している。遺物の時期は既報告の一本木前遺跡の遺構時期変遷によると古墳時代後期の土器群を 期～ 期に区分しているが 註1 a) 本住居の時期は判出土器 1. 6. 17. 18. 23. 22などから 期に相当する。また、覆土



SK1

土層説明 (A A')

- 1 耕作土
- 2 灰色 (5Y6/1) シルト質 粘性あり しまりあり FeO₂微量含む 酸化マンガン多く含む
- 3 浅黄色 (2.5Y7/3) シルト質 粘性あり FeO₂微量含む
- 4 灰黄色 (2.5Y6/2) シルト質 粘性あり しまりあり FeO₂微量含む 層位下部にFeO₂多い
- 5 黄灰色 (2.5Y4/1) シルト質 粘性あり しまりあり FeO₂微量含む 酸化マンガン含む



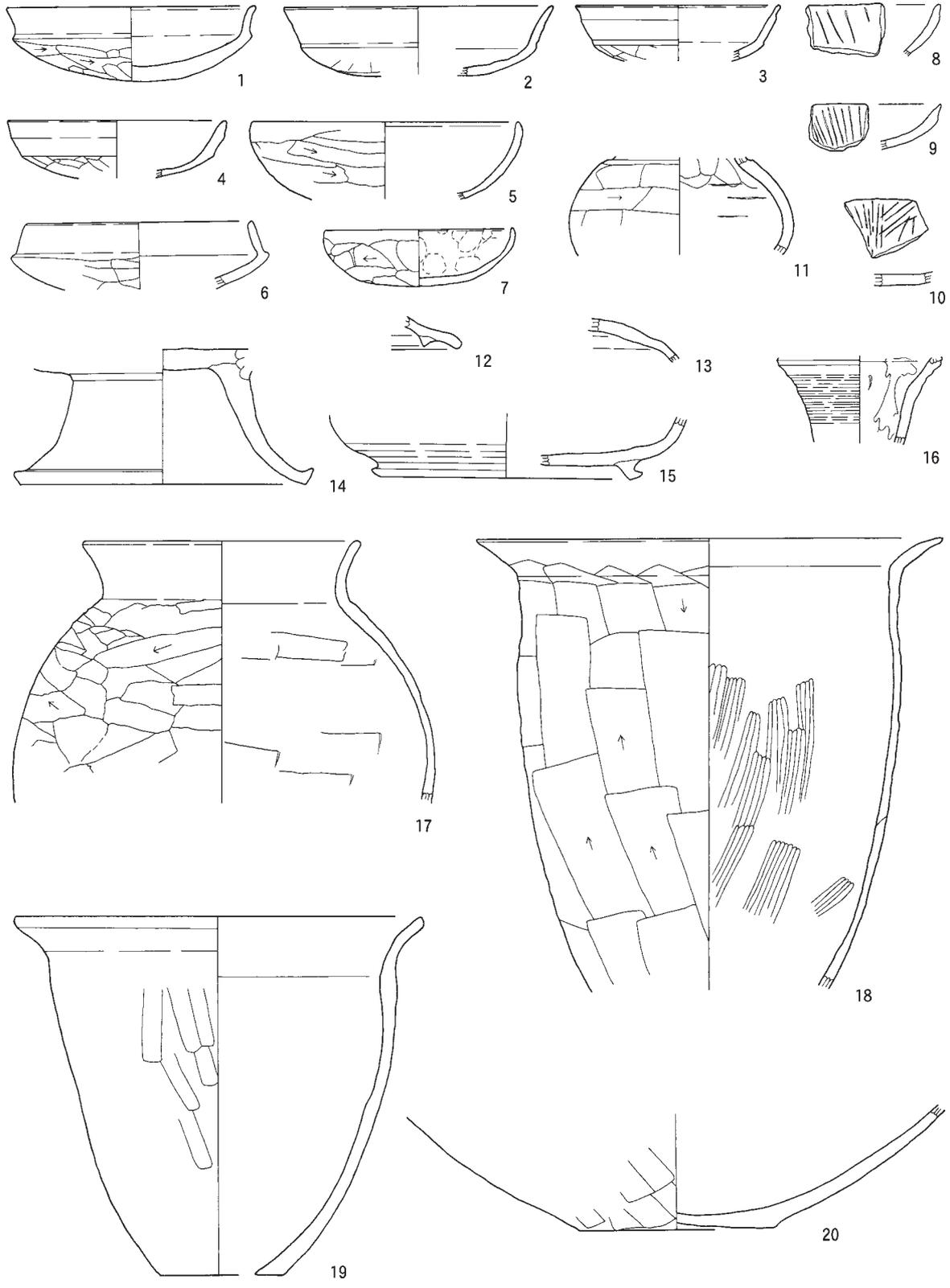
第45図 一本木前遺跡6次第1号土壌 (1/60)

には5・7・8・9・10・14・19・2などの期の遺物も含んでいる。

第1号土壌 SK 1 (第45図) 調査区北東隅部に検出された。表土下1.5m部分に、馬歯と思われる歯槽部小塊が出土した(写真図版21)が、土壌とするには皿状で明確な掘り込みがない。本遺跡で数多く見つっている河川跡に廃棄されたものではないかと推定される。なお、他に遺物は伴っておらず、本遺跡で数箇所確認されている馬骨を伴う祭祀遺構とは異なるようだ。

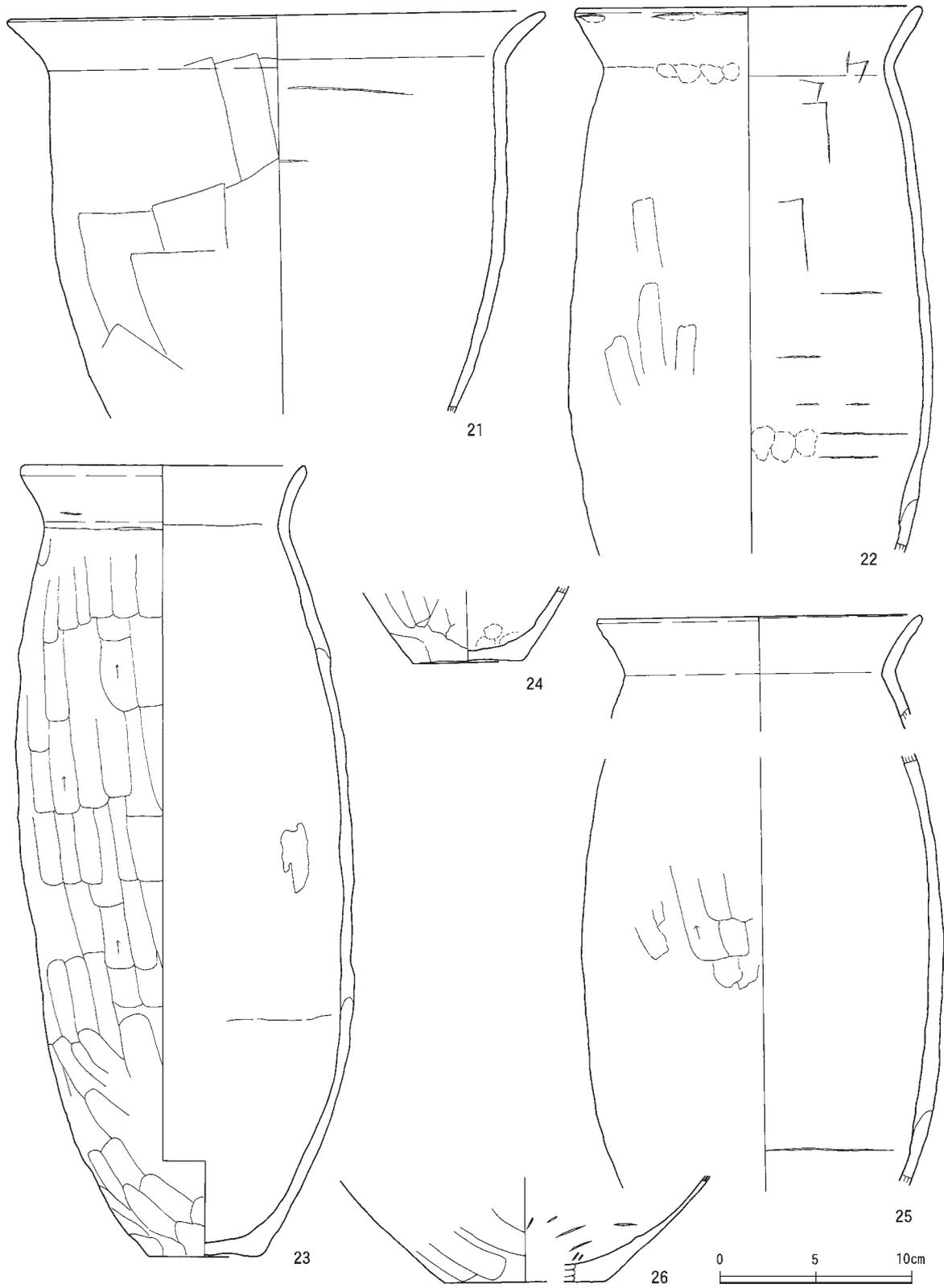
出土遺物(第46, 47, 48図 第14表) 1~4は浅い体部から稜線を持って口縁が外反する土師器杯、1以外は稜線が弱い。6は前記の杯に伴う杯身部で、口縁は直線的に内傾斜する。11は土師器小型壺の体部下半で、丸底になるものである。17は大型の土師器壺の上半部である。20は土師器壺の下半部となるものである。18は底部を欠失するが土師器甗で、口縁部が水平近くまで外反する。22, 23, 24, 25, 27, 28は土師器長甕で23はほぼ完存、口縁はあまり外反せず上方に伸ばされ、体部は最大径を中位に持つ。器壁はやや厚めで、体部下半に炭化物が付着する。他の長甕もほぼ同形態の姿をしている。以上の土師器は一本木前遺跡の時期区分ではV期, VI期に該当する遺物群で、1号住居の主体をなす時期の遺物である。7世紀中ごろに置かれる。

5, 6は丸底の土師器杯で体部から丸みのまま口縁部に至り僅かに口縁端部を尖らせる。5は大型、7は小型である。2, 9, 10は浅い杯で内面に放射線状の暗文を施文する。12, 13は須恵器蓋で12はかえりを持つ。14は須恵器高盤の脚。15は大型の須恵器高台付碗で、底部体部下半を回転ヘラ削り調整した後に高台を貼り付けている。14は須恵器平瓶の口頸部であろう。29~31は須恵器甕の破片である。以上の土師器・須恵器は一本木前遺跡の時期区分VIII・IX期に当たるもので7世末から8世紀初頭に位置する遺物群である。これ



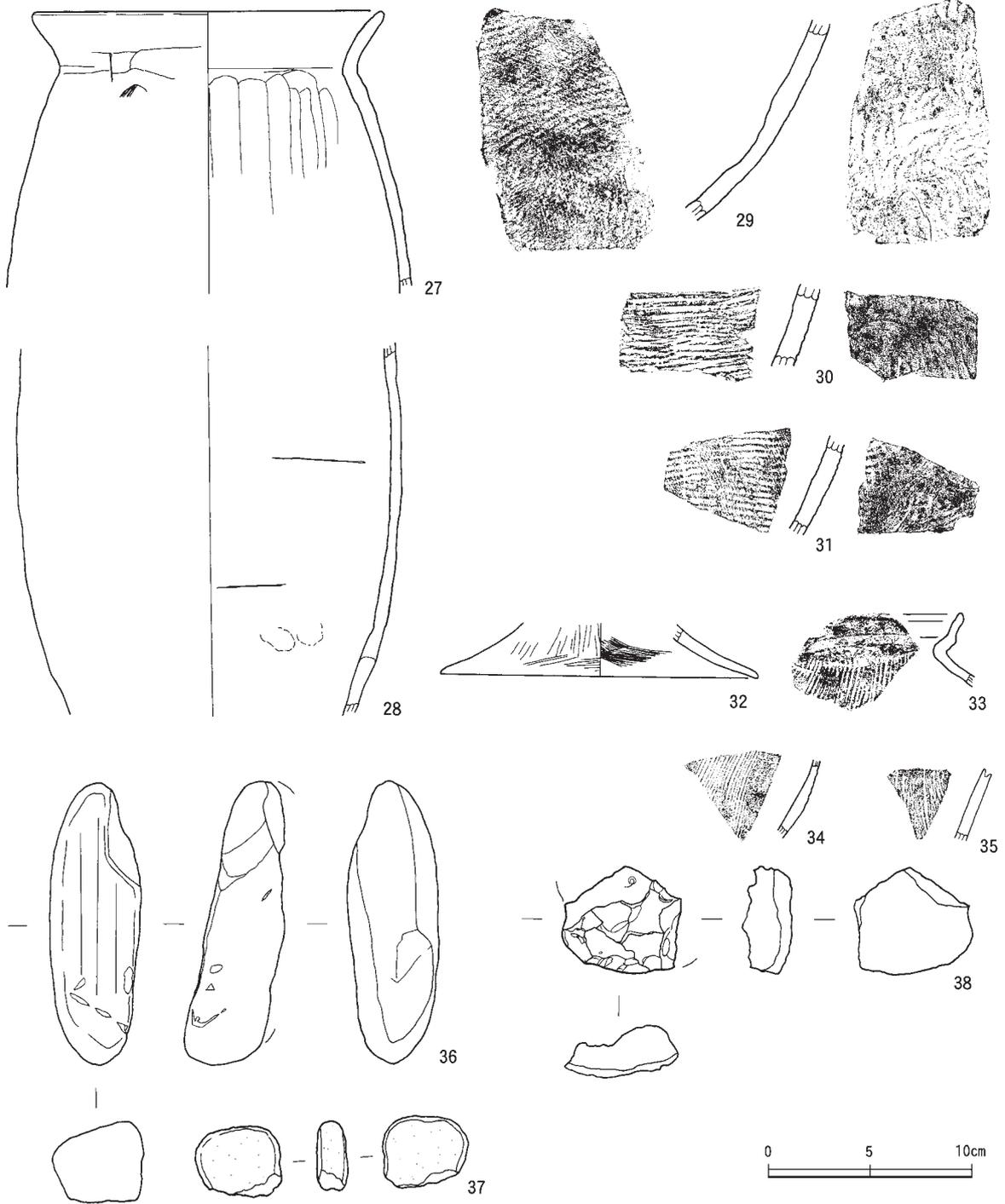
第46図 一本木前遺跡 6 次出土遺物 1 (1/3)

0 5 10cm



第4図 一本木前遺跡6次出土遺物2(1/3)

一本木前遺跡 6 次



第 48 図 一本木前遺跡 6 次出土遺物 3 (1 / 3)

らの遺物群は1号住居の廃絶後、埋没するまでに周囲から廃棄されたものであろう。土器以外の遺物では36、37の石器は砥石として使用が認められる。38は碗形の形態を残す鉄滓-33.5g-である。

なお、調査区では遺構の確認されなかった時期の遺物として、古墳時代前期五領式期の土器32～35がある。32は器台裾部、33～35はS字状口縁台付甕の口縁部と体部破片で粗い櫛目調整痕が残る。

第14表 一本木前遺跡6次出土遺物観察表(第46、47、48図)

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考			
1	土師器・坏	12.9	3.9	—			にぶい黄橙					
2	土師器・坏	(14.0)	(3.6)	—			浅黄橙					
3	土師器・坏	(10.7)	(2.9)	—			橙					
4	土師器・坏	(11.4)	(3.0)	—			橙					
5	土師器・坏	(14.1)	(4.1)	—			橙					
6	土師器・坏身						橙					
7	土師器・坏	10.0	3.0	—			赤橙					
8	土師器・坏						橙					
9	土師器・坏						橙					
10	土師器・坏						橙					
11	土師器・埴						にぶい黄橙	破片				
12	須恵器・蓋	—	—	—			黄灰		8c第1 金山産			
13	須恵器・蓋	—	—	—			青灰色 断面：紫灰色		ツマミ剥離			
14	須恵器・高盤	—	(7.05)	(15.5)			灰白	台脚部	金山産？ 布ナデ			
15	須恵器・高台鉢	—	(3.3)	(14.2)			灰		金山産？			
16	須恵器・平瓶	—	(4.6)	—			緑黒	口頸部	7c、1			
17	土師器・甕	14.5	(13.7)	—			橙					
18	土師器・甕か	(24.4)	(23.6)	—			橙					
19	土師器・甕	(21.25)	18.7	6.5			橙					
20	土師器・甕	—	(6.15)	(10.2)			橙	底部片				
21	土師器・甕	(28.0)	(20.7)	—			明赤褐					
22	土師器・長甕	(18.0)	(28.5)	—			灰褐					
23	土師器・長甕	(15.0)	41.35	6.0			にぶい橙		炭化物付着			
24	土師器・甕	—	(3.8)	(5.8)			灰褐	底部				
25	土師器・長甕	—	(22.4)	—			浅黄橙					
26	土師器・甕	—	(5.5)	(8.5)			橙	底部片				
27	土師器・甕	(17.3)	(13.9)	—			にぶい赤褐					
28	土師器・甕	—	(18.3)	—			褐灰					
29	須恵器・甕							破片				
30												
31												
32	土師器・器台片	—	(2.6)	(15.7)			橙					
33	土師器・S字口縁甕						浅黄橙					
34	土師器・S字口縁甕						褐灰	破片				
35	土師器・S字口縁甕						褐灰	破片				
No.	器種	石材	最大長	最大幅	最大厚	重量	残存率	形状	研磨	敲打	凹	備考
36	砥石	砂岩	14.0	4.5	4.0	328.8						
37	磨石	石英閃緑岩	(3.4)	4.2	1.9	34.6						折れ割れか
38	鉄滓・塊型		(5.3)	(5.6)	(2.4)	33.5						発泡

VII 自然科学分析報告

1 寺内遺跡の自然科学分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

熊谷市（旧江南町）大字坂井地内に所在する寺内遺跡は、荒川右岸の江南台地に位置する。江南台地は地形面区分では、武蔵野 I 面に対比される（堀口，1986）。本遺跡は、8 世紀前半から 10 世紀後半まで存続したとされる寺内廃寺跡の寺地内にある。今回の発掘調査では、調査区南西隅より同廃寺跡に伴うとみられる造成土や溝跡、さらに、溝跡を埋積する堆積層が確認されている。

本報告では、上記した堆積物中におけるテフラの検討および古環境復元を目的として自然科学分析調査を実施する。

I . テフラ分析

1. 試料

試料は、調査区南西隅付近より検出された溝を埋積する堆積物上部より採取された軽石とみられる砂粒が確認される土壌（西南溝覆土火山灰サンプル）と、溝形成以前に形成された造成土より採取された黒色を呈する泥質土（寺内溝）の 2 点である。発掘調査所見によれば、前者は 3 b 層上面にレンズ状あるいは層状に堆積する状況が確認されており、後者は埋没谷の埋土（造成土）間に堆積する黒 1 層に相当し、木片や小径木、微細な炭化物が多量混じる。

2. 分析方法

試料約 20 g を蒸発皿に取り、水を加え泥水にした状態で超音波洗浄装置により粒子を分散し、上澄みを流し去る。この操作を繰り返すことにより得られた砂分を乾燥させた後、実体顕微鏡下にて観察する。観察は、テフラの本質物質であるスコリア・火山ガラス・軽石を対象とし、その特徴や含有量の多少を定性的に調べる。

火山ガラスは、その形態によりバブル型・中間型・軽石型の 3 タイプに分類する。各型の形態は、バブル型は薄手平板状、中間型は表面に気泡の少ない厚手平板状あるいは破砕片状などの塊状ガラスであり、軽石型は小気泡を非常に多く持った塊状および気泡の長く伸びた繊維束状のものとする。また、テフラ分析の際に検出された火山ガラスについて屈折率測定を行う。測定は、古澤（1995）に示された温度変化型屈折率測定装置を用いて行う。テフラ分析で得られた砂分の観察および屈折率の測定結果からテフラの同定を行う。

3. 結果および考察

西南溝覆土火山灰サンプルからは、多量の軽石と極めて微量のスコリアが確認された。軽石は、最大径約 2.5mm、粒径の淘汰度は比較的良好であり径 1 mm 前後のものが多量。灰褐色を呈し、発泡はやや不良～やや良好である。斜方輝石の斑晶を包有する軽石も比較的多く認められた。スコリアは、径約 0.7mm、黒褐色を呈し、発泡はやや不良である。軽石およびスコリア以外の砂粒は、斜長石および斜方輝石の遊離結晶と灰黒色を呈する角礫状の安山岩片により構成されている。軽石中の火山ガラスの屈折率は、平均値、最頻値（モード）共に 1.530 である（表 1，図 1）。以上述べた砂粒の特徴から、本試料は軽石質テフラの降下堆積層であると

表1．火山ガラスの屈折率

試料名	屈折率					対比されるテフラ
	形態	平均値	最小値	最大値	合計	
西南溝フク土火山灰サンプル	pm	1.530	1.529	1.532	30	As-B

判断される。テフラは、軽石の特徴（屈折率を含む）と遊離結晶の鉱物の種類およびスコリアと安山岩片を伴うことから、浅間火山を給源とし、天仁元年（1108年）に噴出した浅間Bテフラ（As-B：新井，1979）に同定される。一方、寺内溝からは、スコリア、火山ガラス、軽石のいずれも検出されなかった。

以上の結果および発掘調査所見に基づく堆積物の累重

関1.525 1.530 1.535 [屈折率] 係から、本調査区南西隅から検出された溝は、12世紀初頭頃には概ね埋没していたことが推定される。一方、黒色泥質土（寺内溝）からはテフラ等は検出されず堆積物の年代を検討するに至らなかった。なお、今回調査区北側（西側調整池）で実施された火山灰分析では、6世紀中葉頃に榛名火山より噴出したテフラの検出が報告されている（応用地質株式会社, 2002）。したがって、このテフラが検出された堆積層との層序対比や、黒色泥質土より検出された種実を対象とした放射性炭素年代測定などにより、年代観の検討が可能と考えられる。

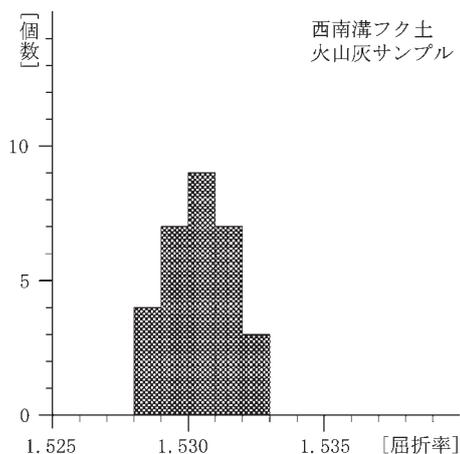


図1．火山ガラスの屈折率

II．古環境推定

1．試料

試料は、上記したテフラ分析に供した埋没谷の埋土（造成土）である17層上位に堆積する黒1層より採取された黒色泥質土（寺内溝）である。

2．分析方法

(1) 珪藻分析

試料を湿重で7g前後秤量し、過酸化水素水、塩酸処理、自然沈降法（4時間放置）の順に物理・化学処理を施して、珪藻化石を濃集する。検鏡に適する濃度まで希釈した後、カバーガラス上に滴下し乾燥させる。乾燥後、プレウラックスで封入して、永久プレパラートを作製する。検鏡は、光学顕微鏡で油浸600倍あるいは1000倍で行い、メカニカルステージでカバーガラスの任意の測線に沿って走査し、珪藻殻が半分以上残存するものを対象に200個体以上同定・計数する（化石の少ない試料はこの限りではない）。種の同定は、原口ほか（1998）、Krammer（1992）、Krammer & Lange-Bertalot（1986, 1988, 1991a, 1991b）、渡辺ほか（2005）、小林ほか（2006）などを参照し、分類基準は、Round, Crawford & Mann（1990）に従う。なお、壊れた珪藻殻の計数基準は、柳沢（2000）に従う。

同定結果は、中心類（Centric diatoms；広義のコアミケイソウ綱 Coscinodiscophyceae）と羽状類（Pennate diatoms）に分け、羽状類は無縦溝羽状珪藻類（Araphid pennate diatoms；広義のオビケイソウ綱 Fragilariophyceae）と有縦溝羽状珪藻類（Raphid pennate diatoms；広義のクサリケイソウ綱 Bacillariophyceae）に分ける。また、有縦溝類は、単縦溝類、双縦溝類、管縦溝類、翼管縦溝類、短縦溝類に細分する。

各種類の生態性は、Vos & de Wolf (1993) を参考とするほか、塩分濃度に対する区分はLowe (1974) に従い、真塩性種 (海水生種)、中塩性種 (汽水生種)、貧塩性種 (淡水生種) に類別する。また、貧塩性種は、塩分・水素イオン濃度 (pH)・流水に対する適応能も示す。産出個体数100個体以上の試料は、産出率2.0%以上の主要な種類について、主要珪藻化石群集の層位分布図を作成する。また、産出化石が現地性か異地性を判断する目安として、完形殻の出現率を求める。堆積環境の解析にあたり、淡水生種 (貧塩性種) は安藤 (1990)、陸生珪藻は伊藤・堀内 (1991)、汚濁耐性は渡辺ほか (2005) の環境指標種を参考とする。

(2) 花粉分析

試料約10g について、水酸化カリウムによる泥化、篩別、重液 (臭化亜鉛：比重2.3) による有機物の分離、フッ化水素酸による鉱物質の除去、アセトリシス (無水酢酸9,濃硫酸1の混合液) 処理による植物遺体中のセルロースの分解を行い、物理・化学的処理を施して花粉を濃集する。残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作成し、400倍の光学顕微鏡下で同定・計数する。結果は同定・計数結果の一覧表示す。

(3) 種実同定

試料を水に浸し、粒径0.5mmの篩を通して水洗する。篩内の試料を粒径別にシャーレに集めて双眼実体顕微鏡下で観察し、ピンセットを用いて同定が可能な種実遺体を抽出する。

抽出された種実遺体を双眼実体顕微鏡下で観察する。現生標本および石川 (1994)、中山ほか (2000) 等との対照から、種類と部位を同定し、個数を数えて表示する。試料中に確認される炭化材は、主に径4mmを抽出し、最大径 (mm) と70°C48時間乾燥後の重量 (g) を表示する。また、木の芽、シダ植物、昆虫が抽出された場合は、「+」で表示する。分析後は、種実等 (炭化材以外) を分類群毎に容器に入れ、70%エタノール溶液で液浸し保管する。

3. 結果

(1) 珪藻分析

結果を表2、図2に示す。寺内溝からは珪藻化石が豊富に産出する。完形殻の出現率は、約70%と保存状態が良い。産出分類群数は、15属29分類群である。

寺内溝 (黒1層) は、陸上のコケや土壌表面など多少の湿り気を保持した好気的環境に耐性のある陸生珪藻が全体の約80%を占め優占する。淡水性種の生態性 (塩分濃度、水素イオン濃度、流水に対する適応性) の特徴は、貧塩不定性種、好+真アルカリ性種、流水不定性種が優占する。主要種は、陸生珪藻の中でも耐乾性の高い陸生珪藻A群の *Hantzschia amphioxys* が約40%と優占し、同じく陸生珪藻A群の *Pinnularia borealis* が約20%、*Luticola mutica* が約10%産出する。淡水域に生育する水生珪藻は少ないが、流水不定性で沼沢湿地付着生種の *Eunotia minor* や流水不定性で付着性の *Gomphonema parvulum* などが産出する。

(2) 花粉分析

結果を表3に示す。寺内溝 (黒1層) の花粉化石の保存状態は悪く、検出数も少ない。マキ属、モミ属、マツ属、イネ科が少量認められるのみである。分析残渣中には、黄褐色～褐色で透過光を多少は通す植物遺体が多く認められ、透過光をほとんど通さない炭化物は少ない。これらは炭化が十分でない可能性もあるが、分解の過程で腐植酸などによって着色された可能性もある。また、由来が判明するような特徴的な組織を持つ植物遺体は確認されない。

(3) 種実同定

結果を表4に示す。試料からは、被子植物13分類群 (アワ近似種、エノコログサ属、イネ科、シンジュガ

表2. 珪藻分析結果

分類群	生態性			環境指標種	寺内溝(黒1)
	塩分	pH	流水		
Bacillariophyta (珪藻植物門)					
Raphid Pennate Diatoms (有縦溝羽状珪藻類)					
Biraphid Pennate Diatoms (双縦溝羽状珪藻類)					
<i>Cymbella cuspidata</i> Kuetzing	Ogh-ind	ind	ind	T	2
<i>Cymbella uenoi</i> Skvortzov in Skvortzov et Noda	Ogh-ind	al-bi	ind	T	1
<i>Encyonema gracile</i> Ehrenberg	Ogh-ind	ind	l-ph	T	1
<i>Encyonopsis neoamphioxys</i> Krammer	Ogh-ind	ac-il	l-ph		2
<i>Gomphonema gracile</i> Ehrenberg	Ogh-ind	al-il	l-ph	O,U	3
<i>Gomphonema parvulum</i> (Kuetz.) Kuetzing	Ogh-ind	ind	ind	U	5
<i>Gomphonema vibrio</i> Ehrenberg	Ogh-ind	al-il	l-ph	U	1
<i>Navicula ignota</i> Krasske	Ogh-ind	ind	ind	RB,T	4
<i>Navicula ignota var. palustris</i> (Hust.) Lund	Ogh-ind	ind	ind	RB	13
<i>Stauroneis borealis</i> (Pet.) Lund	Ogh-ind	ind	ind	RI	4
<i>Diademesma contenta</i> (Grunow) Van Heurck D.G.Mann	Ogh-ind	al-il	ind	RA,T	1
<i>Luticola mutica</i> (Kuetz.) D.G.Mann	Ogh-ind	al-il	ind	RA,S	21
<i>Neidium dubium</i> (Ehr.) Cleve	Ogh-ind	ind	ind		1
<i>Neidium indicis</i> (Ehr.) Cleve	Ogh-hob	ac-il	ind	O,U	1
<i>Caloneis lagerstedtii</i> (Lagerst.) Cholnoky	Ogh-ind	al-il	ind	S	1
<i>Pinnularia borealis</i> Ehrenberg	Ogh-ind	ind	ind	RA,U	36
<i>Pinnularia borealis</i> var. <i>linearis</i> M.Per.	Ogh-ind	ind	ind	RA	2
<i>Pinnularia borealis</i> var. <i>sumatrensis</i> Hustedt	Ogh-ind	ac-il	l-ph		1
<i>Pinnularia gibbata</i> Ehrenberg	Ogh-ind	ac-il	ind	O,U	1
<i>Pinnularia laevis</i> Hantzsch	Ogh-hob	ac-il	ind	O	1
<i>Pinnularia stomatophora</i> (Grunow) Cleve	Ogh-ind	ac-il	ind		1
<i>Pinnularia viridis</i> (Nitz.) Ehrenberg	Ogh-ind	ind	ind	O,U	2
管縦溝類					
<i>Hantzschia amphioxys</i> (Ehr.) Grunow	Ogh-ind	ind	ind	RA,U	79
<i>Nitzschia brevissima</i> Grunow	Ogh-Meh	al-il	ind	RB,U	1
<i>Rhopalodia gibbata</i> (Ehr.) O.Muller	Ogh-Meh	al-il	ind	U	2
短縦溝類					
<i>Eunotia bilunata</i> (Ehr.) Mills	Ogh-hob	ac-bi	ind	U	2
<i>Eunotia implicata</i> Noepel & Lange-Bertalot	Ogh-hob	ac-il	ind	O	1
<i>Eunotia minor</i> (Kuetz.) Grunow	Ogh-hob	ind	ind	O,T	11
<i>Eunotia naegelii</i> Migula	Ogh-hob	ac-bi	ind	T	1
海水生種					0
海水～汽水生種					0
汽水生種					0
淡水～汽水生種					3
淡水生種					199
珪藻化石総数					202

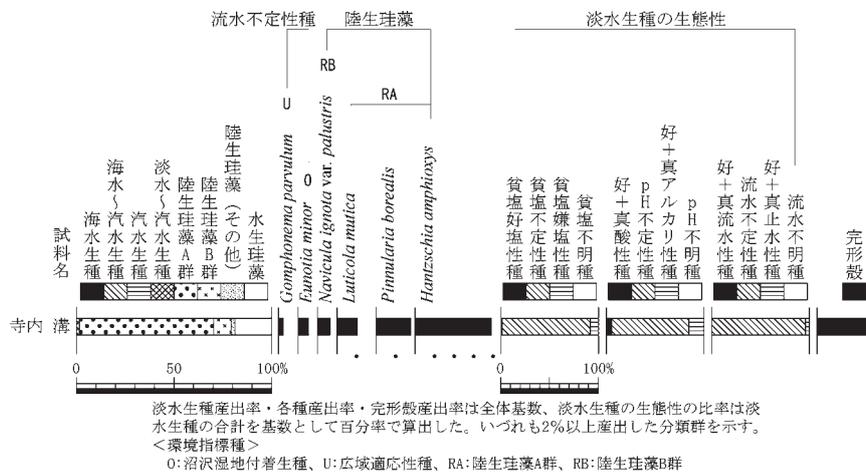


図2. 主要珪藻化石群集

ヤ属、ナデシコ科、キジムシロ属—ヘビイチゴ属—オランダイチゴ属(以下、キジムシロ類)、マメ科、トウダイグサ亜属、スマレ属、アカネ科、キランソウ属、オミナエシ属、キク科) 87個の種実と、炭化材、木の芽、炭化したシダ植物の羽状葉の破片、一部炭化個体を含む昆虫が確認された。

検出された種実遺体群は、全て草本類から構成される。このうち、栽培種では、炭化したアワ(近似種)の果実が5個確認された。栽培種を除く分類群は、明るく開けた場所に生育する人里植物に属する分類群からなり、エノコログサ属やイネ科、キジムシロ類、キランソウ属、オミナエシ属には炭化個体が確認された。

以下に、検出された各分類群の形態的特徴等を記す。

・アワ近似種 (*Seta ia* cf. *italica* (L.) P.Beauv.)

イネ科エノコログサ属

果実が検出された。炭化しており黒色、胚乳は径1.5mm、厚さ0.8-1.0mm程度の半偏球体。背面は丸みがあり、腹面は平ら。果皮は薄く、表面には横方向に目立つ顆粒状突起が配列する。果実内部に1個ある胚乳は、基部正中線上に径0.5mm程度の馬蹄形の胚の凹みがある。胚乳表面はやや平滑。

・エノコログサ属 (*Seta ia*) イネ科

果実が検出された。淡-灰褐色、炭化個体は黒色。長さ1.8mm、径1mm程度の半偏球体。背面は丸みがあり腹面は偏平。果皮表面には横方向に目立つ網目模様が配列する。

・イネ科 (Gramineae)

果実が確認された。アワを含むエノコログサ属以外を一括している。淡-灰褐色、炭化個体は黒色。長さ1.5-2.5mm、径0.5-1.5mm程度の狭卵-半偏球体で背面は丸みがあり腹面は偏平。果皮表面は平滑で、微細な縦長の網目模様が縦列する。

・シンジュガヤ属 (*Scleria*) カヤツリグサ科

果実が検出された。淡褐色、長さ2.3mm、径1.8mm程度の広楕円体。頂部に短い花柱基部が残り、基部には3裂する基盤がある。卵状三角形で、上方は急に尖る基盤の裂片を欠損する。果皮は核状で堅く、表面には長楕円形の凹みによる格子状網目模様がある。

・ナデシコ科 (Caryophyllaceae)

種子の破片が検出された。黒褐色、径0.8mm程度のやや偏平な腎状円形。基部は凹み、臍がある。種皮は薄く表面には瘤状突起が臍から同心円状に配列する。

・キジムシロ属-ヘビイチゴ属-オランダイチゴ属 (*Potentilla-Duchesnea-Fragaria*) バラ科

核(内果皮)が検出された。淡-灰褐色、炭化個体は黒色。長さ1.2mm、幅0.9mm、厚さ0.4mm程度のやや偏平な腎体。内果皮は厚く硬く、表面は粗面または数個の海綿状隆条が斜上する。

・マメ科 (Leguminosae)

種子が検出された。炭化しており黒色。長さ2.8mm、径1.7mm程度のやや偏平な腎状楕円体。腹面中央部より少し離れたところに、縁が隆起する長さ0.5mm、幅0.2mm程度の楕円形の臍がある。種皮表面はやや平滑で、焼き崩れている。栽培種のマメ類の種子とは、大きさと臍が小型である点から区別される。

・トウダイグサ亜属 (*Euphorbia* L. Subgen. *Tithymalus*) トウダイグサ科トウダイグサ属

種子が検出された。灰-黒褐色、長さ1.9-2.3mm、径1.4-1.6mm程度の倒卵体。腹面正中線に低い隆条がある。基部は斜切形。種皮は薄く、表面はやや平滑。表面に5-6角形の凹みによる大型の網目模様があるトウダイグサ (*E. helioscopia* L.) とは区別される。

・スミレ属 (*Viola*) スミレ科

種子の破片が検出された。淡灰褐色、長さ1-1.6mm、径1-1.2mm程度の広倒卵体。基部は尖りやや湾曲する。頂部は円形の臍点がある。表面には縦方向に走る1本の縫合線がある。種皮は薄く、表面には縦長の微細な網目模様が配列する。

表3. 花粉分析結果

分類群	寺内溝(黒1)
木本花粉	
モミ属	2
ツガ属	1
スギ属	2
コナラ属コナラ亜属	1
コナラ属アカガシ亜属	1

草本花粉	
ガマ属	1
イネ科	5
ワレモコウ属	1
オミナエシ属	1
ホタルブクロ属-ツリガネニンジン属	1
ヨモギ属	6
シダ類胞子	
シダ類胞子	6
合計	
木本花粉	7
草本花粉	15
シダ類胞子	6
総計(不明を除く)	28

表4．種実分析結果

分類群	部位	状態	寺内溝 (黒1)	備考
草本				
アフ近似種	果実	完形 炭化	5	
エノコログサ属	果実	完形 炭化	3	
		破片 炭化	1	
		破片	1	
イネ科	果実	完形 炭化	7	
		完形	5	
シンジュガヤ属	果実	完形	1	
ナデシコ科	種子	破片	1	
キジムシロ属-ヘビイチゴ属-オランダイチゴ属	核	完形	14	
		破片 炭化	1	
		破片	10	
マメ科	種子	完形 炭化	3	
トウダイグサ亜属 (トウダイグサ以外)	種子	完形	4	
		破片	9	
スマレ属	種子	破片	9	
アカネ科	核	完形	1	
キランソウ属	果実	完形 炭化	1	
		完形	1	
		破片	1	
オミナエシ属	果実	完形 炭化	2	
		完形	3	
		完形	3	
キク科	果実	完形	4	
炭化材		径 4 mm >	1.29	乾燥重量 [g], 最大径 17mm
木の芽			+	
シダ植物	葉	炭化	+	羽状葉
昆虫			+	一部炭化
分析量			150	容量 [cc]
			134.68	重量 [g]

・アカネ科 (Rubiaceae)

核が検出された。黒色、長さ1.2mm、径1.3mm程度の偏球体。腹面中央に径0.5mm程度の楕円形の深い孔がある。表面には微細な網目模様が発達する。

・キランソウ属 (Ajuga) シソ科

果実が検出された。灰黄褐色、炭化個体は黒色。長さ1.6mm、径1.1mm程度の狭楕円体。腹面基部にある果実の長さの2/3に達する楕円形の着点痕を欠損する。果皮表面には深い凹みによる網目模様が分布する。

・オミナエシ属 (Patinia) オミナエシ科

果実が検出された。灰褐色、長さ2mm、幅1.3mm程度のやや扁平な卵体。腹面の正中線上に隆条があり、その上部は突起し孔がある。背面はやや平らで縁は翼状。表面には微細な網目模様がある。基部に黄褐色、へら形の萼片が残存し、腹面を覆う個体がみられる。

・キク科 (Compositae)

果実が検出された。形態の異なる複数種を一括している。灰褐色、長さ1.6mm、径1mm程度の長楕円体と、黒色、長さ2mm、径0.7mm程度の腹面方向にやや湾曲する狭倒皮針体。果実頂部は切形で円形の臍がある。果皮表面は粗面で微細な網目模様と数本の縦隆条が配列する。

4. 考察

寺内廃寺跡の造成土とみられる堆積物との間に挟在する黒色泥質土（寺内溝；黒1層）からは、陸生珪藻が多産した。このことから、定常的に水が存在していたのではなく、しばしば乾燥するような環境であった、あるいは、このような環境にあった堆積物に由来すると考えられる。また、同試料からは花粉化石はほとんど検出されなかった。花粉化石は好気的環境下による分解に弱いことから、陸生珪藻が多産するような環境において大部分が消失した可能性がある。

種実分析では、草本類を主体とする種実遺体群が検出されたほか、炭化材や木の芽、シダ植物の羽状葉、昆虫などが確認された。炭化材の検出や、種実や昆虫、シダ植物の葉の一部には炭化した個体が認められたことから、火熱を受けた植物片等を含む微細物片が廃棄もしくは流入したことが推定される。ただし、花粉分析では典型的な微粒炭がほとんど見られなかったことから、炭化の程度が低い状況が窺われる。

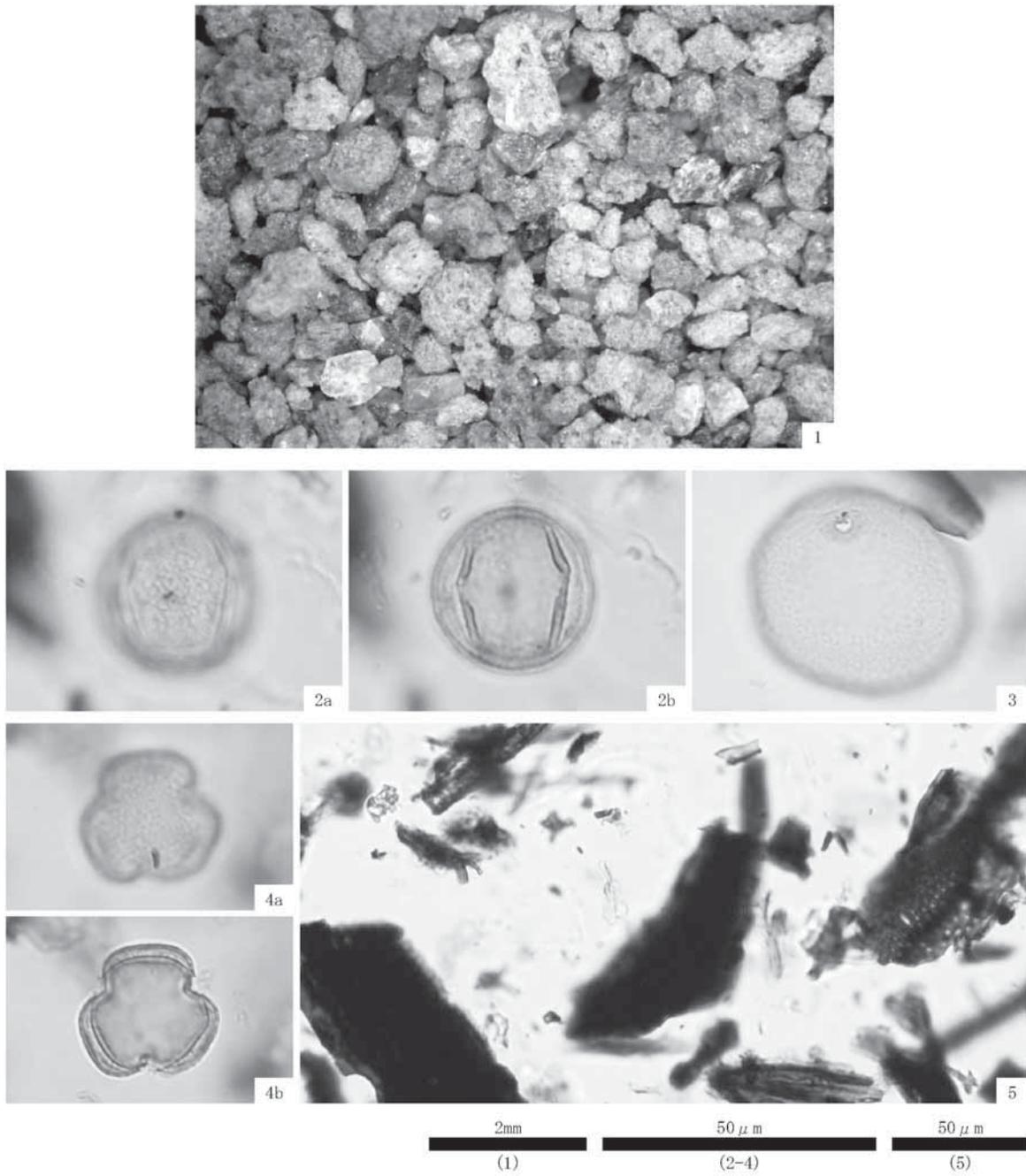
検出された種実遺体群のうち栽培種では、炭化したアワ（近似種）の果実が確認されたことから、アワの利用が推定される。また、栽培種以外の種実に確認されたエノコログサ属、イネ科、シンジュガヤ属、ナデシコ科、キジムシロ類、マメ科、トウダイグサ亜属、スミレ属、アカネ科、キランソウ属、オミナエシ属、キク科などは、人里植物を含む分類群である。したがって、遺跡周辺には、これらの分類群からなる草地在り分布していたと考えられる。

これまでの寺内廃寺跡の各地点で実施された自然科学分析調査では、As-B降灰以前の堆積層においてマツ属花粉が高率で検出される傾向から、局地的なマツ林の存在や植栽などの可能性が示唆されている（未公表資料）。なお、マツ属は風媒花で花粉生産量が膨大で飛散能力にも優れることから、周辺植生に比べ花粉化石の割合が多くなる傾向にある（Feagri & Iversen, 1989）ため、実際に存在したマツ林の規模は花粉分析でみられるマツ属花粉の割合よりも少なかったと考えられる。この点を踏まえ、過去の花粉分析結果や今回の種実遺体群の産状を考慮すると、寺内廃寺跡内は草地在り植生を主体とする植生が推定される。

引用文献

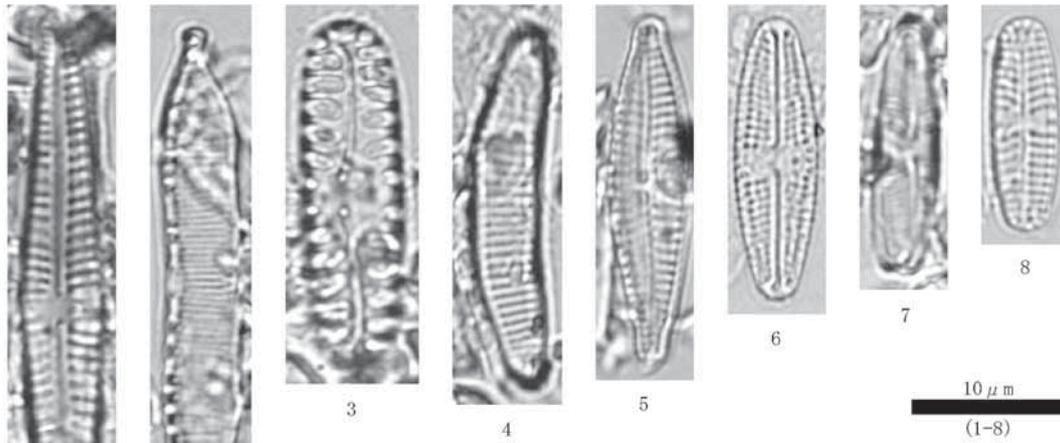
- 安藤一男, 1990, 淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復元への応用. 東北地理, 42, 73-88.
- Asai, K. & Watanabe, T., 1995, Statistic Classification of Epilithic Diatom Species into Three Ecological Groups relating to Organic Water Pollution (2) Saprophilous and saproxenous taxa. Diatom, 10, 35-47.
- 原口和夫・三友清史・小林 弘, 1998, 埼玉の藻類 珪藻類. 埼玉県植物誌, 埼玉県教育委員会, 527-600.
- 堀口万吉, 1986, II 埼玉県の地形と地質. 新編 埼玉県史別編 3 自然 埼玉県, 7-74.
- Hustedt, F., 1937-1939, Systematische und ökologische Untersuchungen über die Diatomeen-Flora von Java, Bali und Sumatra. Archiv für Hydrobiologie, Supplement, 15: 131-177, 15: 187-295, 15: 393-506, 15: 638-790, 16: 1-155, 16: 274-394.
- 石川茂雄, 1994, 原色日本植物種子写真図鑑. 石川茂雄図鑑刊行委員会, 328p.
- 伊藤良永・堀内誠示, 1991, 陸生珪藻の現在に於ける分布と古環境解析への応用. 珪藻学会誌, 6, 23-45.
- 小杉正人, 1988, 珪藻の環境指標種群の設定と古環境復元への応用. 第四紀研究, 27, 1-20.
- 小林 弘・出井雅彦・真山茂樹・南雲 保・長田啓五, 2006, 小林弘珪藻図鑑. 第1巻, (株)内田老鶴園, 531p.
- 江南町, 1995, 第六章 第二節 寺内廃寺跡(17). 江南町史 資料編 1 考古, 518-576.
- Krammer, K., 1992, PINNULARIA. eine Monographie der europäischen Taxa. BIBLIOTHECA DIATOMOLOGICA BAND 26. J. CRAMER, 353p.
- Krammer, K. & Lange-Bertalot, H., 1986, Bacillariophyceae. 1. Teil: Naviculaceae. In: Suesswasserflora von Mitteleuropa. Band 2/1. Gustav Fischer Verlag, 876p.
- Krammer, K. & Lange-Bertalot, H., 1988, Bacillariophyceae. 2. Teil: Epithemiaceae, Bacillariaceae, Surirellaceae. In: Suesswasserflora von Mitteleuropa. Band 2/2. Gustav Fischer Verlag, 536p.
- Krammer, K. & Lange-Bertalot, H., 1991a, Bacillariophyceae. 3. Teil: Centrales, Fragilariaceae, Eunotiaceae. In: Suesswasserflora von Mitteleuropa. Band 2/3. Gustav Fischer Verlag, 230p.
- Krammer, K. & Lange-Bertalot, H., 1991b, Bacillariophyceae. 4. Teil: Achnantheaceae, Kritische Ergänzungen zu Navicula (Lineolatae) und Gomphonema. In: Suesswasserflora von Mitteleuropa. Band 2/4. Gustav Fischer Verlag, 248p.
- Lowe, R.L., 1974, Environmental Requirements and pollution Tolerance of Fresh-water Diatoms. 334p. In Environmental Monitoring Ser. EPA Report 670/4-74-005. Nat. Environmental Res. Center Office of Res. Develop., U.S. Environ. Protect. Agency, Cincinnati.
- 応用地質株式会社, 2002, 第2節 寺内遺跡検出火山灰分析. 寺内遺跡範囲確認調査関連報告書. 江南町埋蔵文化財調査報告書 第13号, 125-135.
- 中山至大・井之口希秀・南谷忠志, 2000, 日本植物種子図鑑. 東北大学出版会, 642p.
- Round, F. E., Crawford, R. M. & Mann, D. G., 1990, The diatoms. Biology & morphology of the genera. 747p. Cambridge University Press, Cambridge.
- Vos, P.C. & H. de Wolf, 1993, Diatoms as a tool for reconstructing sedimentary environments in coastal wetlands; methodological aspects. Hydrobiologica, 269/270, 285-296.
- 渡辺仁治・浅井一視・大塚泰介・辻 彰洋・伯耆晶子, 2005, 淡水珪藻生態図鑑. 内田老鶴園, 666p.
- 柳沢幸夫, 2000, II-1-3-2-(5) 計数・同定. 化石の研究法—採集から最新の解析法まで—, 化石研究会, 共立出版株式会社, 49-50.

図版1 テフラ・花粉化石

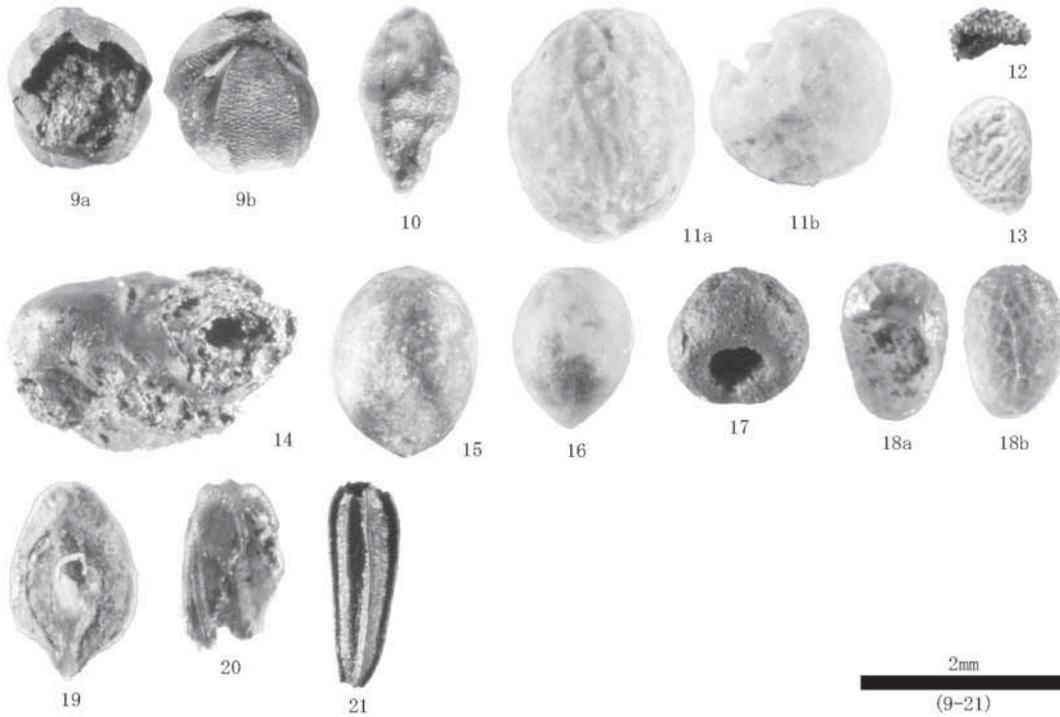


1. 浅間Bテフラ (西南溝フク土火山灰サンプル)
2. コナラ亜属 (寺内溝) 3. イネ科 (寺内溝)
4. ヨモギ属 (寺内溝) 5. プレパレート内状況写真 (寺内溝)

図版2 珪藻化石・種実遺体



- 1. *Gomphonema gracile* Ehrenberg (寺内溝)
- 2. *Hantzschia amphioxys* (Ehr.)Grunow (寺内溝)
- 3. *Pinnularia borealis* Ehrenberg (寺内溝)
- 4. *Eunotia minor* (Kuetz.)Grunow (寺内溝)
- 5. *Gomphonema parvulum* (Kuetz.)Kuetzing (寺内溝)
- 6. *Luticola mutica* (Kuetz.)D.G.Mann (寺内溝)
- 7. *Stauroneis borrichii* (Pet.)Lund (寺内溝)
- 8. *Navicula ignota* var. *palustris* (Hust.)Lund (寺内溝)



- 9. アワ近似種果実 (寺内溝)
- 10. エノコログサ属果実 (寺内溝)
- 11. シンジュガヤ属果実 (寺内溝)
- 12. ナデシコ科種子 (寺内溝)
- 13. キジムシロ属-ヘビイチゴ属-オランダイチゴ属核 (寺内溝)
- 14. マメ科種子 (寺内溝)
- 15. トウダイグサ亜属種子 (寺内溝)
- 16. スミレ属種子 (寺内溝)
- 17. アカネ科核 (寺内溝)
- 18. キランソウ属果実 (寺内溝)
- 19. オミナエシ属果実 (寺内溝)
- 20. キク科果実 (寺内溝)
- 21. キク科果実 (寺内溝)

2 寺内遺跡における放射性炭素年代 (AMS測定)

(株)加速器分析研究所

1 測定対象試料

測定対象試料は、熊谷市寺内遺跡の整地層より出土した木片 (K-1 : IAAA-90174、K-2 : IAAA-90175)、同炭化種子 (K-3 : IAAA-90176)、の合計 3 点である。

2 測定の意義

木片、炭化種子、木炭の年代を明らかにする。

3 化学処理工程

- (1) メス・ピンセットを使い、根・土等の表面的な不純物を取り除く。
- (2) 酸処理、アルカリ処理、酸処理 (AAA : Acid Alkali Acid) により内面的な不純物を取り除く。最初の酸処理では 1 N の塩酸 (80°C) を用いて数時間処理する。その後、超純水で中性になるまで希釈する。アルカリ処理では 1 N の水酸化ナトリウム水溶液 (80°C) を用いて数時間処理する。なお、AAA 処理において、アルカリ濃度が 1 N 未満の場合、表中に AaA と記載する。その後、超純水で中性になるまで希釈する。最後の酸処理では 1 N の塩酸 (80°C) を用いて数時間処理した後、超純水で中性になるまで希釈し、90°C で乾燥する。希釈の際には、遠心分離機を使用する。
- (3) 試料を酸化銅と共に石英管に詰め、真空下で封じ切り、500°C で 30 分、850°C で 2 時間加熱する。
- (4) 液体窒素とエタノール・ドライアイスの温度差を利用し、真空ラインで二酸化炭素 (CO₂) を精製する。
- (5) 精製した二酸化炭素から鉄を触媒として炭素のみを抽出 (水素で還元) し、グラファイトを作製する。
- (6) グラファイトを内径 1 mm のカソードに詰め、それをホイールにはめ込み、加速器に装着する。

4 測定方法

測定機器は、3 MV タンデム加速器をベースとした ¹⁴C-AMS 専用装置 (NEC Pelletron 9 SDH-2) を使用する。測定では、米国国立標準局 (NIST) から提供されたシュウ酸 (HOxII) を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

5 算出方法

- (1) 年代値の算出には、Libby の半減期 (5568 年) を使用する (Stuiver and Polash 1977)。
- (2) ¹⁴C 年代 (Libby Age : yrBP) は、過去の大気中 ¹⁴C 濃度が一定であったと仮定して測定され、1950 年を基準年 (0 yrBP) として遡る年代である。この値は、 $\delta^{13}\text{C}$ によって補正された値である。¹⁴C 年代と誤差は、1 桁目を四捨五入して 10 年単位で表示される。また、¹⁴C 年代の誤差 ($\pm 1\sigma$) は、試料の ¹⁴C 年代がその誤差範囲に入る確率が 68.2% であることを意味する。
- (3) $\delta^{13}\text{C}$ は、試料炭素の ¹³C 濃度 (¹³C/¹²C) を測定し、基準試料からのずれを示した値である。同位体比は、いずれも基準値からのずれを千分偏差 (‰) で表される。測定には質量分析計あるいは加速器を用いる。加速器により ¹³C/¹²C を測定した場合には表中に (AMS) と注記する。
- (4) pMC (percent Modern Carbon) は、標準現代炭素に対する試料炭素の ¹⁴C 濃度の割合である。
- (5) 暦年較正年代とは、年代が既知の試料の ¹⁴C 濃度を元に描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の 14

C濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。暦年較正年代は、¹⁴C年代に対応する較正曲線上の暦年代範囲であり、1標準偏差(1σ=68.2%)あるいは2標準偏差(2σ=95.4%)で表示される。暦年較正プログラムに入力される値は、下一桁を四捨五入しない¹⁴C年代値である。なお、較正曲線および較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、暦年較正年代の計算に、IntCal 04 データベース (Reimer et al 2004) を用い、OxCalv 4.1 較正プログラム (Bronk Ramsey 1995 Bronk Ramsey 2001 Bronk Ramsey, van der Plicht and Weninger 2001) を使用した。

6 測定結果

¹⁴C年代は、K-1が1550±30 yrBP、K-2が1650±30 yrBP、K-3が1150±30 yrBPである。

寺内遺跡出土のK-1とK-2が古墳時代、K-3が古代の年代を示した。いずれも炭素含有率は40%を超える問題のない値であった。

測定番号	試料名	採取場所	試料形態	処理方法	δ ¹³ C (‰) (AMS)	δ ¹³ C補正あり	
						Libby Age(yrBP)	pMC(%)
IAAA-90174	K-1	寺内遺跡 整地層	木片	AaA	-28.98±0.59	1,550±30	82.44±0.32
IAAA-90175	K-2	寺内遺跡 整地層	木片	AAA	-27.56±0.51	1,650±30	81.38±0.32
IAAA-90176	K-3	寺内遺跡 整地層	炭化種子	AAA	-24.42±0.67	1,150±30	86.64±0.34

[# 2922, 2923, 2924, 2925]

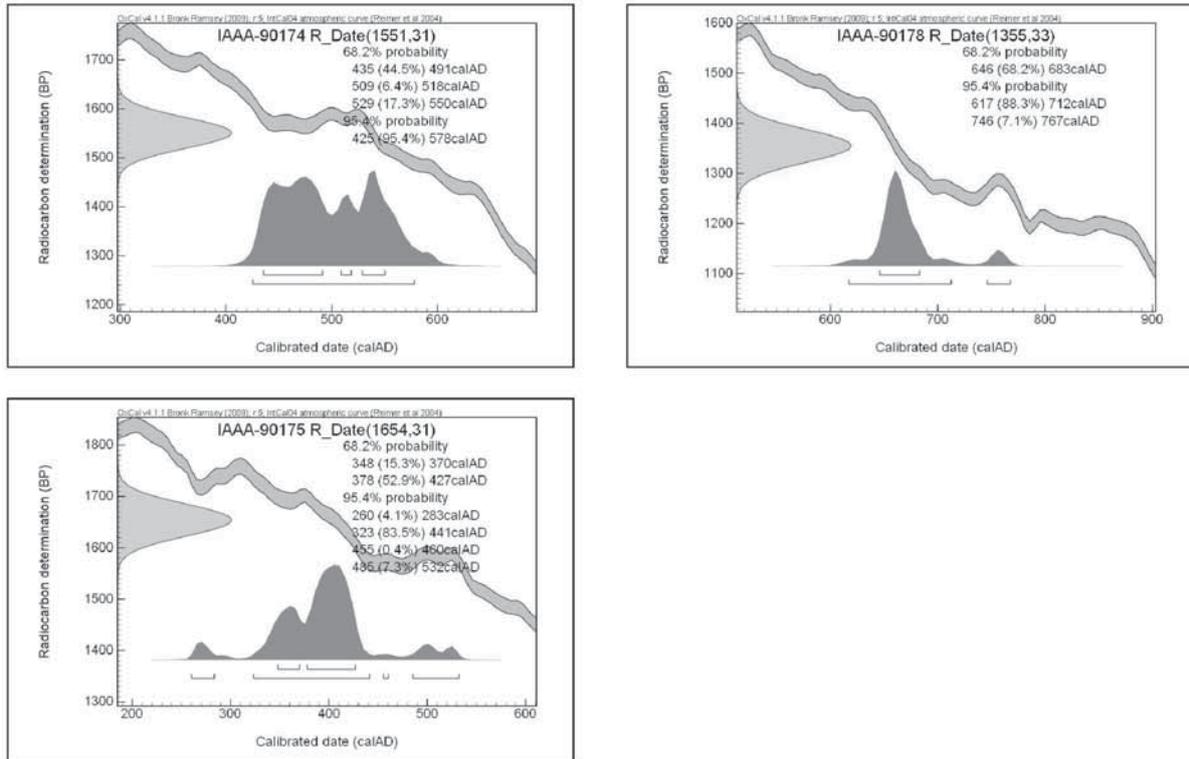
測定番号	δ ¹³ C補正なし		暦年較正用 (yrBP)	1σ暦年代範囲	2σ暦年代範囲
	Age(yrBP)	pMC(%)			
IAAA-90174	1,620±30	81.76±0.31	1,551±31	435AD-491AD (44.5%) 509AD-518AD (6.4%) 529AD-550AD (17.3%)	425AD-578AD (95.4%)
IAAA-90175	1,700±30	80.96±0.31	1,654±31	348AD-370AD (15.3%) 378AD-427AD (52.9%)	260AD-283AD (4.1%) 323AD-441AD (83.5%) 455AD-460AD (0.4%) 485AD-532AD (7.3%)
IAAA-90176	1,140±30	86.74±0.31	1,152±31	784AD-787AD (1.2%) 826AD-840AD (7.2%) 863AD-901AD (26.8%) 917AD-966AD (33.0%)	779AD-793AD (5.2%) 802AD-973AD (90.2%)

[参考値]

参考文献

- Stuiver M. and Polash H.A. 1977 Discussion : Reporting of ^{14}C data, *Radiocarbon* 19, 355-363
 Bronk Ramsey C. 1995 Radiocarbon calibration and analysis of stratigraphy : the OxCal Program, *Radiocarbon* 37(2), 425-430
 Bronk Ramsey C. 2001 Development of the Radiocarbon Program OxCal, *Radiocarbon* 43(2 A), 355-363
 Bronk Ramsey C., van der Plicht J. and Weninger B. 2001 'Wiggle Matching' radiocarbon dates, *Radiocarbon* 43(2 A), 381-389
 Reimer, P.J. et al. 2004 IntCal 04 terrestrial radiocarbon age calibration, 0-26 cal kyr BP, *Radiocarbon* 46, 1029-1058

図1 暦年較正年代グラフ



図版3 分析資料



測定番号 LAAA-90174

資料No.K-1

整地層 17層上層中



測定番号 LAAA-90175

資料No.K-2

整地層 16層中



測定番号 LAAA-90176

資料No.K-3

整地層 3 b層中

VIII 小 結

本報告は5ヶ所の遺跡の発掘調査報告であり、それぞれに遺跡の調査成果などを本文中に記してきたが、本節ではとくに貴重な発見と考えられる原谷遺跡の縄文時代草創期資料について取り上げておきたい。

原谷遺跡から出土した縄文時代草創期資料は、多縄文系土器の一括資料である。石器には石鏃・搔器・局部磨製石斧・三角錐形石器・礫器などが伴出している。江南台地域ではまとまった発見例は今回が初めてとなるが、同じく荒川扇状地に立地する櫛挽台地上の深谷市宮林遺跡の存在や、早期撚糸文系土器の集落が多数所在する江南台地の既調査所見から、草創期遺物の発見は予測されて来たところであった。隣り合う萩山遺跡（註1）では撚糸文系土器様式のI期に遡る集落が調査されており、他にも深谷市沢口遺跡（註2）から草創期爪形文系土器が、鹿島遺跡（註3）や宮脇遺跡（註4）でも撚糸文期の住居跡が調査されているなど、この江南台地域では縄文時代草創期～早期の遺跡が密に見られる状況があったのである（註5）。

原谷遺跡での遺物出土状況について再確認すると、当時の遺構に伴うものではなく方形周溝墓盛土により包含層が保存されていたのである。今回の調査により出土した草創期多縄文系土器は46点であり、本報告では第I群土器として説明した。細片ではあるがその文様構成上「押圧縄文」・「回転縄文」による羽状構成と斜行縄文の2種があり、不十分ながら施文方法と縄文原体の種別からIII類5種として細別を試みた。羽状縄文は縄の側面圧痕と絡条体の回転文に区別した。これらは、I類1種が縄一側面押圧一羽状構成、III類1種が絡条体一回転、押圧一羽状構成をとる。また、II類は縄、絡条体の回転により斜行縄文構成をとるもので、縄の撚り方や施文方法に差がみられた。土器片は体部破片と判別しているものが主で、器厚は薄いもので3～4mm程度、主体は5～6mmである。口縁部を残すものは二点だけで、いずれも2類で8は薄く延ばされ、17は口縁部をつまみ出すことで口縁としている。

上記のように原谷遺跡の草創期土器の様相は割合に単純であるように見える。原谷遺跡の周辺では内容の豊富な草創期遺跡がいくつか知られており、各地の状況を谷口康浩氏の「多縄文系土器」（註6）や、「縄文時代草創期後半の諸様相」（註7）などを参考に、埼玉県北部から群馬県にかかる北関東地方の諸遺跡の状況とを比較し、原谷遺跡の内容と位置付を考えた。取り上げる遺跡の第一は原谷遺跡から7.2kmの距離にある宮林遺跡（註8）で、草創期の土器群を出土する国内でも代表的な遺跡として知られる。宮林遺跡は1987年に報告され第4号住居跡、調査区から爪形文、多縄文系土器を主体とする豊富な土器が出土し、その位置付と評価に多くの問題を今なお提議している（註9）。遺跡は荒川左岸の櫛挽台地に立地し標高74～75mに占地する。他に埼玉県では、深谷市水久保遺跡（註10）・西谷遺跡（註11）と滑川町打越遺跡（註12）にまとまった草創期遺物が出土している。

宮林遺跡出土土器は爪形文と多縄文が同時に施文されるなど両者の接点となる内容を持つ土器群であるが、第I群とされた草創期の土器群は、爪形文系・多縄文系・沈線文系を主体とし6類17種に分けている。原谷遺跡資料と比較できる宮林遺跡の多縄文系土器は第2類土器で8種に区分され、さらに細別されている。a種は一側面圧痕を施す一群で原体・施文効果の差から6細別される。b種は一絡条体圧痕のもので3細別する。c種は一縄の端部刺突のもので4細別する。d種は絡条体圧痕文のもので3細別する。e種は一回転縄文のもので斜行縄文の原体により5細別する。とくにe種(3)R、(4)Lは無節の斜縄文である。f種は一表裏縄文のもので特に細別していないがバリエーションが多い。g種は一羽状・鋸歯状の施文効果をもつもので、3細別する。h種は一撚糸文のもので3細別する。また、第5類には2種以上の文様が併用されるもの

で、側面圧痕と絡条体などが同居している。

これらの土器群と原谷遺跡の土器群の比較から、共通する点を次に挙げると、宮林遺跡の第Ⅰ群第Ⅱ類a種(1)と原谷遺跡のⅠ類Ⅰ種が側面圧痕で羽状構成となるもの。宮林遺跡e種(1)と原谷遺跡のⅡ類Ⅰ種が回転縄文となるもの。宮林遺跡のe種(3)R(4)Lの無節縄文が施文されるもので、原谷遺跡Ⅱ類Ⅱ種となるものである。なお、宮林遺跡5類26はc種の爪形文も施されるが、原谷遺跡での類例はない。

以上の2点の特徴である押圧縄文の施される土器と回転縄文施す土器で、それも羽状構成をとっている。また、宮林遺跡にあって原谷遺跡では見られない点には、宮林遺跡の第Ⅰ類土器である爪形文系土器自体が伴っていないこと。多縄文系土器群の中では宮林遺跡f種とする表裏縄文土器が伴わないこと。などが挙げられる。これらの特徴は原谷遺跡の土器群の使用された期間が比較的短い期間を現すものと思われる。

ここで、荒川扇状地及びその周辺地域での縄文時代草創期土器出土遺跡の分布についてみると、荒川左岸台地では前述の宮林遺跡のほかに、深谷市西谷遺跡・深谷市水久保遺跡・深谷市西龍ヶ谷遺跡(註13)・深谷市沼端遺跡(註14)が知られている。とくに、西谷遺跡では少量の爪形文系土器も含むが主体は多縄文系土器群で、絡条体圧痕を横帯に繰り返すもの、羽状構成の回転縄文、縄の押圧などがみられる。水久保遺跡でも多縄文系土器が主体で、口縁部をくの字状に小さく屈曲・湾曲させた器形に羽状構成の絡条体の押圧・回転文を施文する土器が出土している。西龍ヶ谷、沼端遺跡でも回転縄文・押圧縄文土器が少量出土している。

右岸台地では今回報告の原谷遺跡のほかに、沢口遺跡が江南台地を開析する谷奥に立地し、厚手爪形文系土器が出土しているが薄手爪形文系土器や多縄文系土器を伴わない。また、江南台地に続く比企丘陵では滑川町打越遺跡が調査され、宮林遺跡例のように住居跡が報告されている。薄手の爪形文系土器、ハの字状爪形文系土器、縄の側面圧痕、回転縄文を施文する土器が出土している。

群馬県みどり市の西鹿田中島遺跡(註15)は、厚手爪形文系土器の集中する地点(B区集中部B、集中部C)、薄手の爪形文系土器と多縄文系土器の集中する地点(B区集中部A、集中部D、7号住居跡、11号住居跡)があり、その集中箇所から住居跡・土壌などが確認された。同遺跡は台地上の各地点での生活利用が行われたと想定され、10,000㎡を越える草創期集落遺跡としては大規模なものとなっている。B区集中部Aでは羽状構成をとる押圧縄文土器、回転縄文土器が出土しており原谷遺跡のⅠ類に類似する。原谷遺跡で見られた無節斜行縄文もB区西断面採取遺物やD区集中部から出土している。伊勢崎市五目牛新田遺跡(註16)は薄手爪形文系土器と多縄文系土器の伴う住居跡3軒と土壌が検出されている。押圧縄文は2本1組の特徴的な文様構成をとるものが目を引くが、18号住居出土土器に無節の斜行縄文も交えている。上記のように原谷遺跡と周辺及び類似資料出土の遺跡を中心にみてきたが、これらの遺跡の中で原谷遺跡の位置付けを考えたい。

日本列島での多縄文系土器の位置付けは、1986年に宮林遺跡の草創期土器群を取り上げた埼玉考古学会主催の「縄文草創期—爪形文系土器と多縄文系土器をめぐる諸問題」をテーマとするシンポジウム(註17)以来活発である(註18)が、その評価をめぐる問題については未解決である。議論の主題は、爪形文、多縄文系土器の属性及び両者の併存する文様構成の意義及び編年の位置付けについて、意見の幅が埋まらず未だ大方の合意が築かれていない(註19)。多縄文系土器の編年については、谷口(註20)の分類と編年観が大方の支持を得ている(註21)ので、『総覧 縄文土器』の谷口案(註22)に拠って原谷遺跡の土器群を位置付けてみる。

爪形文系土器、多縄文系土器の共伴関係による大まかな推移は「厚手爪形文→薄手爪形文系土器・多縄文系土器→多縄文系土器」とされる(註23)。多縄文系土器については、「押圧縄文が卓越する段階→回転文・羽状文が発達する段階」と想定され、押圧縄文土器の中に先行する微隆起線文系土器から系統的な形式変化がたど

れること、及び押圧縄文が主文様となる段階から部分的要素となる段階へは時期差が認められることなどが根拠とされている（註24）。これにより、形式変遷を古期3段階・新規3段階に区分した図表が公開されている。各段階の概要は次のとおりである。

古1段階は先行する微隆起線文系土器・円孔文系土器と共通する「ハの字状爪形文」を有することで、押圧縄文には自縄自巻A種・B種、単軸絡条体第1種、縄側面・先端圧痕が指標となる。該当遺跡には本の木遺跡・小瀬が沢洞窟・西谷遺跡・宮林遺跡・西鹿田遺跡集中部Aなどがある。

古2段階は、水久保遺跡例のように口縁部をくの字状に外反させる器形の出現、各種の押圧縄文が発達、自縄自巻Bの回転文が顕著。該当遺跡には水久保遺跡・長野県石小屋洞窟などがある。

古3段階は、口縁部文様態に文様が集約する傾向となる。口縁部に襟状の段帯を持つものが現れる。線文と点文を組み合わせる幾何学的な文様構成が見られる。該当遺跡には一の沢岩陰・仲道A遺跡などがある。

新1段階は、口縁部文様帯に押圧縄文を集約させる一群で、胴部は回転縄文・羽状縄文を施す。長い側面圧痕・直線・破線・点などを多様した幾何学的な構成をとる。該当遺跡には仲道遺跡・室谷洞窟13-10層・湯倉洞窟などがある。

新2段階は、口縁部文様態が明確で、羽状文・斜縄文を組み合わせるが前段階ほどの幾何学的構成ではなくなる。該当遺跡には櫛引遺跡・室谷洞窟9-6層などがある。

新3段階は、回転縄文が器面全体を被うが口縁部文様帯は不明確となる。器形もくの字状屈曲が見られなくなり単純化する。該当遺跡は、糶の湖遺跡・大谷寺洞穴・鳥浜遺跡・三の原遺跡などがある。

この編年によると、原谷遺跡の主要土器はその特徴から谷口編年の古1段階にあたと想定される。

編年の骨子である「厚手爪形文土器→薄手爪形文土器→多縄文系土器」への流れと「ハの字状爪形文・羽状構成爪形文→ハの字状押圧縄文・羽状押圧縄文」への文様変化を踏まえ、近隣遺跡での前後関係を整理すると、次表のような位置付け想定したい。

江南台地域での縄文草創期研究は緒に就いたばかりである。堆積土の薄い江南の台地では、保存状態の良い遺跡を望むことは難しいだろうが、住居跡などの生活痕跡などの発見に繋げていきたい。

	爪形文系土器群		多縄文系土器群				
	厚手	薄手・古1段階	古2段階	古3段階	新1段階	新2段階	新3段階
文様要素・構成	ハの字状爪形文						
	斜位の爪形文						
			羽状構成の爪形文				
			押圧縄文（羽状構成の押圧縄文）				
			回転縄文（羽状縄文・斜行縄文）				
遺跡	沢口	宮林 打越、小瀬が沢 西谷 水久保 原谷	仲道A 一の沢	湯倉洞窟 室谷洞窟	櫛引 室谷洞窟	糶の湖 大谷寺洞穴 鳥浜	
	下宿	西鹿田中島 五目牛新田 石小屋洞窟					

註

- 1 森田安彦 1994 「江南町萩山遺跡の調査」埼玉県遺跡発掘調査発表会要旨 埼玉考古学会
- 2 村松 篤 1993 「沢口遺跡」川本町遺跡調査会
- 3 立正大学熊谷校舎遺跡調査室 1990 「立正大学熊谷校舎内遺跡の調査(5)」『遺跡調査室年報 V』
- 4 江南町 1995 「野原宮脇遺跡」『江南町史 資料編 1 考古』
- 5 大里郡市埋蔵文化財担当社会 1992 「大里地域の遺跡 1」『埼玉考古 第29号』
- 6 谷口康浩 2009 「多縄文系土器」『総覧 縄文土器』『総覧 縄文土器』刊行委員会
- 7 縄文セミナーの会 2008 『縄文草創期後半の諸様相』第21回縄文セミナー資料
- 8 宮井栄一 他 1985 『大林Ⅰ・Ⅱ 宮林 下南原』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第50集
- 9 中島 宏 2008 「草創期爪形文系土器研究の現状と課題」『縄文草創期後半の諸様相』第21回縄文セミナー資料
- 10 岡部町 2006 「水久保遺跡」『岡部町史 原始・古代資料編』
- 11 岡部町 2006 「西谷遺跡」『岡部町史 原始・古代資料編』
- 12 木村俊彦・中島 宏 1988 「埼玉県滑川町打越遺跡の発掘調査—縄文時代草創期遺物の諸様相—」『日本考古学協会 第54回総会 研究発表要旨』
- 13 岡部町 2006 「西龍ヶ谷遺跡」『岡部町史 原始・古代資料編』
- 14 岡部町 2006 「沼端遺跡」『岡部町史 原始・古代資料編』
- 15 萩谷千明 他 2003 『西鹿田中島遺跡 1』笠懸町教育委員会
萩谷千明 2005 「利根川中流域の縄文草創期編年をめぐる一爪形文系土器と多縄文系土器との関係について考える—」『地域と文化の考古学Ⅰ』明治大学考古学研究室
- 16 渋谷昌彦 他 2006 『五目牛新田遺跡・五目牛南組Ⅱ遺跡・五目牛清水田Ⅱ遺跡・柳田Ⅱ遺跡』伊勢崎市教育委員会
- 17 埼玉考古学会 1988 「縄文草創期—爪形文系土器と多縄文系土器をめぐる諸問題 シンポジウム記録集」『埼玉考古 第24号』
- 18 萩谷千明 2008 「爪形文系土器」『総覧 縄文土器』『総覧 縄文土器』刊行委員会
中島 宏 2008 「草創期爪形文系土器研究の現状と課題」『縄文草創期後半の諸様相』第21回縄文セミナー資料
- 19 註18と同
- 20 谷口康浩 1993 「小瀬が沢洞窟出土土器の編年的考察」『シンポジウム 1 環日本海における土器出現期の様相』日本考古学協会新潟大会実行委員会
- 21 佐藤雅一 2008 「新潟県における縄文時代草創期後半の諸様相」『縄文草創期後半の諸様相』第21回縄文セミナー資料
- 22 谷口康浩 2009 「多縄文系土器」『総覧 縄文土器』『総覧 縄文土器』刊行委員会
- 23 萩谷千明 2008 「関東地方北西部に認められる厚手の爪形文系土器（下宿式土器）とその位置づけについて」『縄文草創期後半の諸様相』第21回縄文セミナー資料
- 24 谷口康浩 2009 「多縄文系土器」『総覧 縄文土器』『総覧 縄文土器』刊行委員会
- 25 石坂 茂 岩崎泰一 1988 「撚糸文系土器文化における石器群の—様相—」『研究紀要 5』財群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 26 鈴木正博 2004 「縄文式草創期「寿能式」の制定とその形式学的射程」『古代』第115号 早稲田大学考古学会
- 27 中島 宏 2002 「室谷下層式土器についての一考察(Ⅱ)」『研究紀要』第24号 埼玉県立歴史資料館
- 28 山内清男 1979 「日本先史土器の縄文」先史考古学会(1997 示人社)

原谷遺跡
寺内遺跡10次
中島遺跡 2次
西遺跡 3次
一本木前遺跡 6次



出土遺物整理報告作業



航空写真 熊谷市柴周辺・拡大 上 1998年撮影 下 2002年撮影

国土地理院撮影

図版2 原谷遺跡



第2号方形周溝墓主体部確認状況(左・垂直、右・東より)



第2号方形周溝墓埋葬主体部確認状況(左・南から、右・西から)



第2号方形周溝墓埋葬主体部発掘状況(左・南から、右・東から)



第2号方形周溝墓埋葬主体部完掘状況(左・北から、右・西から)



第1号方形周溝墓完掘状況（左・北から、右・東から）



第1号方形周溝墓堆積状況



第1・2号方形周溝墓完掘状況（北から）



第2号方形周溝墓確認状況（東から）



第2号方形周溝墓完掘状況（東から）



調査区完掘状況（左・東半、右・西半、北から）



図版4 原谷遺跡



第3号方形周溝墓確認状況（東から）



第3号方形周溝墓遺物出土状態



第2号方形周溝墓下 縄文時代遺物包含層の遺物出土状態 南から



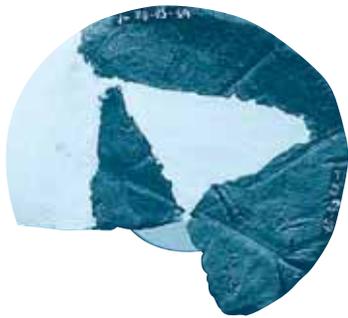
同上 遺物出土状態



第1号集石確認状況



第1号方形周溝墓出土土器（第9図1）



第9図2～8 第1号方形周溝出土土器片



第10図1～15 調査区出土土器



第14図1～30 包含層出土遺物（撚紋土器等）

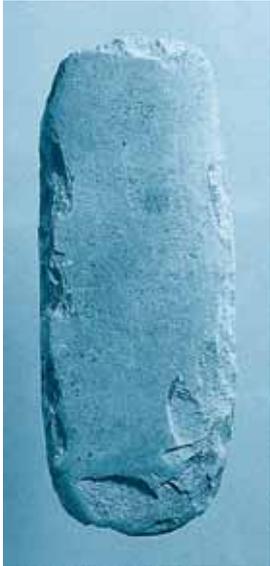
図版 6 原谷遺跡



第14図31～52 包含層出土遺物（無文土器、押型文土器）



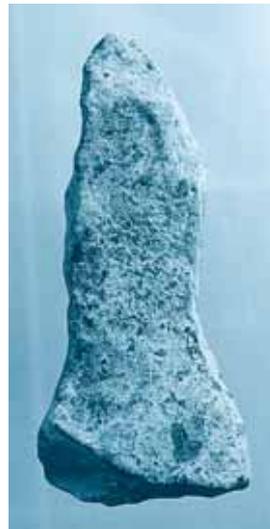
第15図53～77 包含層出土遺物（条痕文土器）



第16図4 局部磨製石斧



第18図30 扁平石器



第16図13 三角錐形石器



第17図20・22～28 包含層出土石器



第18図21・29・31 包含層出土石器

図版 8 原谷遺跡



第17図14 礫器



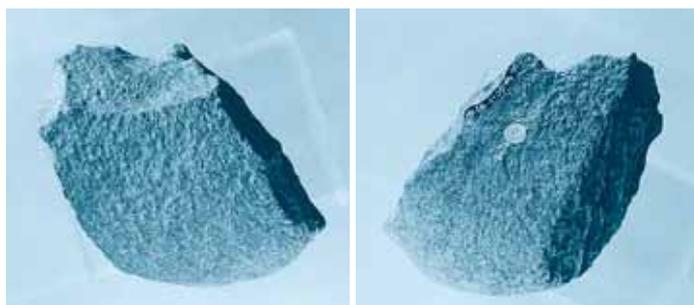
第17図15 礫器



第17図16 礫器



第17図17 礫器

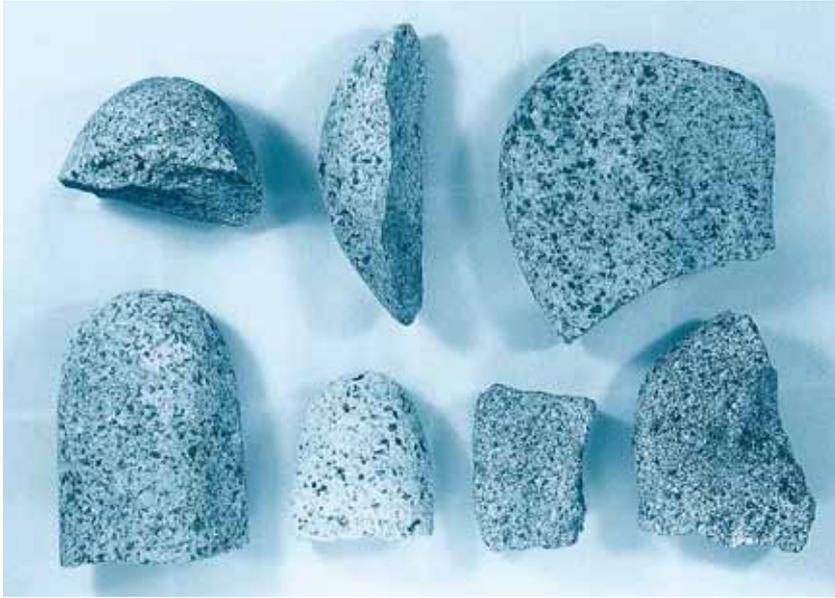


第17図17 礫器



第18図32・33 磨石

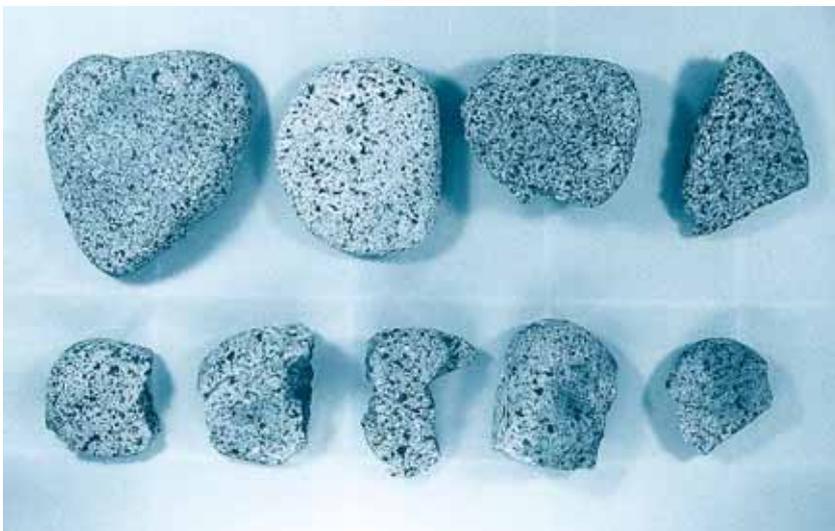
図版 9 原谷遺跡



包含層出土石器
第19図34・36・42・44～46
磨石



第1号集石出土石器
第20図1～4



第1号集石出土石器
第21図5～13

図版10 寺内遺跡



調査前現況
西から



調査区完掘状況
西から

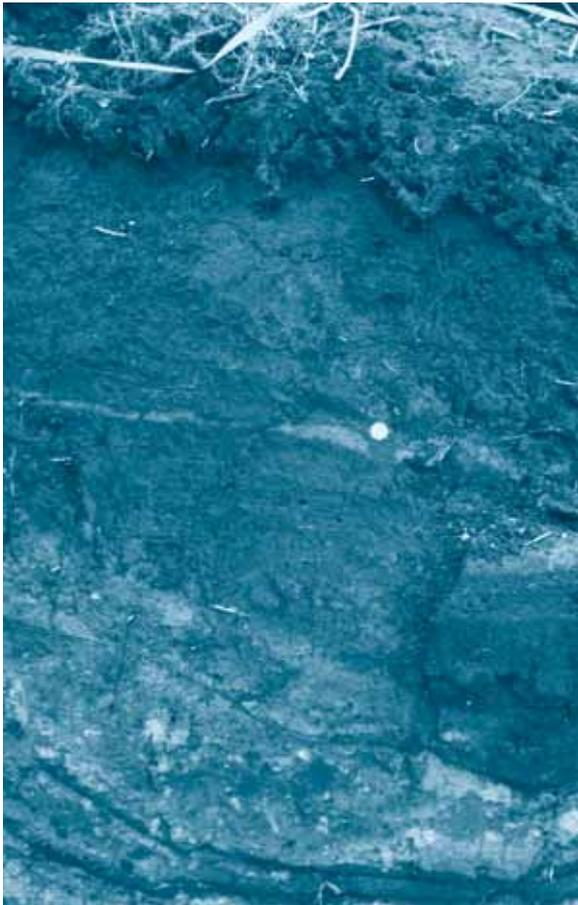


調査区完掘状況
北から



上 埋没谷造成土

左 谷埋没土の状況・造成土の状況

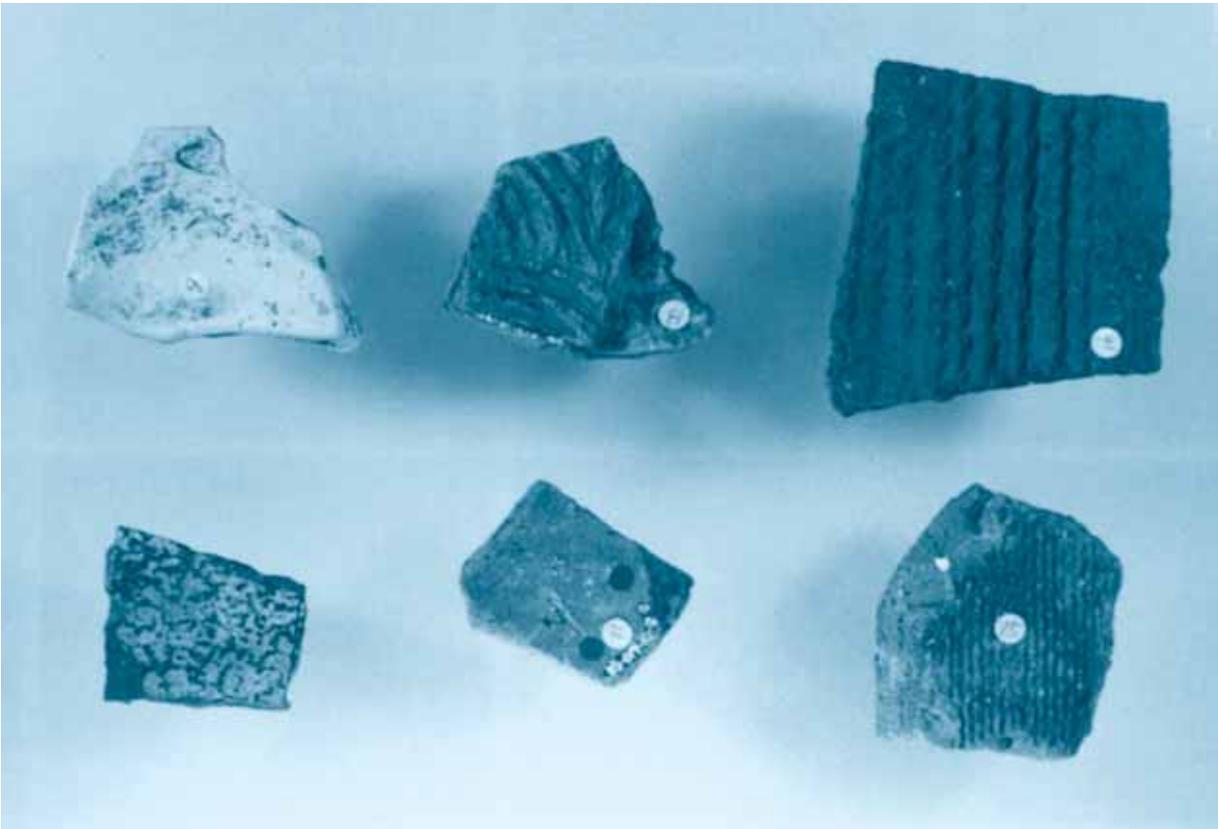
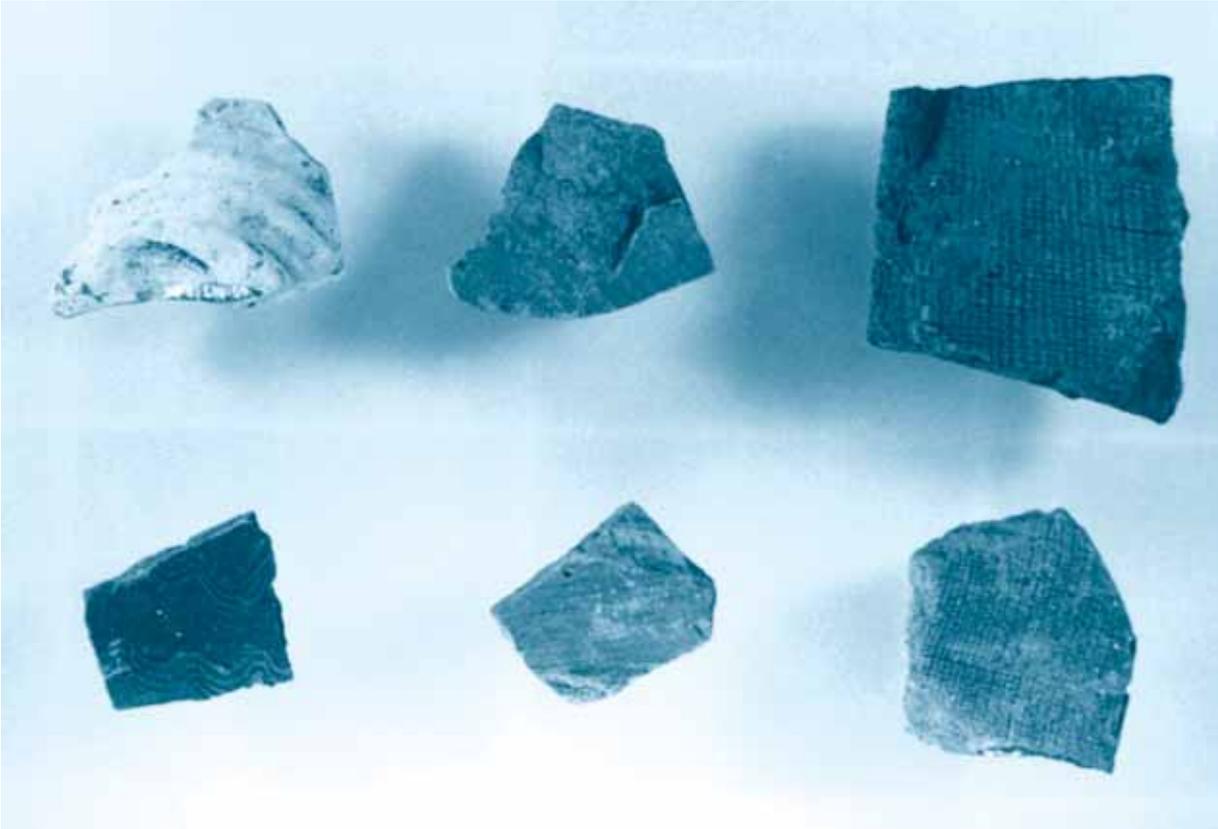


上 谷埋没土中の火山灰層拡大（白丸は百円硬貨）



第25図 1 ~ 9 縄文土器

図版12 寺内遺跡



第25図10～15 造成土出土土器・瓦



調査区完掘状況



第1号住居跡発掘状況



第1号住居カマド石材検出状況



第1号住居跡完掘状況



第2号住居跡椀出土状態



第2号住居跡発掘状況



第1号土B完掘状況



第2号住居跡完掘状況

図版14 中島遺跡



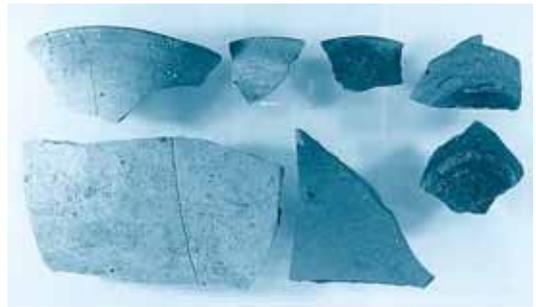
左 第28図13



右 第28図14



左 第28図
8 ~ 12
15・16



右 第28図
1 ~ 7



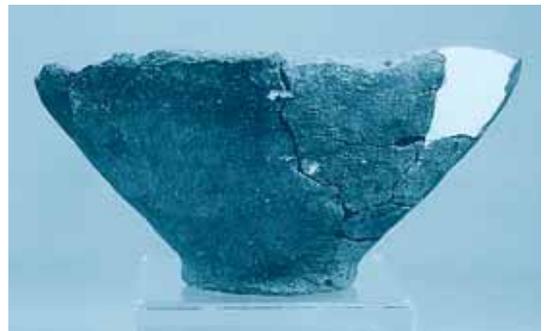
左 第28図19 ~ 21



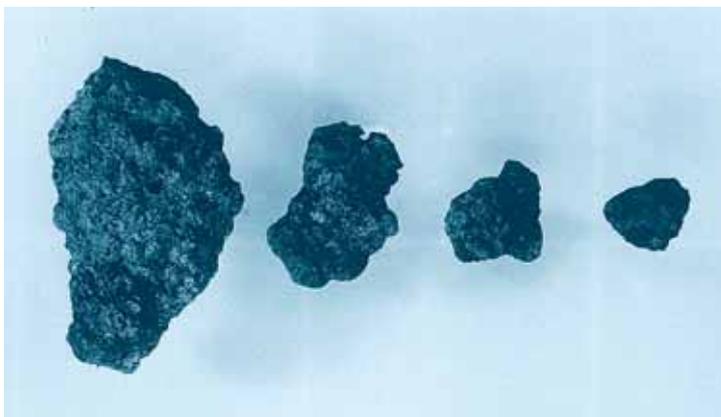
右 第28図18



左 第29図
22 ~ 33



右 第29図34



第29図37・38・39・40 鉄滓



第31図 2



第31図 3



第31図 6



第31図 1



第31図 3



第31図 6



第31図 1



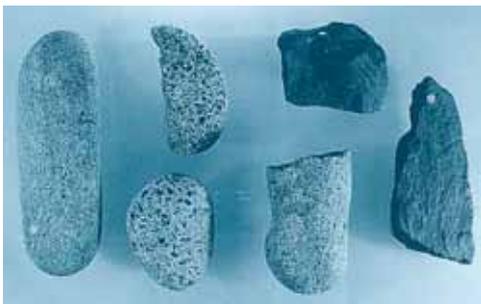
第31図 8・9・10・22・23・25・26



第32図



第33図 2 ~ 10



第33図 12 ~ 17



右 第34図 18 ~ 21

図版16 西遺跡



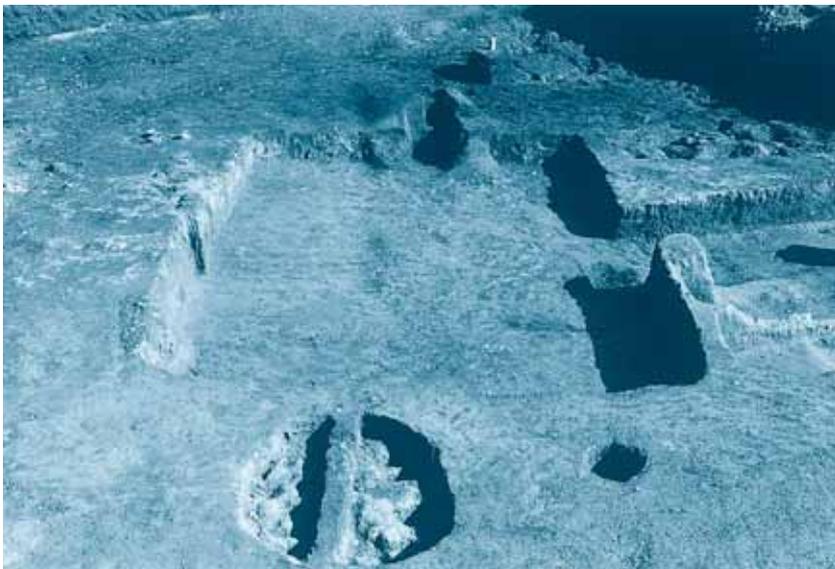
調査区完掘状態



第1号住居跡完掘状況



遺構確認状況



第1号住居跡床検出状況
西から



第1号住居跡・土B検出状況
南から

図版18 西遺跡



第1号住居跡・土B調査状況



第2号住居跡完掘状況



第2号住居跡・土B完掘状況



第39図 1



第39図 16



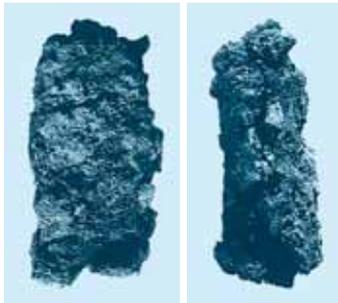
第39図 2 ~ 6 · 8 ~ 12 小片



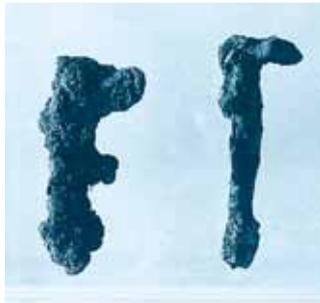
第40図 19 ~ 23 · 31 ~ 39 小片 (古代)



第40図 24 ~ 26 · 30 小片 (中世)



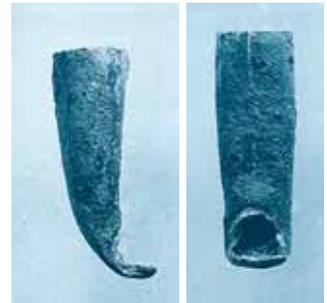
第40図 18



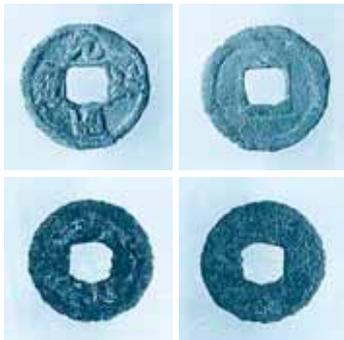
第40図 27 · 28



第40図 17



第40図 40



第40図 29 · 41



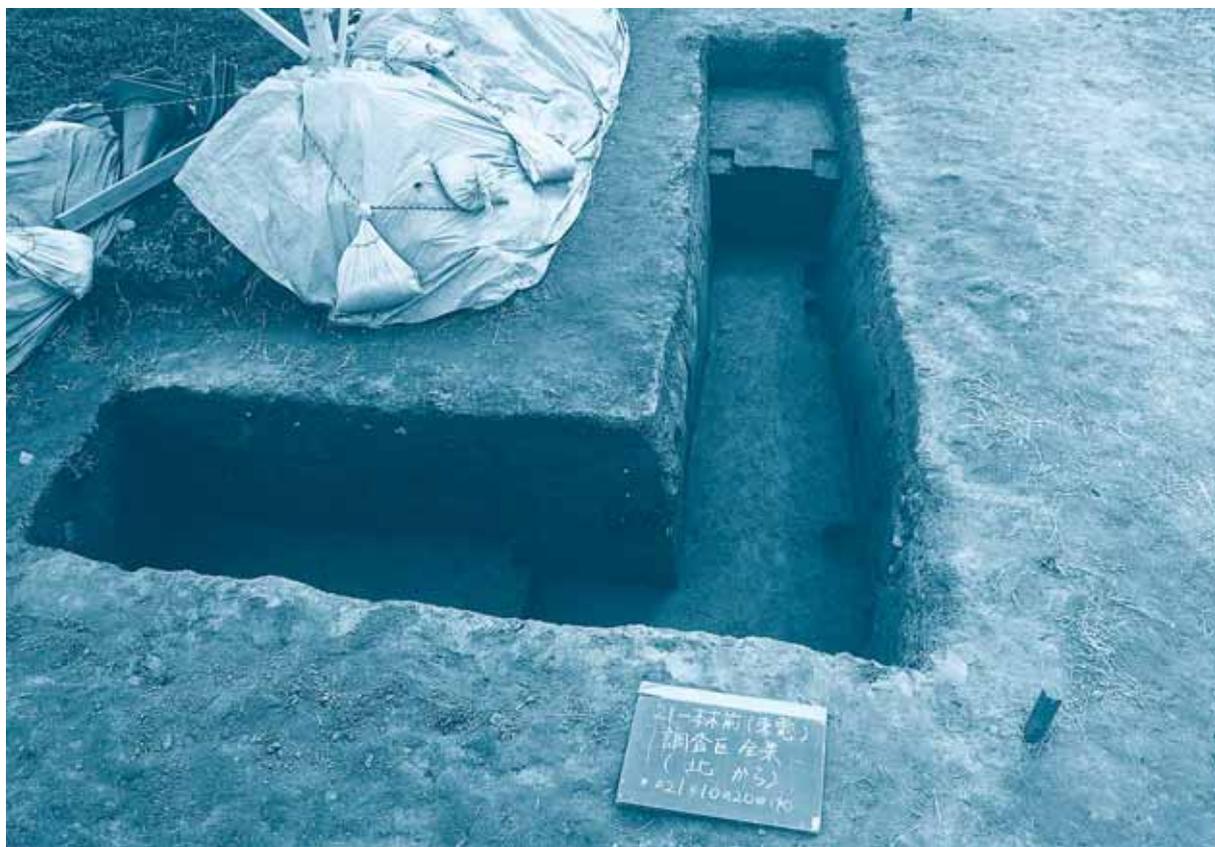
第41図 1



図版20 一本木前遺跡



遺跡遠景 東方より



調査区全景



上 第1号住居遺物出土状態
左 第1号住居跡完掘状況



第46図 1



第46図 5



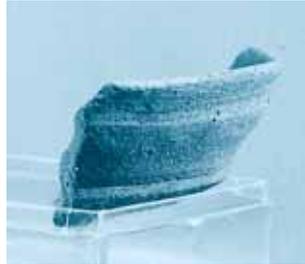
第46図 7



第46図 2



第46図 4



第46図 3



第46図 6



左 第46図14



上 第46図11



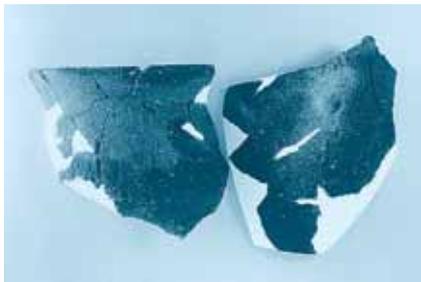
馬歯



第46図17



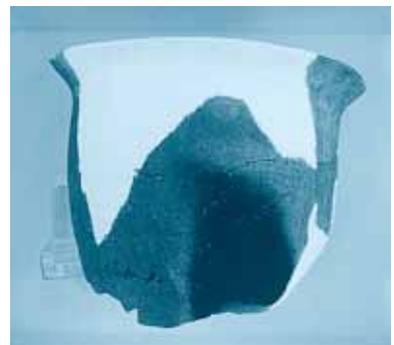
第46図18



第48図27・28



第46図19



第47図21



第47図23



第47図25



第47図22



第46図20



第47図26



第48図32

報告書抄録

ふりがな	はらやつ てらうち なかじま にし いっぽんぎまえ							
書名	原谷遺跡 寺内遺跡10次 中島遺跡2次 西遺跡3次 一本木前遺跡6次							
副書名	東京電力特別高压送電線路鉄塔用地内遺跡発掘調査							
巻次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編集者名	新井 端							
編集機関	熊谷市原谷遺跡調査会							
所在地	〒360-0107 埼玉県熊谷市千代32番地 熊谷市立江南文化財センター TEL048-536-5062							
発行年月日	西暦2010(平成22)年3月15日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		世界測地系		調査期間 調査担当者	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡番号	北緯	東経			
原谷遺跡	熊谷市栗下原27番地1、29番地1	11202	65-050	36° 6 56	136° 19 47	20090217 ~ 20090319 新井 端	121.00	送電鉄塔建設
西遺跡3次	熊谷市栗下168番地1	11202	65-018	36° 6 56	139° 19 14	20090119 ~ 20090219 新井 端	121.00	送電鉄塔建設
中島遺跡2次	熊谷市板井字中島118番地	11202	65-051	36° 6 53	139° 19 0	20081107 ~ 20081211 新井 端	144.00	送電鉄塔建設
寺内遺跡10次	熊谷市板井字谷縁1340番地1、1341番地1	11202	65-017	36° 6 55	139° 18 52	20081211 ~ 20090119 新井 端	121.00	送電鉄塔建設
一本木前遺跡6次	熊谷市上奈良字天神下134番地1、2、3、4	11202	59-100	36° 11 26	139° 21 31	20091005 ~ 20091029 新井 端	7.20	送電鉄塔建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
原谷遺跡	集落跡 古墳跡	縄文・古墳	包含層 方形周溝墓溝 3基		縄文土器・石器 土師器		縄文時代草創期多縄文系土器出土。遺跡内で初めて方形周溝墓を確認、周辺地に低墳丘墓の群在を推定。	
西遺跡3次	集落跡	古代・中世	竪穴住居 方形土壇 3軒 4基		土師器・須恵器			

中島遺跡 2次	集落跡	古墳・中世	住居跡 3軒	土師器・須恵器	寺内廃寺に近接した鍛冶等の工房的建物跡確認
寺内遺跡 10次	集落跡	縄文・古代	土壇 1 整地層 埋没谷	縄文土器・土師器・瓦	寺内廃寺敷地造成土層を確認
一本木前遺跡 6次	集落跡	古墳時代後期	竪穴住居 1軒	土師器・須恵器	遺跡範囲が東側に広がる

原谷遺跡、寺内遺跡 10次
中島遺跡 2次、西遺跡 3次
一本木前遺跡 6次

東京電力(株)特別高圧送電線路鉄塔用地内遺跡
発掘調査報告書

平成 22年 3月 15日 発行

発行 / 熊谷市原谷遺跡調査会
埼玉県熊谷市教育委員会

印刷 / 朝日印刷工業株式会社



さくらのまち“熊谷”